

# 徳島城下町跡 徳島町1丁目地点

—徳島中央警察署新庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2021

徳 島 県  
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

# 徳島城下町跡 徳島町1丁目地点

—徳島中央警察署新庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2021

徳島県  
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

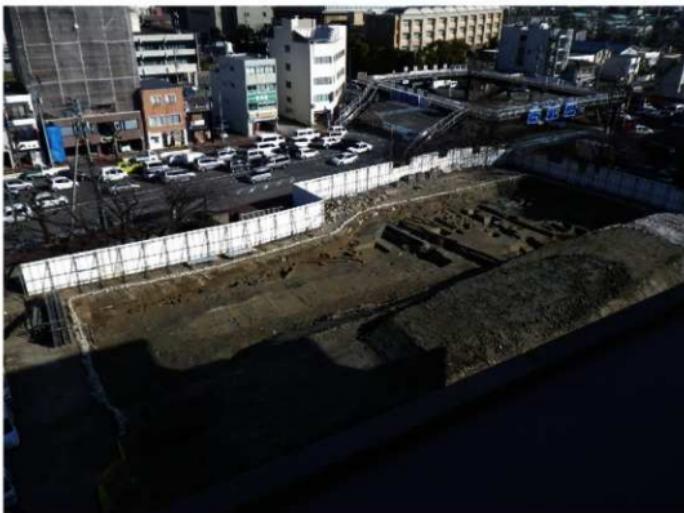




A区 第4遺構面（南から望む）



B区 第4遺構面（西から望む）



A区 第3遺構面 (南西から望む)



B区 第3遺構面 (西から望む)



C区 第4遺構面（北東から望む）



木 55



木 56



木 128



## 序 文

この度、徳島中央警察署新庁舎整備事業に伴う徳島城下町跡徳島町1丁目地点埋蔵文化財発掘調査の正式報告書がまとまりましたのでここに刊行いたします。

徳島市徳島町1丁目地点は、近世期は徳島城の外郭にある「徳島惣構」を構成する「徳島」の一角にあたります。この「徳島」は、徳島藩や藩の家老・中老・物頭等上級家臣の屋敷地によって構成される重要な地域です。今回の調査地は藩の米倉「新御蔵」と徳島藩の水軍を統率した中老「森甚太夫」家の屋敷地に該当し、平成27年度に報告書を刊行した徳島地家簡裁庁舎敷地地点の北側に位置しています。

今回の発掘調査では、屋敷境となる直線的な南北方向の2条の大形溝と柵列を検出したほか、16世紀末から18後半まで使用されていた大形池状遺構からは、上級家臣が日常的に使用していた陶磁器・漆器など各種生活用品が豊富に出土した事が特筆されます。これらの遺構・出土遺物は、これまで文献史料だけでは明らかでなかった徳島藩上級家臣の生活実態等を明らかにする手掛かりとなり、今後の研究を進める上に貴重な資料となるものです。

今後、本書が当該地域及び本県の歴史を解明する上で貴重な資料として活用され、広く文化財保護の一助となることを期待したいと思います。

末尾ではありますが、この度の発掘調査の実施により、貴重な成果を上げることができましたのも、関係の皆様の多大な御理解、御協力のお陰であり、心から感謝申し上げる次第です。また、発掘調査及び報告書作成等に当たっては、徳島県をはじめ関係各位から貴重な御指導・御教示を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、今後も、当センターの事業について一層御支援下さるようお願い申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
理事長 福家清司



## 例　　言

- 1 本書は徳島中央警察署新庁舎整備事業に伴い平成 30（2018）年度に発掘調査を実施した徳島城下町跡徳島町 1 丁目地点（徳島市徳島町 1 丁目）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および報告書作成は、徳島県警察から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターが受託し実施した。
- 3 発掘調査および発掘調査報告書作成の期間は次の通りである。

|              |  |
|--------------|--|
| ・発掘調査期間      | 平成 30（2018）年 7 月 1 日～平成 31（2019）年 3 月 31 日   |
| ・発掘調査報告書作成期間 | 令和元（2019）年 10 月 1 日～令和 2（2020）年 1 月 31 日<br>令和 2（2020）年 4 月 1 日～令和 3（2021）年 3 月 31 日 |
- 4 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
- 5 第 2 図は、国土地理院発行の 1：25,000 の地形図「三本松」「鳴門海峡」「川島」「徳島」を転載使用した。第 6 図は国土地理院発行の 1：25,000 の地形図「徳島」を転載・改編した徳島県教育委員会発行の『徳島県遺跡地図 第 2 分冊一遺跡地図編一』を転載・改編した。
- 6 発掘調査および報告書作成期間を通じて次の方々ならびに諸機関の御協力・御指導を得た。

植地 岳彦　勝浦 康守　中村 豊　根津 寿夫　早渕 隆人（敬称略）  
徳島地方・家庭・簡易裁判所　徳島県教育委員会　徳島県文化資源活用課　徳島市教育委員会  
徳島県立博物館　徳島市立徳島城博物館　徳島新聞社
- 7 本書の執筆は I -1 を徳島県文化資源活用課が、その他を岡田圭司が担当した。全体の編集は岡田が行い、写真撮影は、木簡の赤外線写真を植地岳彦（徳島県立博物館）が行い、その他の遺物は岡田が行った。調査時は調査担当者が行った。
- 8 本遺跡から出土した木製品の保存処理は、一部を元興寺文化財研究所に委託し、その他を植地岳彦（徳島県立博物館）の御指導・御協力を基にして当センターで行った。
- 9 本書に収録した遺物及び写真・図版などの記録の一切は、徳島県立埋蔵文化財総合センター（所在地：徳島県板野郡板野町犬伏字平山 86 番 2）に保管している。また、収納遺物には当該遺跡名を「18 T J K A」と略称し注記を行っている。

## 凡　例

- 1 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による記号を使用した。  
SA 掘立柱建物 SD 溝 SE 井戸 SJ 棚列 SK 土坑  
SP 柱穴 SX 性格不明土坑
- 2 方位は国土座標軸世界測地系を用い、高さは東京湾標準潮位（T.P.）を表す。
- 3 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』2010年度版によった。
- 4 掲載した遺物実測図の縮尺は、基本的に1/4である。大形の場合は、随時1/5～1/8の縮尺に変えた。金属製品・漆器椀・木筒など小形の場合や詳細に示したい場合は、等倍・1/2で掲載している。遺物への付着物や墨書き・漆器には必要に応じてスクリーントーンで表現している。
- 5 卷頭図版1上段ならびに卷頭図版2の下段の写真的ブルーシートについては色が目立つため変えている。

# 本文目次

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| I. 発掘調査に至る経緯と経過.....     | 1   |
| 1. 発掘調査に至る経緯.....        | 1   |
| 2. 発掘調査と整理の経過.....       | 2   |
| 調査日誌抄.....               | 6   |
| 調査組織および整理体制.....         | 7   |
| II. 調査地点の立地と環境.....      | 8   |
| 1. 地理的環境.....            | 8   |
| 2. 歴史的環境.....            | 9   |
| III. 調査成果.....           | 13  |
| 1. 基本層序.....             | 13  |
| 2. 遺構と遺物.....            | 51  |
| (1) 第4遺構面.....           | 51  |
| ① A B区溝 (S D).....       | 51  |
| ② A B区柵列 (S J).....      | 57  |
| ③ A B区土坑 (S K).....      | 57  |
| ④ A B区柱穴 (S P).....      | 59  |
| ⑤ A B区性格不明土坑 (S X).....  | 60  |
| ⑥ A B区第4遺構面・第4遺物包含層..... | 76  |
| ⑦ C区土坑 (S K).....        | 79  |
| ⑧ C区性格不明土坑 (S X).....    | 79  |
| ⑨ 木製品.....               | 81  |
| (2) 第3遺構面.....           | 91  |
| ① A B区溝 (S D).....       | 91  |
| ② A B区井戸 (S E).....      | 99  |
| ③ A B区土坑 (S K).....      | 100 |
| ④ A B区柱穴 (S P).....      | 102 |
| ⑤ A B区性格不明土坑 (S X).....  | 110 |
| ⑥ A B区第3遺物包含層.....       | 131 |
| ⑦ C区土坑 (S K).....        | 133 |
| ⑧ C区柱穴 (S P).....        | 134 |
| ⑨ C区性格不明土坑 (S X).....    | 135 |
| ⑩ C区第3遺物包含層.....         | 142 |
| ⑪ 木製品.....               | 142 |

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| (3) 第2遺構面                    | 164 |
| ① A B区溝 (S D)                | 164 |
| ② A B区土坑 (S K)               | 165 |
| ③ A B区柱穴 (S P)               | 175 |
| ④ A B区性格不明土坑 (S X)           | 175 |
| ⑤ A B区第2遺物包含層・第2遺構面          | 192 |
| ⑥ C区溝 (S D)                  | 192 |
| ⑦ C区土坑 (S K)                 | 196 |
| ⑧ C区柱穴 (S P)                 | 196 |
| ⑨ C区性格不明土坑 (S X)             | 196 |
| (4) 第1遺構面                    | 201 |
| ① A B区溝 (S D)                | 201 |
| ② A B区土坑 (S K)               | 201 |
| ③ A B区性格不明土坑 (S X)           | 205 |
| ④ C区溝 (S D)                  | 206 |
| ⑤ C区土坑 (S K)                 | 208 |
| ⑥ C区性格不明土坑 (S X)             | 208 |
| (5) 遺物                       | 216 |
| ① 墨書き土器                      | 216 |
| ② 瓦 軒丸瓦 軒平瓦 稲追二束文軒丸瓦 刻印瓦     | 216 |
| ③ 玩具 加工円盤 芥子面・人形 ままごと道具・箱庭道具 | 232 |
| ④ 貝殻                         | 236 |
| ⑤ 動物遺存体                      | 243 |
| ⑥ 被熱溶解ガラス                    | 248 |
| ⑦ トレハロース含浸法による木製品保存処理        | 250 |
| IV.まとめ                       | 254 |
| V.観察表                        | 257 |
| VI.写真図版                      | 267 |
| 報告書抄録                        | 278 |

# I. 発掘調査に至る経緯と経過

## 1. 発掘調査に至る経緯

徳島地方裁判所、徳島家庭裁判所及び徳島簡易裁判所（以下「徳島地家簡裁」という。）の庁舎は、明治 11（1878）年に現在の敷地である徳島市徳島町 1 丁目 5 に建設されたが、大戦中の戦災によって庁舎は一時焼失した。その後、昭和 24（1949）年に木造二階建庁舎を再建し、さらに昭和 41（1966）年に鉄筋三階建の庁舎が建設された。そして平成 28（2016）年には、建物の経年劣化などにより、新たに鉄筋地上六階地下一階建の庁舎が建設された。新庁舎の外観は、各階に大きく張り出した庇を巡らせているのが特徴で、その位置は、従来の庁舎と比べ敷地南側に建てられている。徳島地家簡裁新庁舎建設によって敷地北側は旧庁舎跡地の空地となった。

徳島東警察署（現徳島中央署）庁舎は、昭和 46 年 8 月に建設され、昭和 53 年 11 月に車庫などが増築されている。徳島中央警察署新庁舎整備事業は、徳島地家簡裁旧庁舎跡地の敷地に新庁舎建設を行い移転することで、徳島東警察署（現徳島中央警察署）庁舎の老朽・狭隘化などの問題解消や、大規模災害時においても治安・防災の拠点（新防災センター）としての機能を強化するために行われることとなつた。

徳島東警察署庁舎の裁判所庁舎跡地への移転、新営計画に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成 27 年 9 月 29 日に徳島県警察本部拠点整備課（以下、「拠点整備課」という。）と徳島県教育委員会教育文化政策課（以下、「教育文化課」という。）の間で協議が持たれた。事前に試掘調査を実施し、徳島藩蔵屋敷や中老屋敷等の遺構が確認された場合は、工事着手前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存措置を講ずることで合意している。試掘調査は、裁判所旧庁舎の撤去と跡地が県に移管される平成 29 年度に実施することとした。

徳島地家簡裁新庁舎の完成により、旧庁舎並びに仮庁舎の撤去工事が平成 28 年 12 月より開始された。旧庁舎の基礎撤去にあたり、平成 29 年 2 月 21・28 日に教育文化課が行った工事立会では、旧庁舎の基礎並びに地中梁により遺跡が相当程度の損壊を受けていることを確認した。このため試掘調査の際には、遺構の確認と合わせて、建物基礎及び地中梁による遺跡損壊の範囲を把握することも必要となつた。平成 29 年 5 月 8 日、最高裁判所から財務省に跡地が移管され、財務省の協力により試掘調査が可能となつた。これを受け、拠点整備課から教育文化課に試掘調査の依頼（平成 29.5.24 徳拠第 180 号）がなされ、教育文化課は承諾（平成 29.5.26 教文課第 193 号）し、平成 29 年 6 月 6 日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、すべての試掘トレチより徳島城下町跡から遺物・遺構が検出され、また、トレチのうちの一つでは、4 面の遺構面が存在することが分かった。これらの試掘結果と周辺の発掘調査成果、さらに江戸時代の町絵図などと比較検討した結果、当該箇所においては幕末から幕藩体制以前の時代に亘る、4 面の遺構面が存在し、それは藩の蔵屋敷である「新御蔵」ならびに中老「森甚太夫家」の屋敷であると考えられた。しかしながら、裁判所旧庁舎の範囲では遺跡の損壊を受け、それは地中梁施工部分では遺構面がすべて損壊しており、僅かに梁の間で 1 面ないし 2 面の遺構面を確認するに止どまっていた。調査地、明治以降すぐに官公庁敷地になったことから、その他の近代以降の開発に伴う

遺跡の破壊の可能性が少ないことが想定された。以上のことから、東警察署新庁舎の建設位置と面積が決定次第、発掘調査の範囲と期間などを改めて検討することとなる旨を回答した。(平成 29.6.28 教文課第313号)。

この試掘調査の結果を受けて、平成 29 年 12 月 6 日に教育文化課と拠点整備課との間で協議がもたれ、新庁舎建設によって遺跡が損なわれる部分について工事着手前に埋蔵文化財発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることで合意した。その後、事業の進捗に従って、教育文化課と拠点整備課は、調査面積、期間及び開始時期などについて協議を重ね、平成 30 年度に発掘調査を実施することとした。

この発掘調査については、徳島県が公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター（以下「埋蔵文化財センター」という。）に委託して実施した。発掘調査は平成 30 年 7 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日までの 9 ヶ月間で、表面積 1,595m<sup>2</sup>、延べ面積 5,820m<sup>2</sup> である。調査の結果、幕藩体制成立期から幕末期までの遺構を検出し、コンテナ 200 箱分の遺物が出土している。特に、第 3 遺構面・第 4 遺構面で検出した池状遺構からは漆工芸品・漆椀・箸などの木製品ならびに煙管などの鉄製品をはじめ、多くの遺物が出土した。池状遺構は屋敷境と考えられる南北に延びる 2 条の溝跡と隣接しており、屋敷境の機能のあり方について貴重な資料を得ることができた。

出土品整理業務については、文化資源活用課（令和元年 5 月 1 日に教育文化課から移管した。）と拠点整備課との協議が重ねられ、平成 31 年度（令和元年度）と令和 2 年度の 2 ヶ年間に延べ月数 16 ヶ月間で実施すること、埋蔵文化財センターに委託して実施することなどを決定した。1 年目は、令和元年 10 月から令和 2 年 1 月まで整理業務を実施した。遺物の洗浄・注記・接合復元などの基礎整理を中心に行な一方、木製品の洗浄・実測作業、木簡の読みなども同時に行なったが、その結果、これらの重要な木製品遺物について適切な保存処理を施す必要が生じた。このことについて文化資源活用課と拠点整備課とは協議をもち、整理業務において、これらの木製品についての保存処理を施すことで同意した。上記の木製品の保存処理のほか、遺物・遺構のトレース、写真撮影、報告文執筆等、報告書の刊行に向けて整理作業を行った。

（文化資源活用課）

## 2. 発掘調査と整理の経過

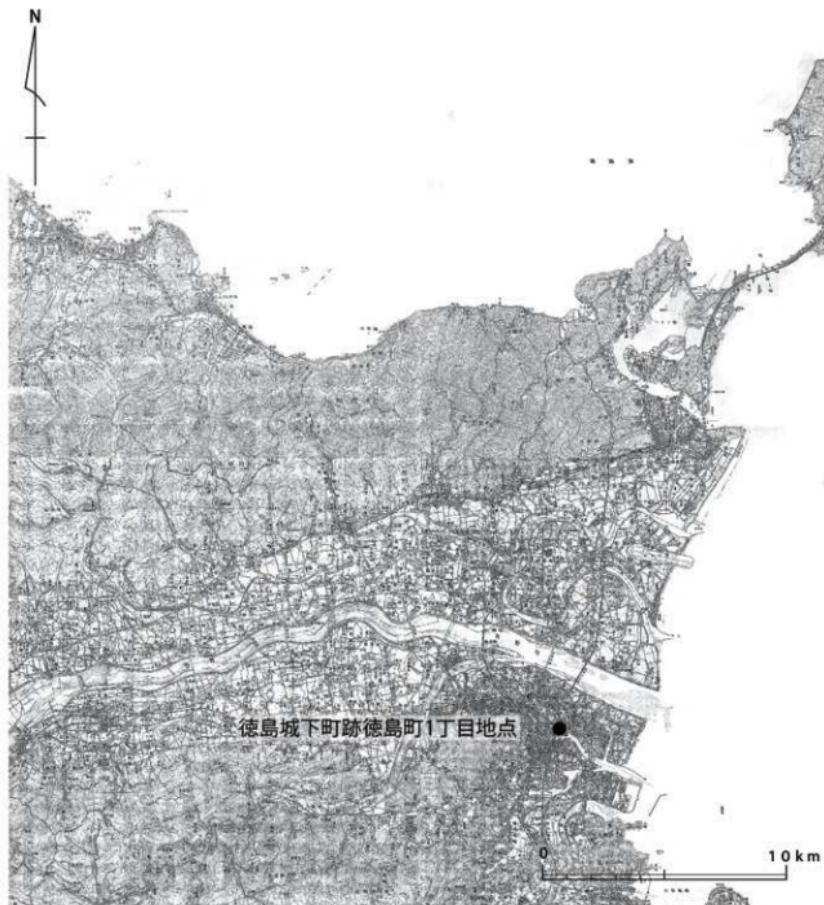
当該調査範囲は、平成 30 年度徳島中央警察署新庁舎整備事業によって建設される建物などの工事範囲を調査区として設定した。

調査によって検出した遺構・遺物などの測量・図化に関しては世界測地系を基準に用いた。今回の調査の測量および図化の基準として用いた平面座標は世界測地系第 4 系を使用し、X=119,000、Y=97,500 を大グリッド（一辺 500 m）の基準点として Lo c .1 を設定した。5 m ごとに分割して小グリッドを設定した。南西隅を a - 1 とし、北方向に a • b • c …、東方向に 1 • 2 • 3 …として。アルファベット小文字とアラビア数字の組み合わせによって小グリッドを a - 1 • b - 2 のように表記した。なお、高さについては東京湾平均潮位 (T.P.) を用いている。

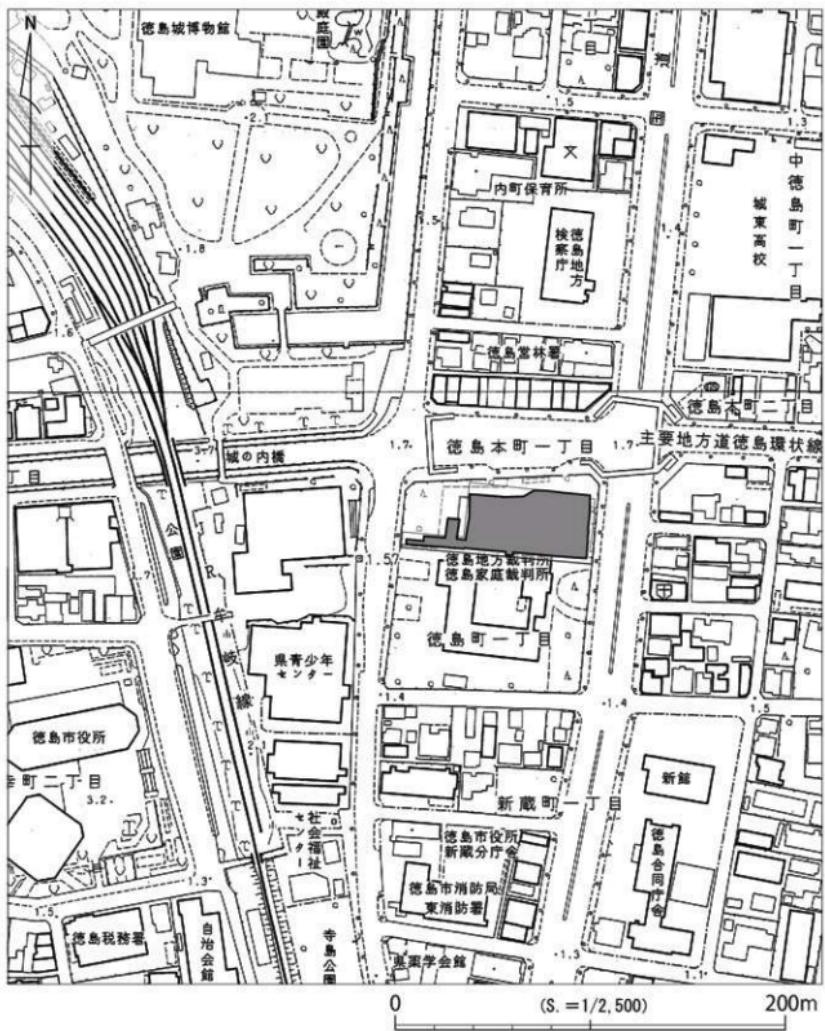
当該発掘調査は平成 30 年 7 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日までの延べ 9 カ月間で行われた。調査表面積 1,595m<sup>2</sup> は、本報告で図示した範囲であるが、これは、教育文化課が調査対象範囲である建物建設工事範囲から控えを取って設定した調査範囲である。調査範囲は、隣地の裁判所敷地境界や道路境界付近にまで及ぶことから、安全面を考慮して控えを設けた範囲となっている。そのため調査対象範囲と

調査範囲に差を設けたことで、様々な調査のための設計状況に多少なりとも変化が生じている。

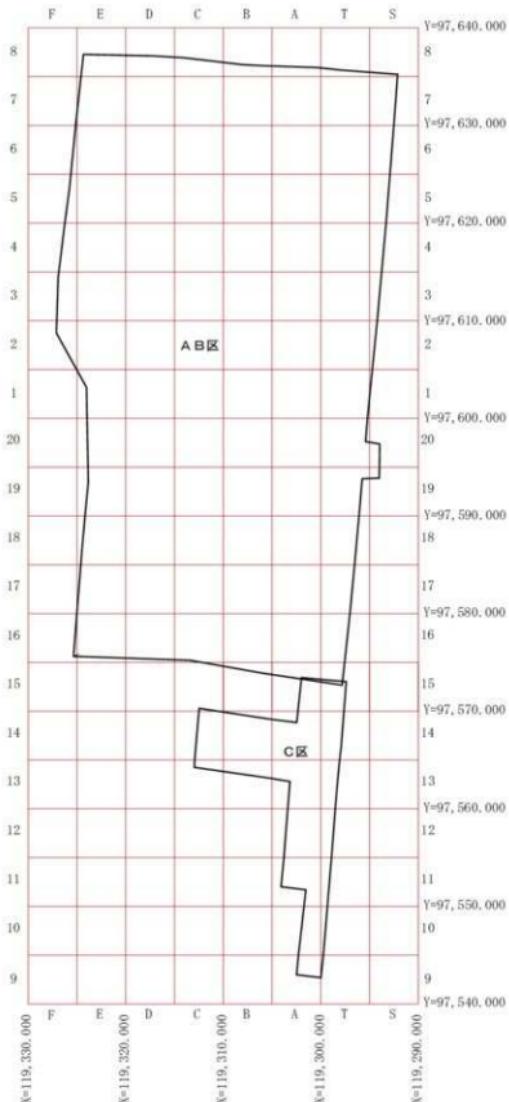
発掘調査は重機ならびに人力掘削により行った。調査区を3区に分け、東南側のB区、東北側のA区、西側C区の順で着手した。A区とB区は大きな調査区を二つに分けて調査を行ったため、遺構番号を連番とした。C区の遺構番号は新たに設定して行った。そのため、調査区名を付けて呼び分けている。調査区の土層堆積状況は調査区全体で土層の基本構成が共通していた。ただし、今回の発掘調査区内の旧裁判所庁舎建物の範囲など、近現代の搅乱を受けており、遺構が失われている部分も少なくなかった。



第1図 徳島城下町跡徳島町1丁目地点 位置図



第2図 德島城下町跡徳島町1丁目地点調査地 位置図



第3図 当該調査区座標配置

## 発掘調査日誌抄

平成30年（2018年）

- 7月1日 発掘調査開始  
7月2日 万能板設置作業・測量作業  
7月6日 発掘器財搬入  
7月9日 挖削機材搬入  
7月10日 調査B区人力及び機械掘削開始  
7月17日 第1遺構面検出作業  
7月18日 第1遺構面検出状況写真撮影  
7月19日 第1遺構面遺構掘削・図面作成  
7月25日 第1遺構面遺構完掘状況写真撮影  
7月26日 第2包含層掘削・図面作成  
7月27日 台風接近により調査地養生  
8月6日 第2遺構面遺構検出状況写真撮影  
8月17日 第2遺構面遺構掘削・図面作成  
8月20日 夏休みおもしろ古代体験  
　　発掘体験－遺跡を掘ろう一開催  
　　参加者21名  
8月21日 内町児童館23名見学・発掘体験  
8月23日 台風接近により調査地養生  
8月31日 第2遺構面遺構完掘状況写真撮影  
9月3日 図面作成作業  
9月6日 第3遺物包含層掘削  
9月19日 第3遺構面遺構検出状況写真撮影  
　　第3遺構面遺構掘削  
9月28日 台風接近により調査地養生  
10月4日 雨天による室内作業～10月10日  
10月11日 図面作成作業  
10月19日 第3遺構面完掘状況写真撮影  
10月22日 図面作成作業  
10月24日 第4遺物包含層掘削  
11月5日 第4遺構面検出状況写真撮影  
11月6日 第4遺構面遺構掘削  
11月22日 図面作成  
12月4日 調査B区埋戻し  
12月10日 調査A区人力ならびに機械掘削  
12月11日 第1遺構面検出状況写真撮影

12月12日 第1遺構面遺構掘削

- 12月13日 図面作成作業  
12月14日 第2遺物包含層掘削  
12月18日 第2遺構面遺構検出写真撮影  
12月19日 図面作成  
12月20日 第3遺物包含層掘削  
12月27日 第3遺構面遺構検出状況写真撮影  
12月28日 第3遺構面遺構掘削

平成31年（2019年）

- 1月22日 第3遺構面完掘状況写真撮影  
1月23日 図面作成  
1月25日 第4遺物包含層掘削  
1月30日 第4遺構面遺構検出状況写真撮影  
2月1日 第4遺構面遺構掘削  
2月8日 第4遺構面遺構完掘状況写真撮影  
2月12日 図面作成  
2月18日 調査A区埋戻し  
2月25日 調査C区人力及び機械掘削  
2月26日 第1遺構面遺構検出状況写真撮影  
2月27日 第1遺構面遺構掘削・図面作成  
2月28日 第1遺構面遺構完掘状況写真撮影  
　　図面作成  
3月4日 第2遺構面遺構検出状況写真撮影  
3月5日 第2遺構面遺構掘削・図面作成  
3月7日 第2遺構面遺構完掘状況写真撮影  
3月8日 第3遺構面遺構検出状況写真撮影  
3月11日 第3遺構面遺構掘削・図面作製  
3月13日 第3遺構面遺構完掘状況写真撮影  
3月14日 第4遺構面遺構検出状況写真撮影  
3月15日 第4遺構面遺構掘削・図面作成  
3月22日 第4遺構面遺構完掘状況写真撮影  
3月25日 図面作成  
3月26日 調査区埋戻し・万能板撤去  
3月27日 調査器財・掘削機材搬出  
3月31日 発掘調査終了

整理作業は令和元年10月1日から令和2年1月31日までの4カ月間と令和2年4月1日から令和3年3月31日までの12カ月間であり、合計16カ月間で行った。

作業内容は出土遺物の洗浄・記載・接合・実測・図面トレース・観察表の作成、遺構については図面トレース、図版のレイアウト、観察表の作成をそれぞれ行い、原稿の執筆と合わせて報告書全体のレイアウトを行った。

調査組織および発掘体制、整理体制は以下の通りである。

### 【調査組織および発掘体制】

平成30年度（2018年度）

|            |       |       |       |
|------------|-------|-------|-------|
| 理事長        | 福家 清司 | 事業課   |       |
| 事務局長（専務理事） | 湯浅 利彦 | 課 長   | 藤川 智之 |
| 総務課        |       | 課長補佐  | 氏家 敏之 |
| 課 長        | 住友 健  | 調査係   |       |
| 庶務係        |       | 主任研究員 | 岡田 圭司 |
| 主任主事       | 上松健一郎 | 研究補助員 | 森本 豊誠 |

### 【調査組織および整理体制】

平成31年度・令和元年度（2019年度）

|            |                        |       |                        |
|------------|------------------------|-------|------------------------|
| 理事長        | 福家 清司                  | 主任    | 吉岡 正幸                  |
| 事務局長（専務理事） | 湯浅 利彦                  |       | （令和元年5月1日～）            |
| 総務課        |                        | 事業課   |                        |
| 課 長        | 住友 健<br>（～平成31年4月30日）  | 課 長   | 藤川 智之<br>（～平成31年4月30日） |
|            | 藤川 智之<br>（令和元年5月1日～）   |       | 氏家 敏之<br>（令和元年5月1日～）   |
| 庶務係        |                        | 整理係   |                        |
| 主任主事       | 上松健一郎<br>（～平成31年4月30日） | 専門研究員 | 田川 憲                   |

### 【調査組織および整理体制】

令和2年度（2020年度）

|            |       |       |       |
|------------|-------|-------|-------|
| 理事長        | 福家 清司 | 主 査   | 島田佳世子 |
| 事務局長（専務理事） | 湯浅 利彦 | 事業課   |       |
| 総務課        |       | 課 長   | 氏家 敏之 |
| 課 長        | 藤川 智之 | 整理係   |       |
| 庶務係        |       | 主任研究員 | 岡田 圭司 |

## II. 調査地点の立地と環境

### 1. 地理的環境

四国東部には、吉野川北岸の讃岐山脈南麓を東西に横断する中央構造線が存在する。この中央構造線は、境界断層であり、地質構造の違いからこれより北側を西南日本内帯、南側を西南日本外帯と呼んでいる。西南日本内帯のうち、四国には領家帯が存在し、中央構造線に接している。領家帯は、和歌山沖の南海トラフで沈み込むフィリピン海プレートの影響によって、マグマ上昇に伴い発生した高温低圧の変成岩や花崗岩で形成される。また、西南日本内帯の南縁部には、和泉層群が領家帯の上に帯上に堆積している。それは松山平野の南西から徳島県と香川県境にある讃岐山脈南麓、淡路島南部の諭鶴羽山地を通り大阪府と和歌山県の境にある和泉山脈に至るまで、東西300km、南北幅最大15kmにわたっている。この和泉層群は、主に海底で堆積した砂岩・礫岩・泥岩からなり、中央構造線の左横ずれ断層運動による沈降で形成された海盆への堆積層である。

西南日本外帯のうち、四国には北から順に三波川帯・御荷鉢帯・秩父帯・四十万帯が形成されている。御荷鉢帯は、三波川帯と秩父帯との境界に断続的に弱く帯状に分布する地層である。それらの間に、西南日本内帯との境界をなす中央構造線、三波川帯と秩父帯の境界をなす御荷鉢構造線、秩父帯と四十万帯の境界をなす仏像構造線が東西方向に延びている。三波川帯はフィリピン海プレートの沈み込みを受け低温高圧型の変成を受け、緑色結晶片岩、緑色片岩と泥質片岩が重なり合う層から成る。吉野川にこれらの岩石が認められるのはこのためである。

西南日本内帯の讃岐山脈は、中生代白亜紀の砂岩と泥岩質の頁岩とが重なる層から成り、浸食が進んだならかな地形である。讃岐山脈には、鳴門板野古墳群など多くの古墳群が形成されており、一般には高度が低く、山麓には扇状地が発達している。一方で、西南日本外帯は壯年期の険しい地形で平地が極めて少なく、急峻な四国山地がそびえている。そのため、徳島県は、面積4,144.23km<sup>2</sup>のうち、約8割を山地で占め、平野は約2割である。

徳島県の河川は、四国山地北側の吉野川水系と南部の那賀川水系、勝浦川など四国山地から東流して紀伊水道に注ぐ河川が代表的である。これら河川は境界断層による構造線の影響を受けており、吉野川は中央構造線、勝浦川は御荷鉢構造線、那賀川は仏像構造線に沿うように流れている。

各河川の流域には沖積平野が形成されているが、吉野川は別名四国三郎と呼ばれる四国最大の集水域をもち、その下流域に細長い末広がりの肥沃な沖積平野である徳島平野を形成している。

徳島城下町跡徳島町一丁目地点は、この徳島平野の吉野川南岸下流域に位置し、徳島県徳島市徳島町に所在する。吉野川下流域はかつて旧河道が網目状に広がり氾濫や洪水を繰り返してきた地域である。当該調査地は、城山の東側の徳島地区にあたり、この地区は吉野川河口南岸のデルタのひとつに位置し、地質学上は北側及び東側を助任川、南側を新町川に囲まれた三角州状に立地する地域にあたる。

#### (参考文献)

福井好行「吉野川下流域に於ける流路の変遷」『阿波の歴史地理 第一』1964年

寺戸恒夫「徳島県の地形」『阿波の絵図』徳島建設文化研究会 1994年

平井正午「城下町起源の都市徳島」寺戸恒夫「徳島の地理」徳島地理学会 1995年

古田 畏「徳島県吉野川・鈴鹿川下流域平野の沖積層の形成過程」『立命館地理学』8号 1996年

## 2. 歴史的環境（第4図）

当該周辺は、徳島県の最東部にあたり、吉野川によって形成された堆積地形である。これは吉野川によって運ばれた碎屑物（礫・砂・泥）が河口域に堆積し、土壌化した沖積平野である。当該遺跡は、この吉野川右岸の沖積平野に立地している。

当該遺跡は、江戸時代には徳島城の外郭にあたる「徳島惣構」を構成する「徳島」の一角にあたる。この「徳島」は徳島城の東側に位置し、徳島藩蔵や藩の家老・中老・物頭等上級家臣の屋敷地によって構成される。今回の調査地点は、徳島城下町成立期にあたる正保3（1645）年「阿波國徳島城之図」には「蔵屋敷」として記載されている。また、安政年間（1854～1860）作製の「御山下島分絵図（徳島）」には「新御蔵」の敷地と、徳島藩中老「森甚太夫」家の敷地として描かれている。江戸時代を通して、ここは徳島藩御蔵や上級武家屋敷地の一角にあたることがいえよう。

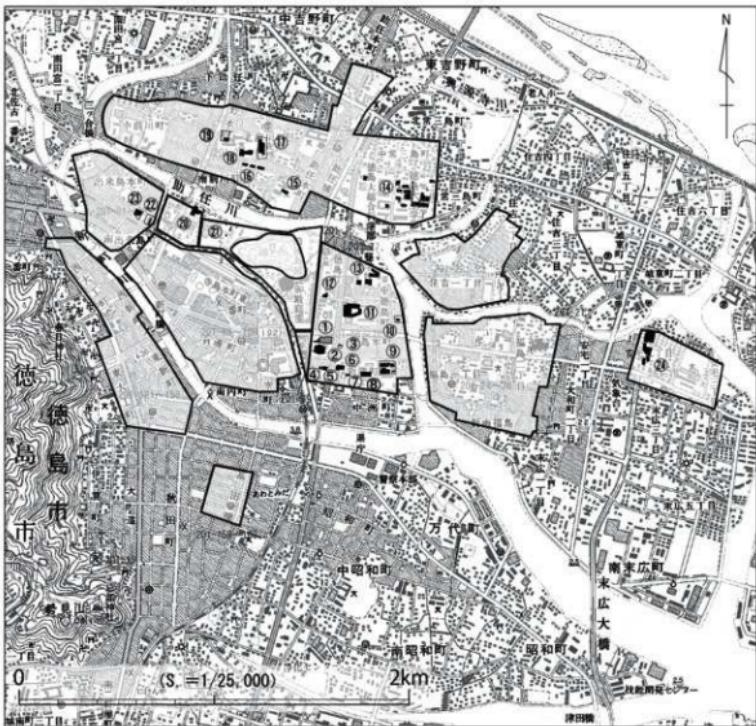
後述する当該遺跡調査で検出した直線的な溝、柱穴跡列ならびに池状遺構は、これまでの発掘調査成果によって明らかにされた屋敷境をなす遺構や屋敷地内に存在する池状遺構と同様の性格を有すると考えられる。よって、これまでの発掘調査成果について屋敷境となる遺構と池状遺構についていくつか取り上げる。

### 1998『新蔵町1丁目遺跡　企業局総合管理センター（旧副知事公舎）地点』

徳島市新蔵町1丁目地点で徳島県企業局の（仮称）総合管理センター（現在：徳島県企業局総合理事事務所）建設に伴い、平成6年度に発掘調査を実施した。調査では、幅0.45～2.5m、深さ0.36mを測る南北方向に延びる溝SD2004を検出し、SD2004の東側3.5mの位置で、幅0.46m、深さ0.06mのSD2005を検出している。SD2004とSD2005は並行して南北方向に2.25m以上延びていた。このSD2004は、堆積土中から大量の遺物が出土し、17世紀第三四半期までに構築され18世紀初頭に埋められたと考えられている。またSD2004はSK2023、SK2024と同じく17世紀後半には廃棄遺構の性格を有していたと思われる。

調査地は絵図によると江戸時代を通じて西に折下家、東に佐渡家の存在が窺え、この両家の武家屋敷地の境界部分にあたる。そして調査地内の想定屋敷地境界部分に、SD2004とSD2005を検出しており、この2条の溝は屋敷境の性格を有していたと考えられる。またSD2004に直角に繋がり西へ延びるSD2003は、幅0.31～0.92m、深さ0.08～0.20m、長さ11.83mを測る。折下家敷地内を南北に区画する溝と考えられている。

また第1遺構面では第2遺構面で確認したSD2004・SD2005のほぼ直上に2列の石積みが南北方向に築かれていた。それぞれの石積みは向かい合うように面を揃え、約3mの間隔を空けて南北方向に並行して延びていることから、石組をもつ幅約3mの溝である。この石組溝は、第2遺構面で確認した2条の溝の性格と同様に、屋敷境の性格を有していたと考えられる。またこの石組の溝に直角に繋がり西へ延びるSD1002は幅1m、深さ0.38m、長さは14.80mを測る。SD1002では、両端に高さ30cmに積まれた石組が認められた。この溝の西端部には、配置が不明瞭ながら石組が部分的に残存しており、調査区西端部まで延びていたと思われる。調査区西端部にまで溝が延びていたならば、その長さは約20mとなる。SD1002は、第2遺構面で検出したSD2003の直上に位置し、同様に折下家屋敷地内を南北に区画する溝と考えられる。



- ①平成 30 年度調査（当該調査）  
 ②平成 25 年度（2013）調査（公財）徳島県埋蔵文化財センター 2016『徳島城下町跡徳島町 1 丁目地点』  
 ③徳島市教育委員会 2009『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 19』  
 ④平成 10 年度（1998）調査（財）徳島県埋蔵文化財センター『新蔵町 1 丁目遺跡・企業局総合管理事務所地點 II』  
 ⑤平成 6 年度（1994）調査（財）徳島県埋蔵文化財センター『新蔵町 1 丁目遺跡・企業局総合管理センター（旧知事公舎）地点』  
 ⑥平成 6 年度（1994）調査（財）徳島県埋蔵文化財センター『新蔵町 1 丁目遺跡合同庁舎地点（旧知事公舎）』  
 ⑦新蔵町 1 丁目県警新蔵宿舎地点  
 ⑧国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 2015『新蔵道跡 - 地域・国際交流プラザ地點 -』  
 ⑨平成 5 年度（1993）調査（財）徳島県埋蔵文化財センター『新蔵町 3 丁目遺跡 徳島保健所地點』  
 ⑩徳島市教育委員会 2010『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 20』  
 ⑪平成 13・14 年度（2001・2002）調査（財）徳島県埋蔵文化財センター『徳島城下町跡 中徳島町 1 丁目地点』  
 ⑫徳島市教育委員会 2008『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 18』  
 ⑬徳島市教育委員会 2003『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 13』  
 ⑭国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 2005『常三島遺跡 1』2006『常三島遺跡 2』2009『年報 1』 2010『年報 2』  
 ⑮平成 12 年度（2000）調査（財）徳島県埋蔵文化財センター『南前川町 1 丁目遺跡』  
 ⑯徳島市教育委員会 2009『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 19』  
 ⑰平成 11 年度（1999）調査（財）徳島県埋蔵文化財センター『徳島城下町遺跡 中前川町 2 丁目地点』  
 ⑲徳島市教育委員会 2010『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 20』  
 ⑳昭和 61 年度（1986）調査 徳島県教育委員会『城ノ内遺跡徳島城跡 お花畠地点発掘調査報告書』  
 ㉑徳島市教育委員会 2001『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 11』  
 ㉒徳島市教育委員会 2006『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 16』  
 ㉓平成 13 年度（2001）調査（財）徳島県埋蔵文化財センター『徳島城下町跡 出来島本町 1 丁目地点』  
 ㉔平成 12・18・19 年度（2000・2006・2007）調査（財）徳島県埋蔵文化財センター『徳島城下町跡 安宅 2 丁目地点』

第 4 図 徳島城下町跡調査位置図

第2遺構面では、並列する2条の直線的な溝によって屋敷境としていたが、第1遺構面では、内に面をもつ石組溝1条によって屋敷境界としていたことが窺える。さらに屋敷境となる遺構に直交して繋がる溝は、屋敷地内を区画する溝と考えられている。

#### 2000『新蔵町1丁目遺跡 企業局総合管理事務所地点II』

徳島市新蔵町1丁目地点で徳島県企業局総合管理事務所の立体駐車場建設に伴い、平成10年度に発掘調査を行った。調査地は、平成6年度発掘調査地の西の近接地にある表面積は150m<sup>2</sup>である。平成6年度調査の第1遺構面は、今回の調査の第1・第2遺構面上面に対応し、同年度調査の第2遺構面は、今回の調査の第2遺構面下面と第3遺構面に対応する。

第2遺構面下面でSL2201を検出した。SL2201は、平面長方形の周囲4辺が石組の池状遺構である。内部寸法は、石組深さ0.80mを測り、北・西・南部では上部の石組が崩壊しているが、元々の上部内寸は南北3.57m、東西5.12m程度の規模を有していたと考えられる。貯水量は11.8m<sup>3</sup>である。床面は平坦で傾斜はない。石組の東側では上下2段の石積形態となっていた。石組下から出土した遺物から17世紀末頃までに形成され、池状遺構最下層出土の遺物から18世紀中葉には池状遺構内への遺物廃棄が始まると考えられ、短期間で機能を失っている。池状遺構の中央やや北寄りに木枠の井戸跡(S-E 2201)が設置されている。円筒形の木枠の高さは0.92mを測った。調査地は絵図によると江戸時代を通じて折下家が存在していたことが窺え、折下家敷地内の裏手部分、居住空間以外の部分と想定している。

第1遺構面は遺物から明治初頭の1870年代から下限は1880年代と考えられ、第2遺構面の上面と下面の関係性は複雑であるが、概ね上面は17世紀末～18世紀中葉、第2遺構面下面17世紀中葉～17世紀末までと考えられる。第3遺構面の年代は16世紀末から17世紀前半である。

また、折下家敷地部分の発掘調査は2018年に徳島市教育委員会によって行われている。(考古学年報2020年発行)

#### 1998『新蔵町1丁目遺跡 合同庁舎地点(旧知事公舎)』

徳島市新蔵町1丁目地点で徳島合同庁舎建設工事に伴い、平成8・9年度に発掘調査を行った。調査地は絵図によると江戸時代を通して佐渡家と戸田家の武家屋敷の境界部分にあたり調査範囲は表面積900m<sup>2</sup>である。

屋敷境は、第3遺構面では南北方向に1.5m間隔の12基の柱穴群を検出した(SG3001)すべての柱穴跡から根石を検出した。またいくつかの柱穴からは、根石が沈みこむのを防ぐ根石の下に杭跡も見られた。柱穴の大きさは一辺50～60cmの方形状、直径50～60cm円形状の柱穴跡である。板塀で区切られていたと考えられる。第2遺構面では、2条の溝跡がほぼ南北方向に並んで延びる。佐渡屋敷内に東西方向の柵列も検出された。柵列は溝と直交している。この年代は18世紀後半から末か19世紀の初頭までと考えられている。

第1遺構面では佐渡家と戸田家の屋敷境が溝から再び板塀へと変わっている。8基の柱穴跡による南北方向の柵列である。ただし柱穴の大きさ、間隔に規則性があまりない。いずれの柱穴から杭痕跡を認めることができた。幕末の遺構面である。

『徳島城下町跡中前川町2丁目地点徳島県立文学書道館整備事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書』

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第56集 2005.3

平成11年度に発掘調査を行った。本調査区の所在する助任・前川地区は中・下級武家屋敷となっていた。第3遺構面は17世紀の遺構面である。遺構面の残存地が少なかった。第2遺構面では池状遺構(SL2001・SL2002)を検出した。SL2001は長軸12.56m、短軸11.44m、深さ0.72mを測る。平面が不整形で東部は調査区外東に延びている。平面形状の落ち込みが繋がっているような状況であり、西側の方形状へと東側から落ち込みが認められる。「渡邊氏」の文字を記した膳などの木製品が良好な状態で多量に出土した。SL2002は長軸15.12m、短軸10.96m、深さ0.44mを測る。平面が不整形である。

第1遺構面で、SD1003・SD1002の2条が平行して直線的に延びる溝跡は、東側の渡辺家、西側の山崎家を隔てる屋敷境の溝である。またSD1003は東西方向にも延び、SD1008と平行して直線的に延びる。この2条の溝跡は、南側の太田家と北側の両家を隔てる溝である。

第2遺構面において渡辺家と山崎家の敷地裏には、池状遺構が存在していたことが判明した。第1遺構面は19世紀中頃(幕末・明治初期)を中心としている。

『南前川町1丁目遺跡 一鳴門教育大学(附小)校舎新設埋蔵文化財発掘調査報告書』2002

元禄4年(1691)の「御山下絵図」には初めて屋敷境及び拝領者名が記され、調査区は2軒の屋敷境界付近に位置し、西側の区画には北向きに速水弥七兵衛、東側の区画には東向きに「山崎勘兵衛」と記載されている。

第3・2・1遺構面において、それぞれ調査区西部を南北方向に延びる溝状遺構を検出した。これらは屋敷境と考えられる。SD3001は幅最大2.8m、深さ0.46m、その年代は17世紀中葉から19世紀前半である。SD2001は幅2.96m、深さ0.24m。19世紀中葉、江戸時代末である。SD2001の位置はSD3001よりも東へ3mの地点である。SD2001から東へ5mの地点に並行して延びるSD2002も屋敷境界の遺構であろう。

第1遺構面ではSD1001・1002の2条の平行する溝を検出した。その間隔は4m、SD1001は幅0.6m、深さ0.08m。SD1002は幅0.7m、深さ0.08mを測る。

SL3001(池状遺構)は長軸17.70m、短軸7.00m以上、最大深さ0.60mを測る。平面隅丸長方形、断面台形の素掘りの池である。石積みなどは認められず、また底部平坦であり、底面に粘土等を貼った痕跡は認められない。池南西部が調査区外に延びることから、「く」の字状に屈曲する不整形の可能性もある。池中央東寄りには木枠の井戸状遺構が検出された。この池は屋敷内の南西隅に位置する。

以上のように、屋敷境界とする遺構は、1条もしくは並行する2条の溝跡、柵列を設け、その位置は、各年代の遺構面によって、ほぼ同じ位置のものもあれば、異なる位置となっているものもあることが認められる。また屋敷地内には、池状遺構を設けており、その内側には井戸をつくることがあるようである。これらの遺構は規模や構造が異なる部分もあることから、その違いが例えば家格などに起因するのか、今後の検討課題であろう。

### III. 調査成果

#### 1. 基本層序

現地表面の標高は 1.6 ~ 1.8 m である。重機ならびに人力掘削により、第 1 遺構面から第 4 遺構面までを検出し、人力で遺構掘削を行った。その結果、第 1 遺構面～第 4 遺構面を検出した。第 4 遺構面より下層は、淡灰黄色シルト～砂層である自然堆積層であった。第 4 遺構面より下層に遺構・遺物は認められなかった。昭和 41 年建設建物解体後の整地層が主に厚さ 20 ~ 40cm を測るが、深いところで 90cm 以上となっていた。その下で軟災整地層（焼土層）を確認した。焼土層は、調査区東側に多い傾向にあり赤く変色していた。層の厚さは 10cm を測る。その下層には砂層が 20cm 堆積していた。その下はオリーブ褐色シルト層が堆積していた。この下層の上面が第 1 遺構面である。

第 1 遺構面から第 3 遺構面までは、人工的に土砂や泥を用いて地盤の安定化を図っていた。そのため上層堆積状況は、自然堆積層によく認められる水平堆積ではなく、層と層の境目は起伏にとみ、また、部分的に溝跡を灰白色シルトで厚さ 10cm によって被覆・整地するなど、多くの土の種類によって、繋ぎ接ぎのような盛土を行っている状況であった。そのため、遺構面検出において遺構堆積土であるかどうか見極めが難しいところもあり、遺構面よりも下げた地点まで掘削して遺構の有無を確認した。

このような土層堆積状況であるが、それは第 3 遺構面の検出になると、しだいに土質が均質で安定したものに近づき、層位の見極めがしやすくなっていく状況がみてとれた。

地表面から第 1 遺構面までの深さはおよそ 70cm であった。標高約 1 ~ 1.2 m の地点である。次の第 2 遺構面は第 1 遺構面から約 40 ~ 50cm 挖り下げた地点で確認した。標高 0.6 ~ 0.8 m である。そして、第 3 遺構面までは、60 ~ 80cm と深く掘り下げた地点で確認した。第 3 遺構面では、後述する池状遺構（SX3009）の上層を灰白色砂層が全体的に厚さ約 30 ~ 80cm も堆積していた。第 3 遺構面の標高は約 0 m であった。

そして、第 3 遺構面から約 20 ~ 40cm 下で、第 4 遺構面を検出した。第 4 遺構面の基盤層は、灰白～灰オリーブ色シルト～粘質土であった。第 4 遺構面は標高マイナス 20 ~ 40cm であった。

調査区全体に広い範囲で攪乱とその影響が及んでいた。攪乱は大きく 2 つの原因と思われる。一つは、調査区左側から中央部にかけて広がる昭和 41 年に建てられた裁判所建物の影響である。この建物の影響は、第 1 遺構面・第 2 遺構面の広い範囲ならびに、また第 3 遺構面・第 4 遺構面の一部にまで及んでいた。

特に第 3 遺構面・第 4 遺構面への攪乱は、建物基礎地中梁部分を除いてさほど受けていない想定していたが、主に調査区 A・B の西半中央部ならびに調査区 C の東側では、広い範囲に及んでいた。

またもう一つは、調査区 B の東側で認められた青石の 2 条の石列である。これら石列は 30cm から 1 m ほどの様々な大きさの青石を積み上げ、その上にコンクリートをかけて固めていた。石列は、幅約 1 m、長さ約 7 m を測り、東西方向に延びていた。石列 2 条の間隔は約 2 m であった。調査の妨げになるため、その進展に伴い青石を取り除いたところ、その下から丸太材が組合わされた状態で検出された。丸太材の構造をみてみると、はじめに、丸太杭を等間隔に打ち込み列を 2 条つくりだす。そしてその列に直交するように丸太を枕木のように架け、またその上にはじめの杭列の上を通るように丸太材を架けていた。この 3 種類の丸太の組み合わせによって、強固なものとなっていた。このような丸太と青石を使っ

た2条の構造物は建物の基礎と考えられる。この基礎は第1遺構面から第4遺構面にまで、影響を及ぼしていた。

丸太杭を使った地盤補強工法は、軟弱地盤対策・液状化予防対策が見込まれるもので、現代においても行われている。この基礎は、昭和41年に建てられた裁判所建物位置よりも東側で検出した。またさらに東へ延びる状況であり、当該調査区東壁面にも認められた。その年代については、昭和41年の建物以前であり、昭和24（1949）年の裁判所建設に伴うものと考えられる。また調査区壁面を観察すると、その基礎は、戦災整地層（焼土層）の上から掘り込まれて形成されていた。焼土層からは、瓶などのガラス製品が高温によって溶着した状態の破片が見つかっている。

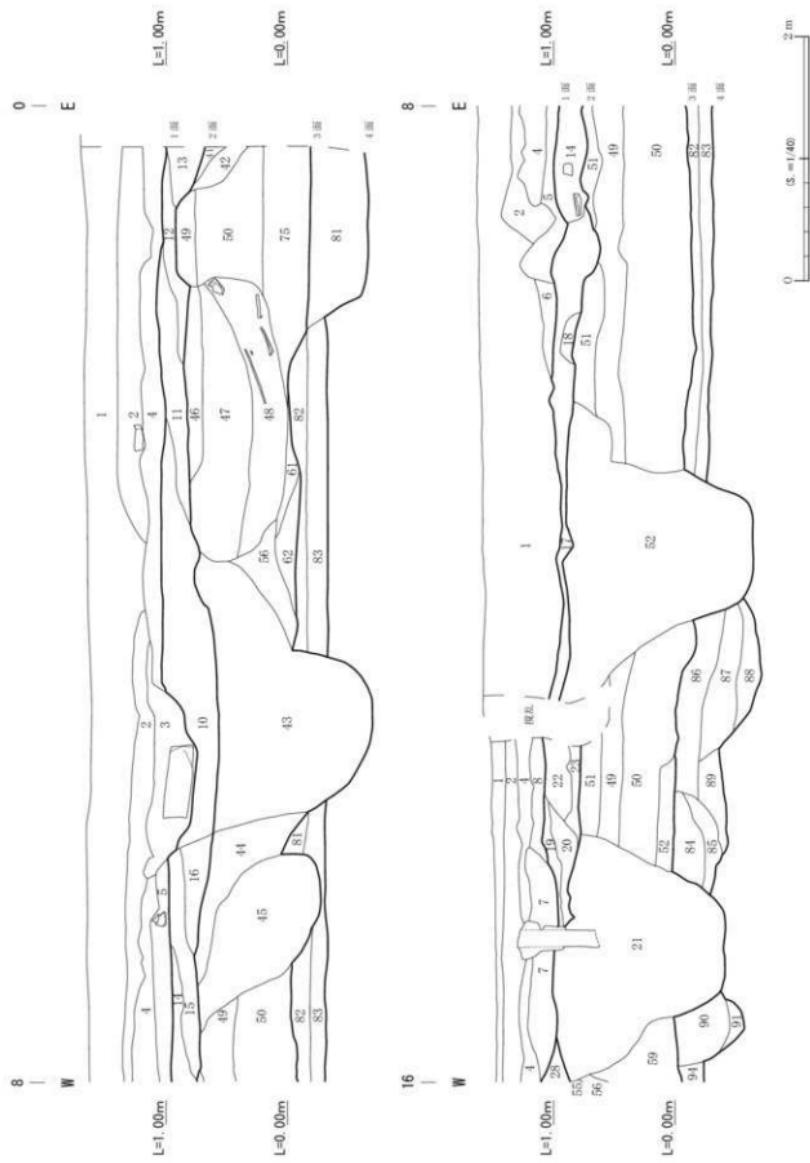


B区 第3遺構面調査状況（西から望む）



A区 第2遺構面調査状況（東から望む）

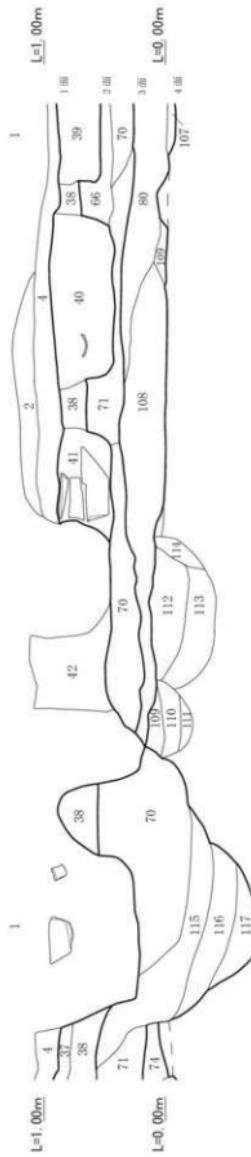
第5-1図 AB調査区北壁土層断面図





第5-2図 AB調査区北壁土層断面図 2

第5-3図 AB調査区北壁土層断面図3

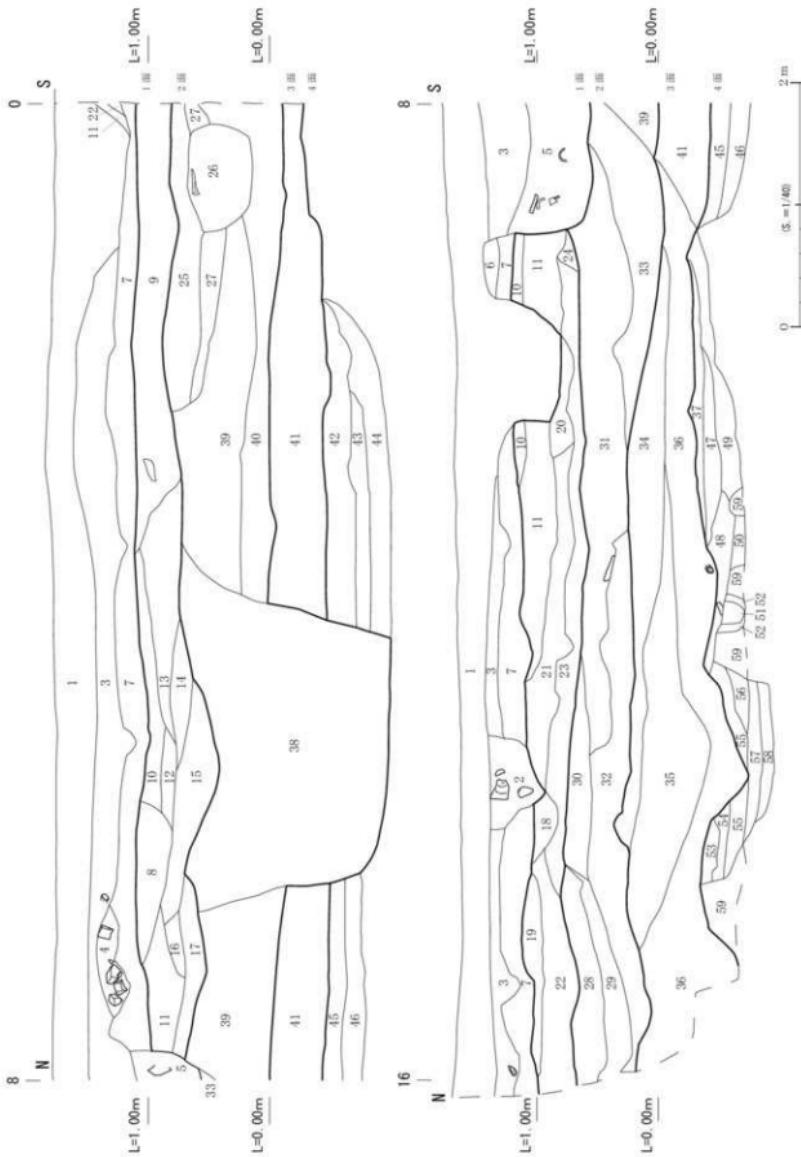


32 — E — W — 40 — E — W — 48 — E — W —





調查區北壁土層土色3

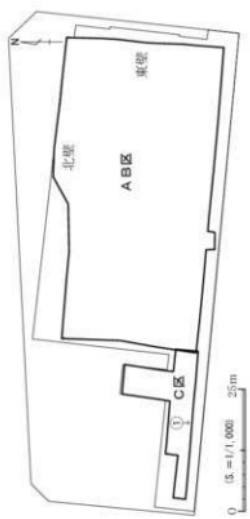


第6-1図 調査区東壁面北部土層断面図

- 1: オリーブ色(2.030) 砂質土「土よりやわらかい、粘性高い」  
 　1～2mmの粒を30%、100～200mmの粒を5%含む。  
 2: 棕色(7.030) 砂質土「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約30%、1～2mmの粒を10%含む。  
 3: 棕色(7.030) 砂質土「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約30%、1～10mmの粒を10%含む。  
 4: 棕色(7.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約30%、1～10mmの粒を2%、1～4mmの粒を2%。  
 5: 墓地灰(2.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約30%、1～10mmの粒を7%含む。  
 6: 棕色(7.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約30%、1～10mmの粒を15%含む。  
 7: キリータイプ(2.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を2%、2～2mmの粒を約5%、2～4mmの粒を10%含む。  
 8: キリータイプ(2.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約2%、1～4mmの粒を約5%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 9: キリータイプ(2.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約2%、1～4mmの粒を約5%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 10: キリータイプ(2.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を2%、1～2mmの粒を約5%含む。  
 11: キリータイプ(2.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約5%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 12: キリータイプ(2.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約5%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 13: 黄褐色(2.030) 砂質土「土より柔らかい、粘性やや高い」  
 　1～2mmの粒を約5%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 14: オリーブ色(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～11mmの粒を約15%含む。  
 15: オリーブ色(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～11mmの粒を約15%含む。  
 16: オリーブ色(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～11mmの粒を約15%含む。  
 17: 墓地灰(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～11mmの粒を約15%含む。  
 18: 黒褐色(0.030) 砂質土「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約5%、3～10mmの粒を20%含む。  
 19: オリーブ色(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約7%、3～10mmの粒を20%含む。  
 20: オリーブ色(2.030) シルト「土より柔らかい、粘性強」  
 　1～10mmの粒を約35%、2～20mmの粒を35%、他の土粒子を約30%含む。
- 21: オリーブ色(2.030) 砂質土「土よりやわらかい、粘性高い」  
 　1～2mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 22: 墓地灰(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 23: 墓地灰(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 24: 黄褐色(2.030) 砂質土「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 25: キリータイプ(2.030) 砂質土「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 26: キリータイプ(2.030) 砂質土「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 27: 黄褐色(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 28: 墓地灰(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 29: キリータイプ(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 30: 黄褐色(2.030) 砂質土「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 31: キリータイプ(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 32: キリータイプ(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 33: キリータイプ(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 34: 黄褐色(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 35: 墓地灰(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 36: オリーブ色(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 37: 黄褐色(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 38: キリータイプ(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 39: 黒褐色(0.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、1～10mmの粒を約5%含む。  
 40: オリーブ色(2.030) シルト「土よりやわらかい、粘性やや高い」  
 　1～10mmの粒を約25%、2～10mmの土粒子を約35%含む。全土中にシルトが混じる。

## 調査区東壁土層土色

## 調査A・B区壁土層土色2



41: 深オリーブ色 (0313/3) シルト。しまりやや弱い、粘性強、

0.5m 前後鉄鉱石を 2%、1 ~ 4mm の石を 10%、他半分が砂に含む。

42: 深オリーブ色 (0313/1) シルト。しまりやや弱い、粘性強、 $\sigma_d = 41$  kN の土質値を示す。

1 ~ 4mm の礫を 10%、3.5 ~ 10mm の石が 10% 含む。

43: オリーブグリーン色 (0303/1) シルト。しまりやや弱い、粘性強、

0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、1 ~ 3mm の礫を 40%、2 ~ 10mm の石を 40% 含む。

44: 深オリーブ色 (0313/2) シルト。しまりやや弱い、粘性強、1 ~ 6mm の石を 10%、0.5 ~ 1mm の鉄鉱石を 7%、

0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 3%、土質強度を 15% と評価する。

45: 深オリーブ色 (0313/1) シルト。しまりやや弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 20%、0.5 ~ 1mm の鉄鉱石を 20%、

0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

46: 深オリーブ色 (0313/2) シルト。しまりやや弱い、粘性強、0.1 ~ 3mm の石を 7%、

1 ~ 10mm の礫を 3%、1 ~ 5mm の礫土を 35% 含む。

47: 深灰色 (0111/1) シルト。しまりやや弱い、粘性強、0.1 ~ 5mm の鉄鉱石を 2%、

0.1 ~ 7mm の Fe 鉱石を 10%、1 ~ 7mm の石を 10% 含む。

48: 深灰色 (0113/1) シルト。しまりやや弱い、粘性強、0.1 ~ 4mm の鉄鉱石を 15%、0.1 ~ 3mm の Fe 鉱石を 2%、

3 ~ 7mm の礫を 8%、80 ~ 200mm の石を 5%、37 ~ 40mm の石を 5% 含む。

49: 深灰色 (0113/1) シルト。しまりやや弱い、粘性強、0.1 ~ 3mm の Fe 鉱石を 2%，

0.1 ~ 7mm の鉄鉱石を 2%、0.1 ~ 7mm の石を 2% 含む。

50: 深灰色 (0113/1) シルト。しまりやや弱い、粘性強、0.1 ~ 3mm の鉄鉱石を 2%，

0.1 ~ 7mm の鉄鉱石を 2%、0.1 ~ 7mm の石を 10% 含む。

51: 深灰色 (0113/1) シルト。しまりやや弱い、粘性強、0.1 ~ 4mm の鉄鉱石を 3%、

0.1 ~ 7mm の鉄鉱石を 3%、0.1 ~ 7mm の石を 10% 含む。

52: 深灰色 (0113/1) シルト。しまりやや弱い、粘性強、0.1 ~ 25mm の礫を 70%、

25 ~ 172mm の瓦片を 10%、50 ~ 272mm のコンクリート片を 10% 含む。

53: オリーブ黒色 (1013/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

2 ~ 7mm の礫を 10%、10 ~ 15mm の石を 10% 含む。

54: 深灰色 (0103/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

55: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

56: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

57: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

58: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

59: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

60: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

61: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

62: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

63: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

64: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

65: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

66: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

67: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

68: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

69: 深灰色 (0113/1) シルト。しまり弱い、粘性強、0.1 ~ 2mm の Fe 鉱石を 10%、

0.1 ~ 2mm の鉄鉱石を 10%、小礫・土質強度を 0.5% と評価する。

## 調査C区土層土色





第7-1図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図 1

18

19

20

X=119, 330, 000

Y=97, 590, 000

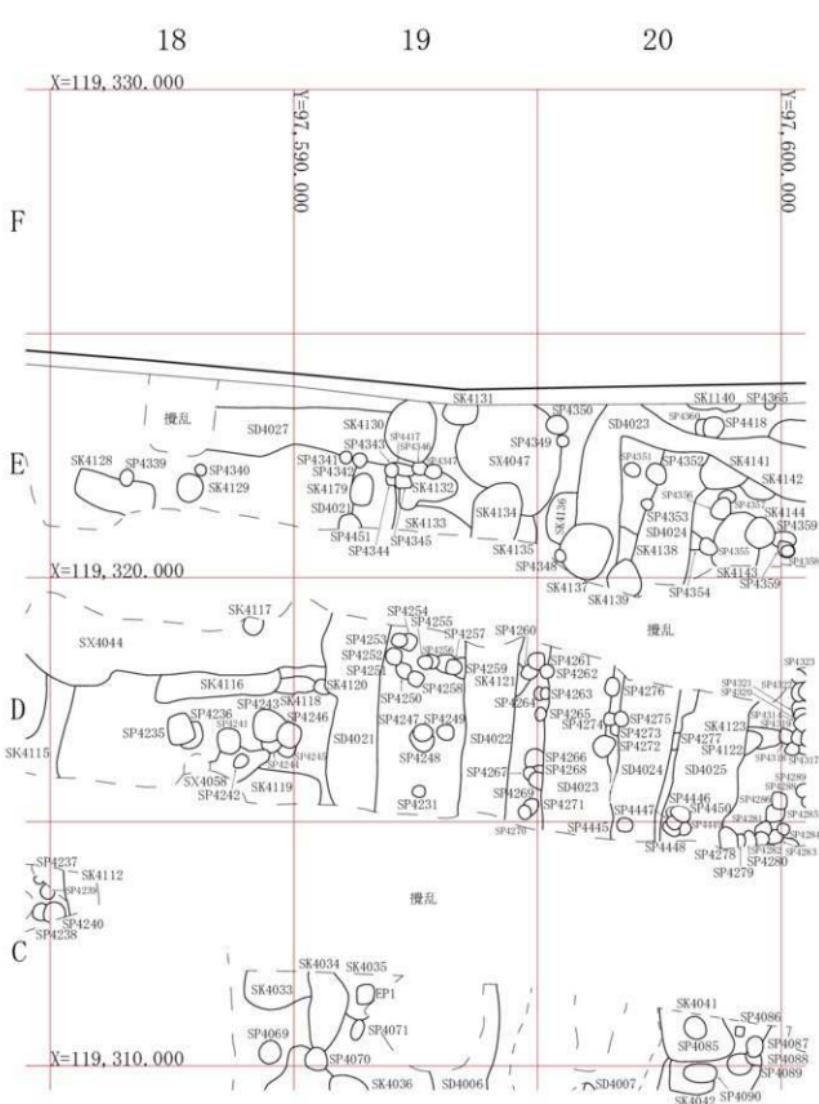
Y=97, 600, 000

F

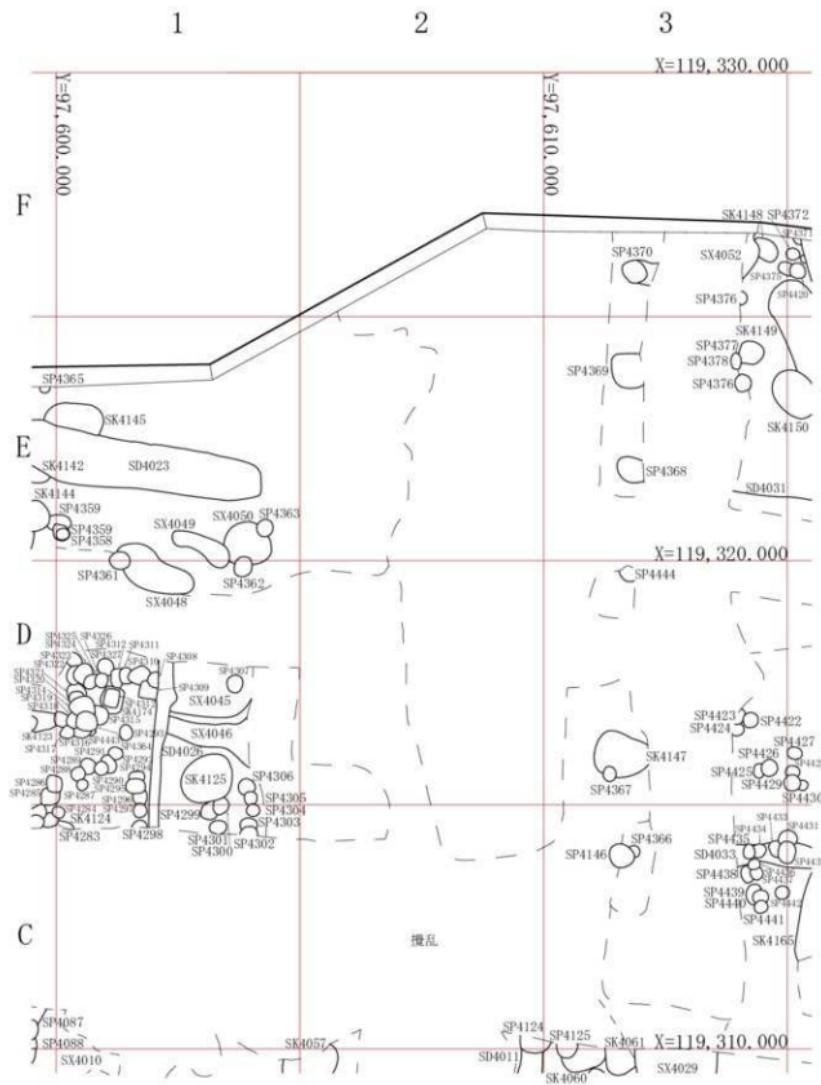
E

D

C



第7-2図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図2



第7-3図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図3

4

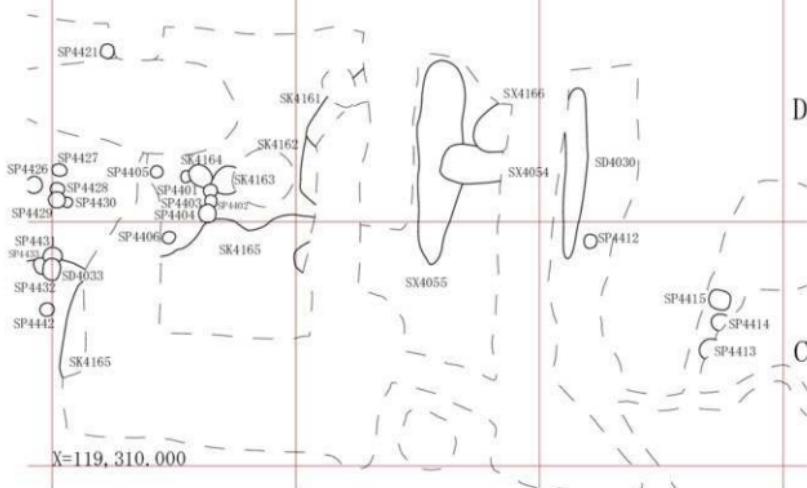
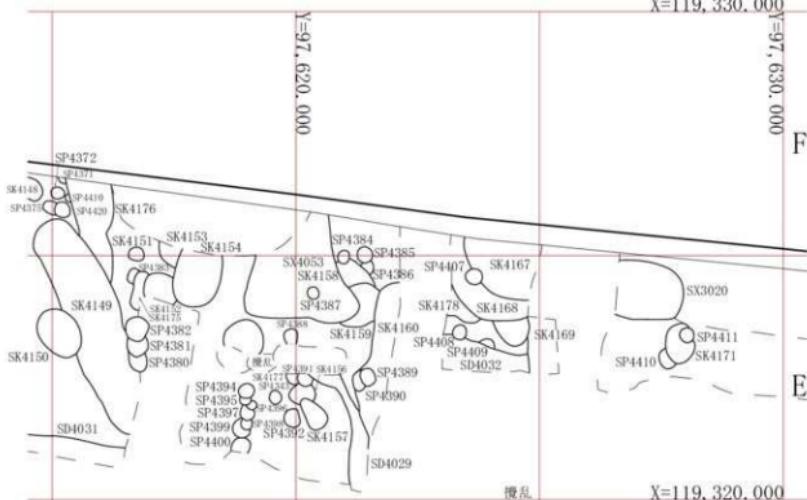
5

6

X=119, 330.000

Y=97, 630.000

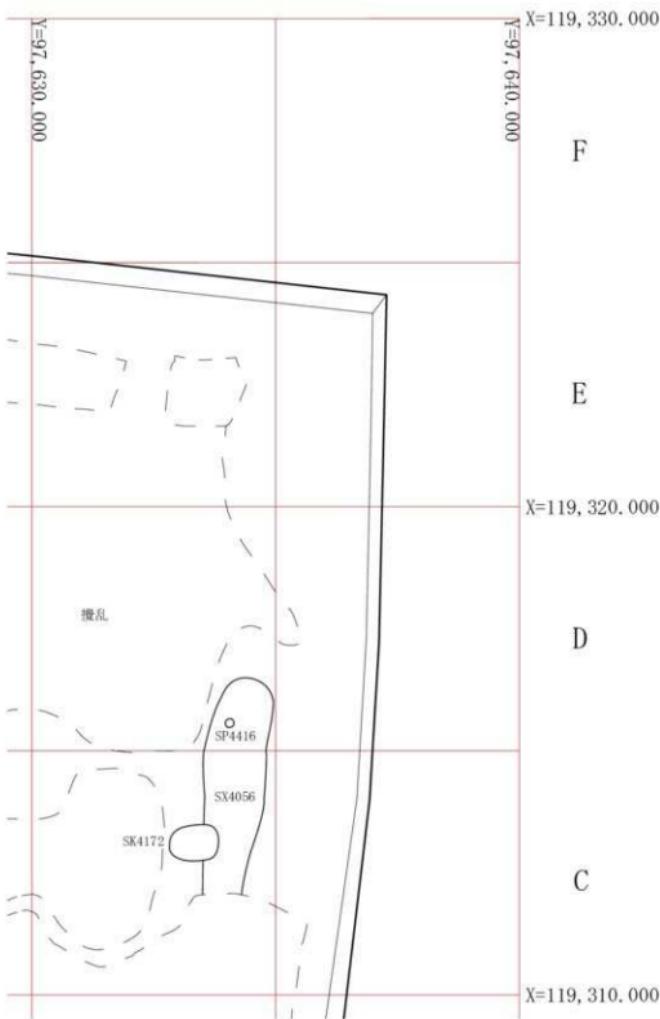
F



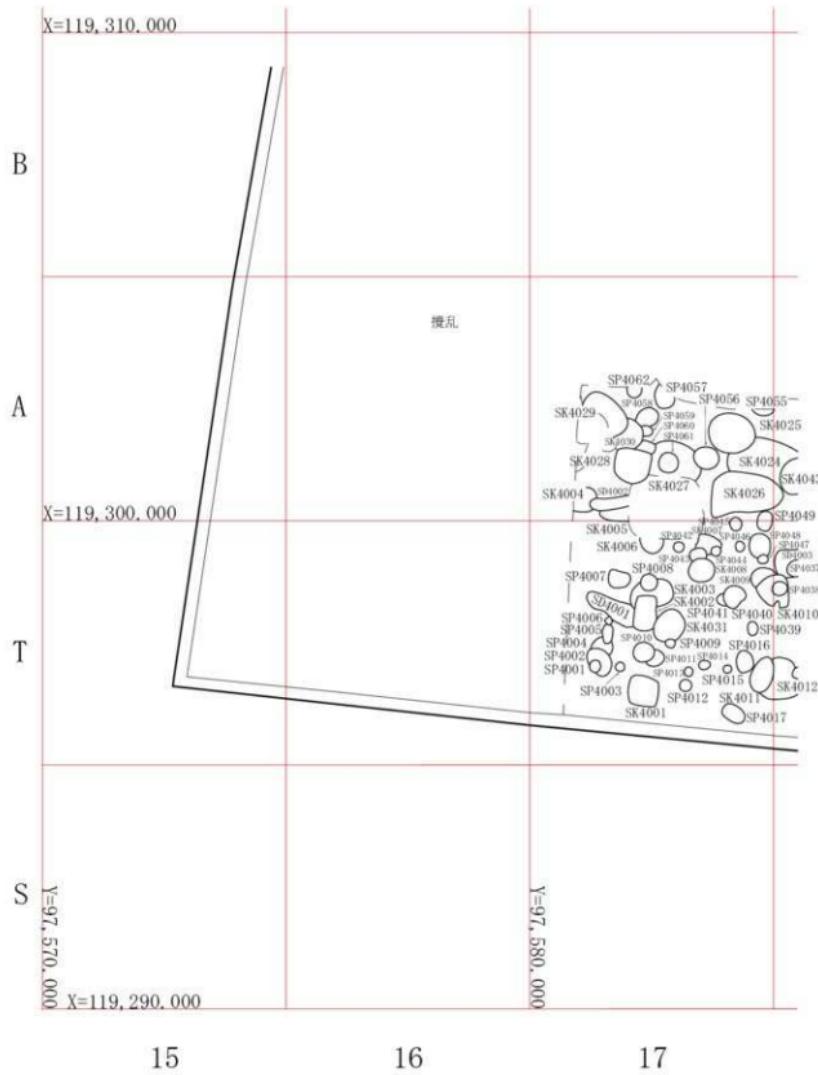
第7-4図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図4

7

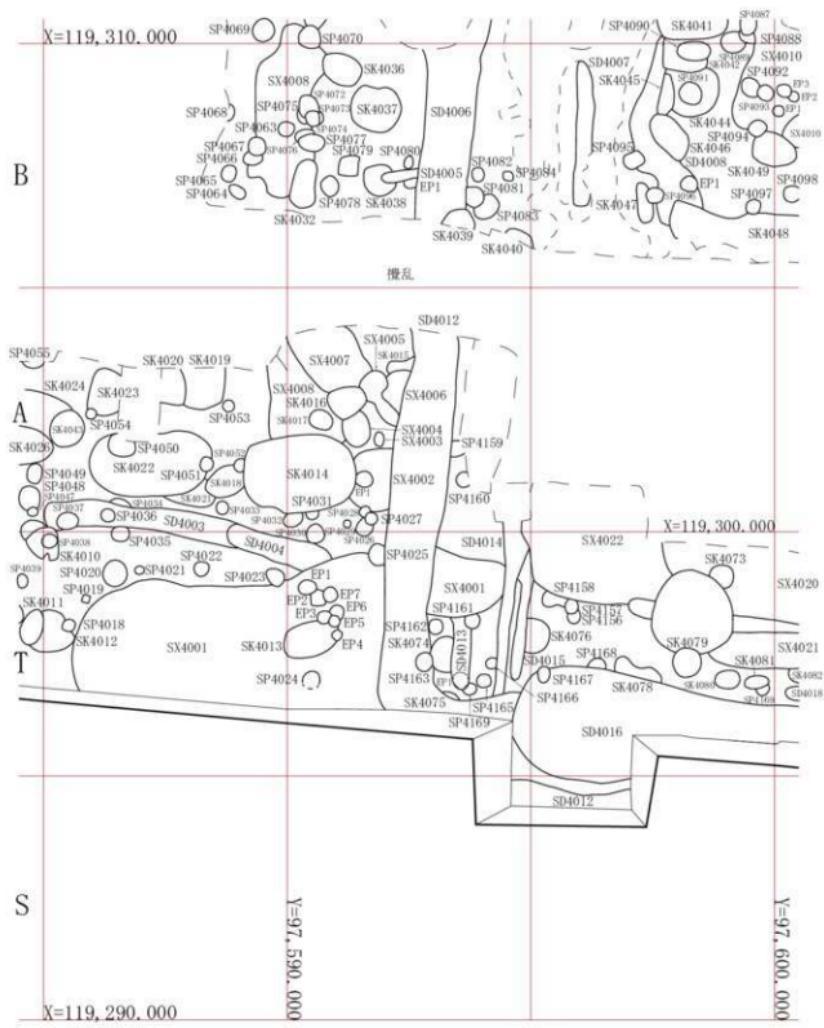
8



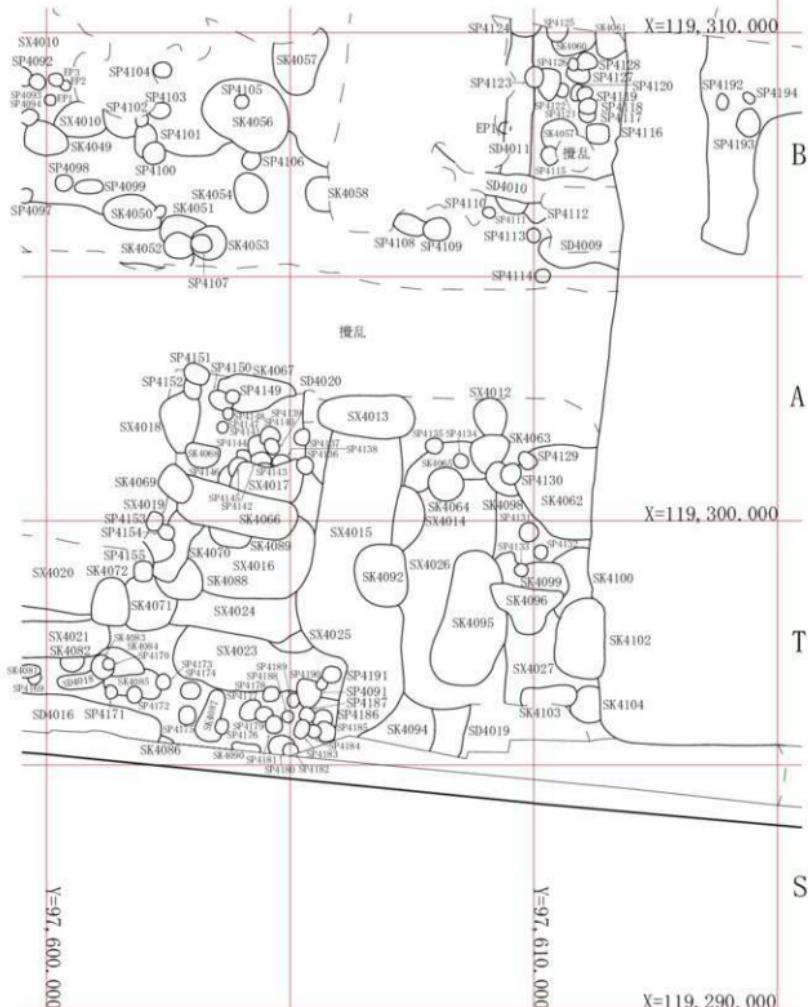
第7-5図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図5



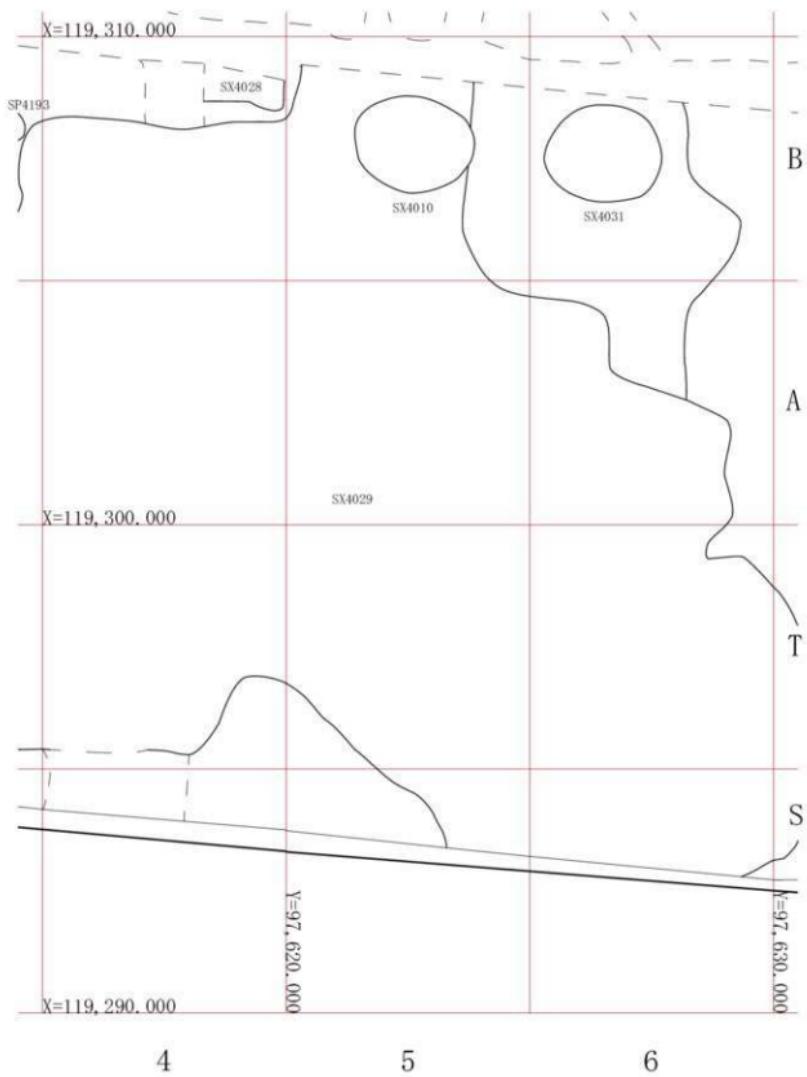
第7-6図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図6



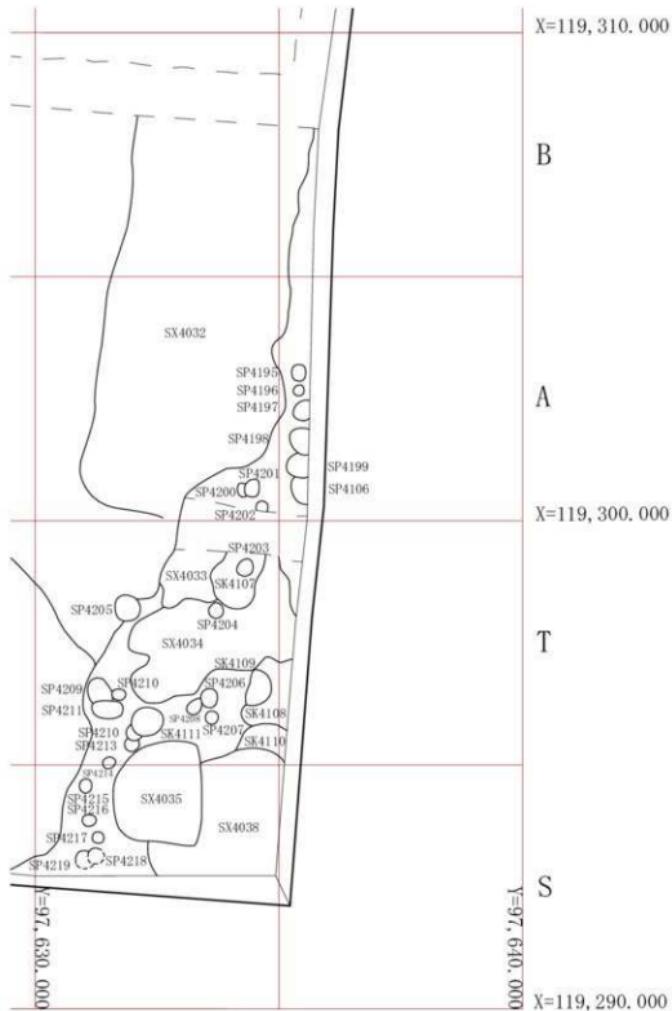
第7-7図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図7



第7-8図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図8



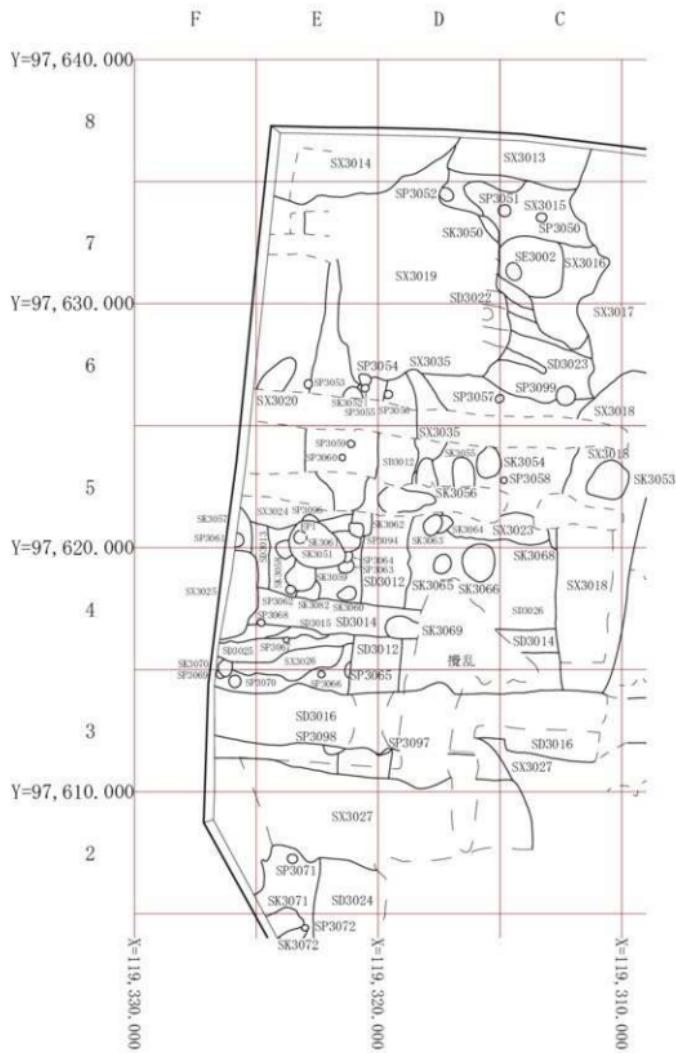
第7-9図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図9



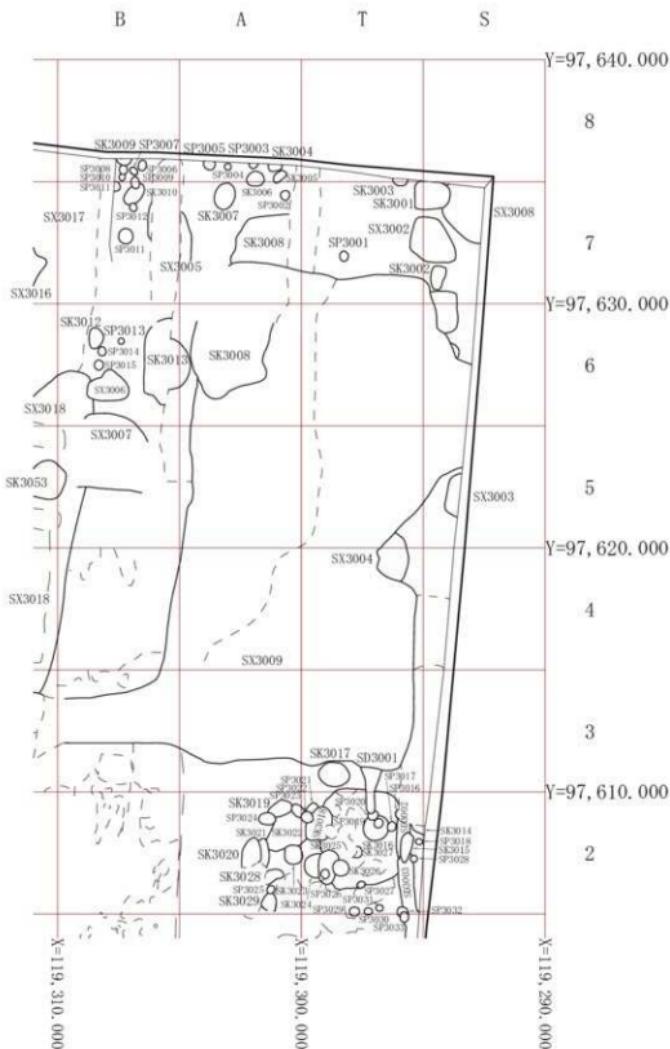
7

8

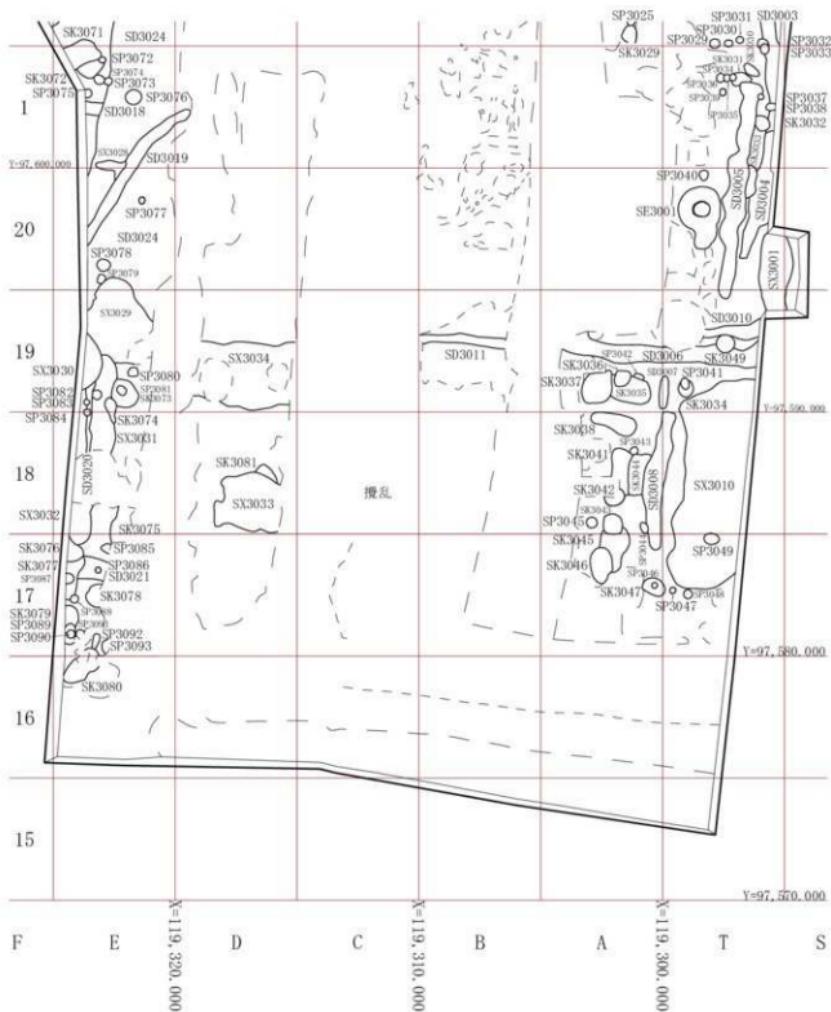
第7-10図 A区第4面平面図全体 (1:100) 遺構配置図 10



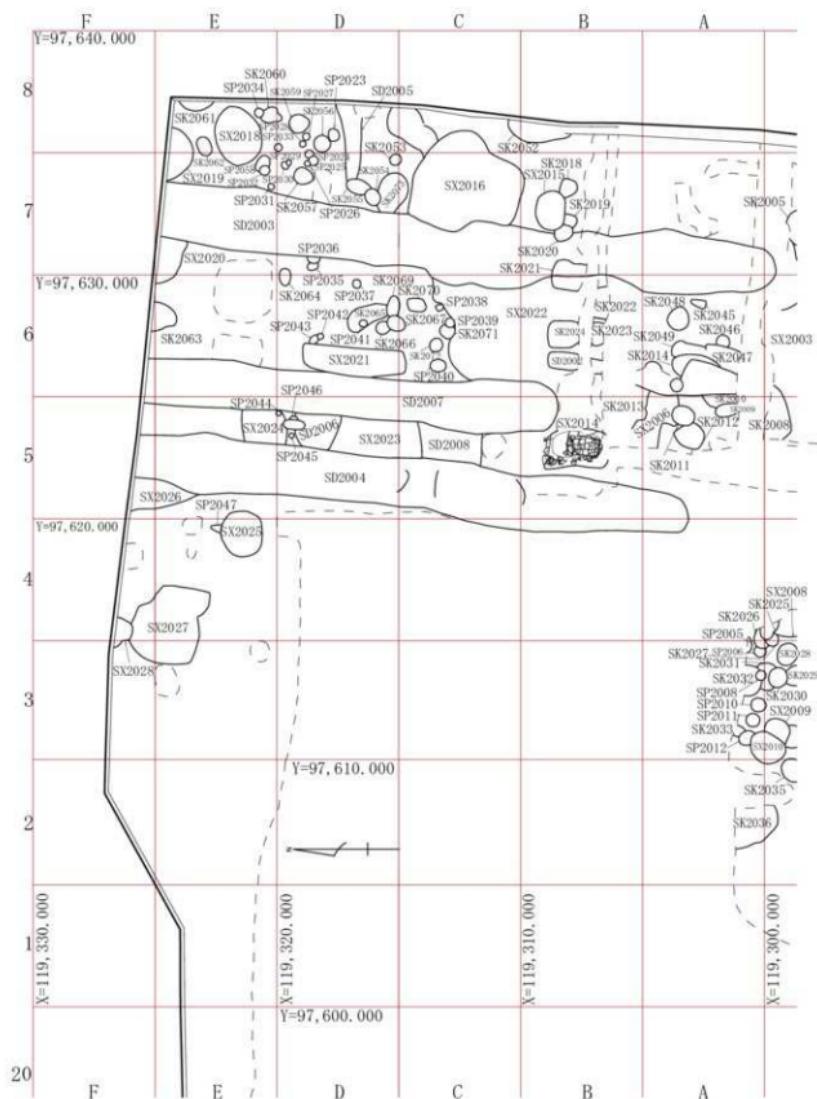
第8-1図 A区第3面平面図全体 (1:200) 遺構配置図 1



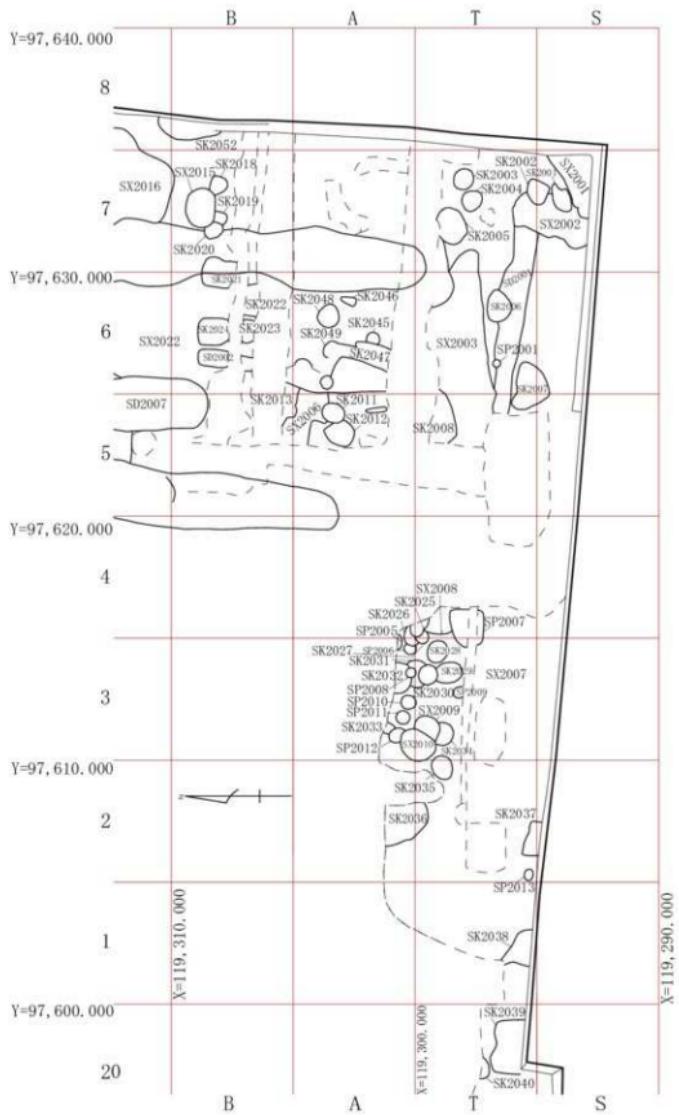
第8-2図 A区第3面平面図全体 (1:200) 遺構配置図2



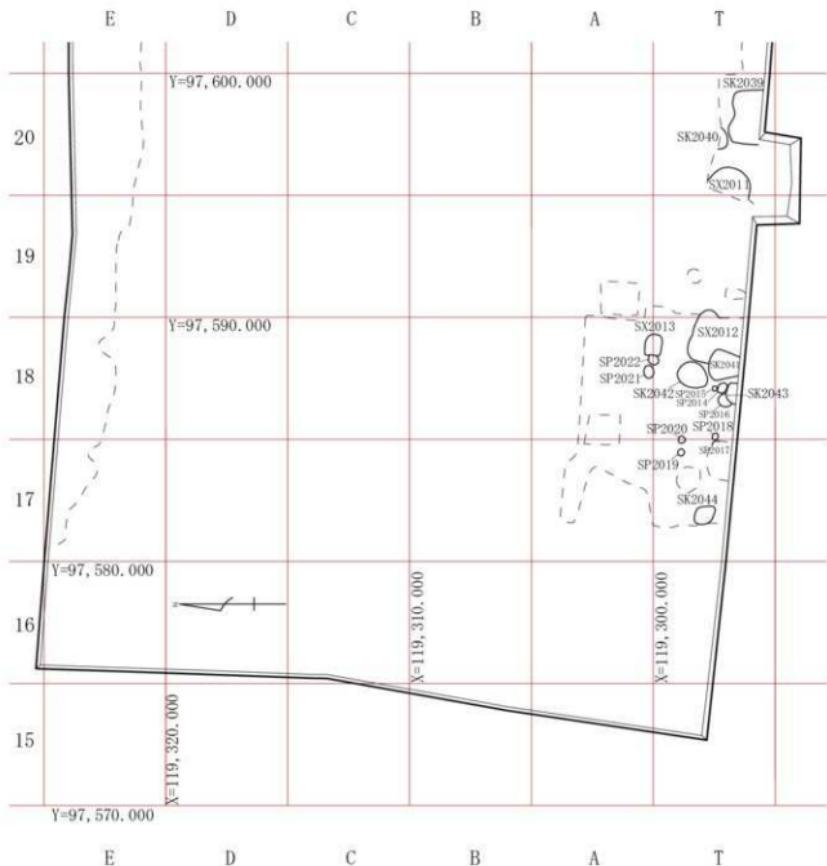
第8-3図 A区第3面平面図全体 (1:200) 遺構配置図3



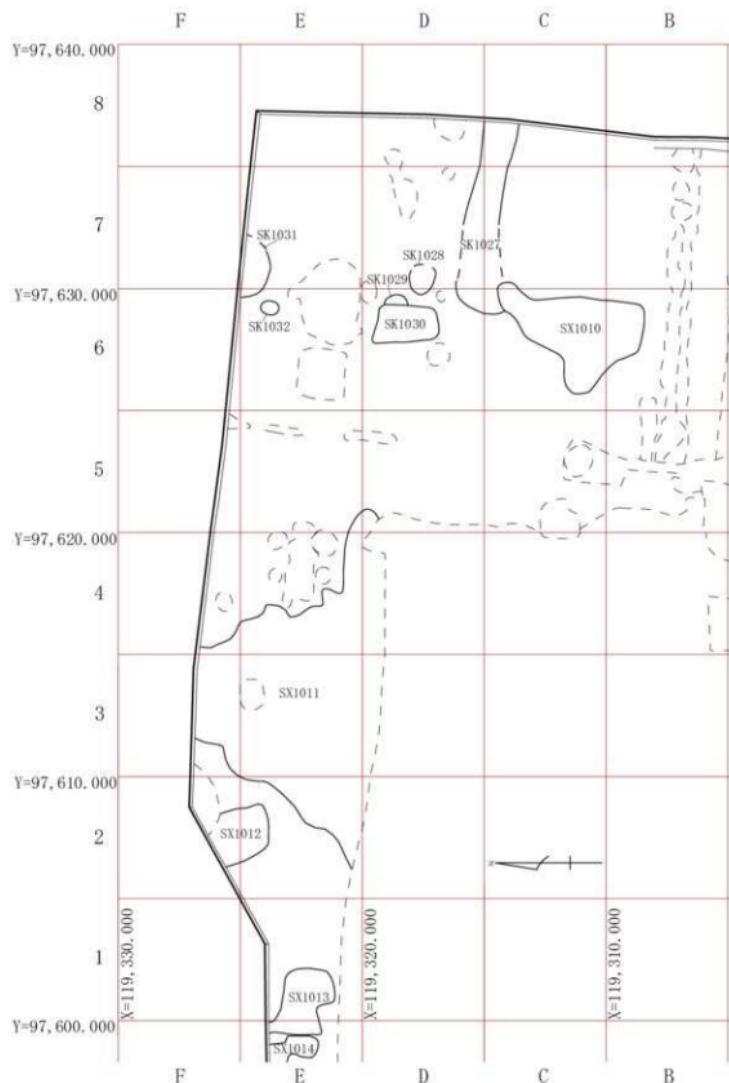
第9-1図 A区第2面遺構配置1 (1:200)



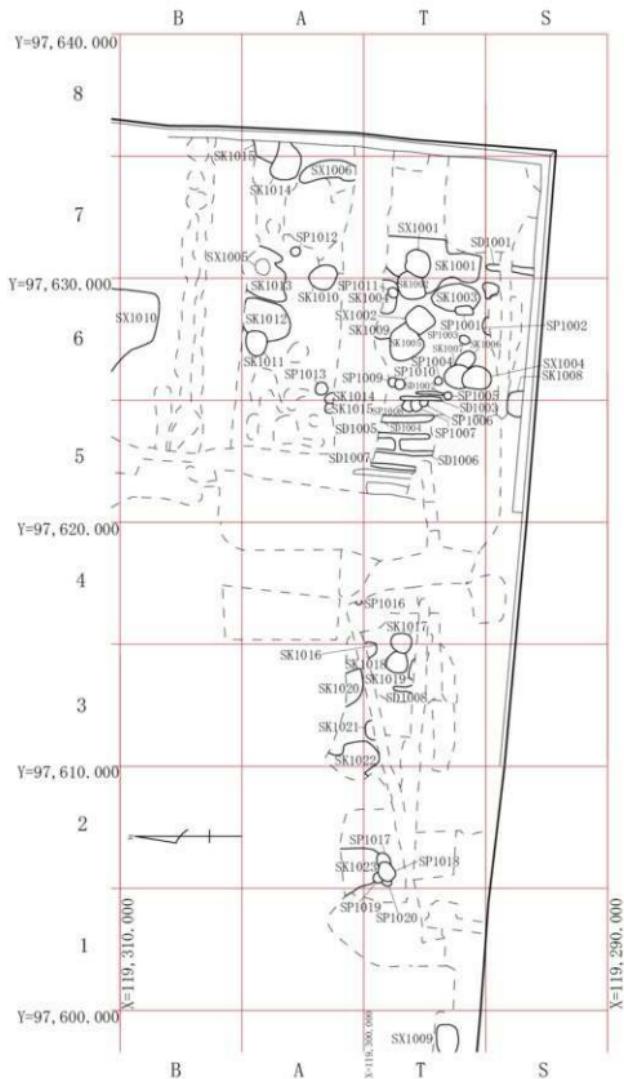
第9-2図 A区第2面遺構配置2 (1:200)



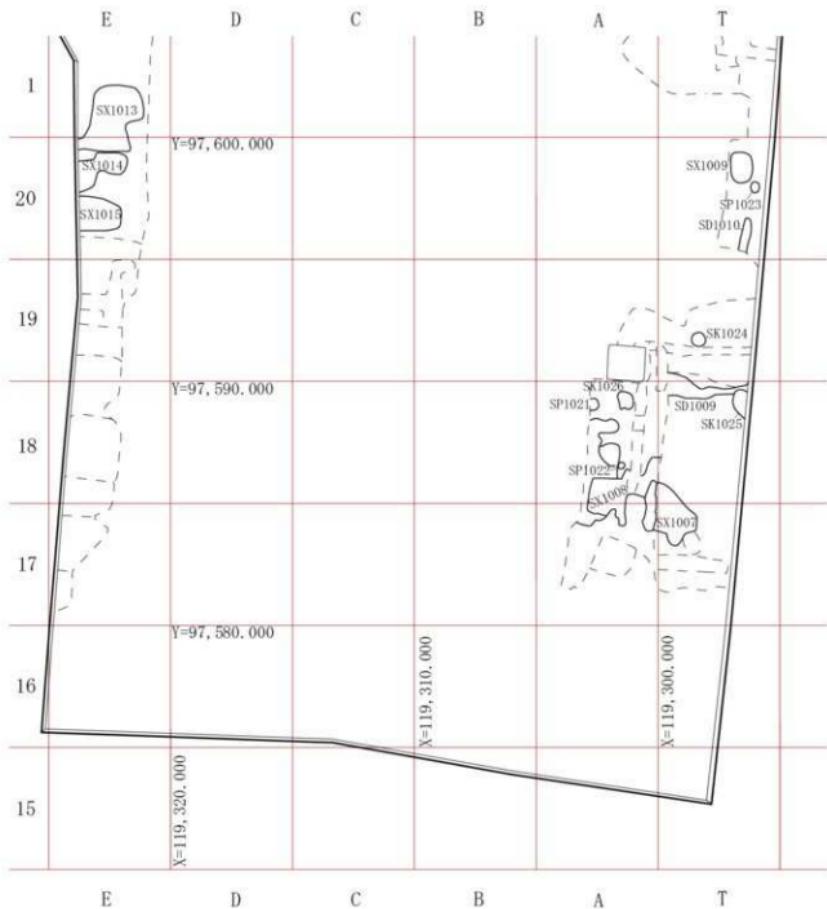
第9-3図 A区第2面造構配置3 (1:200)



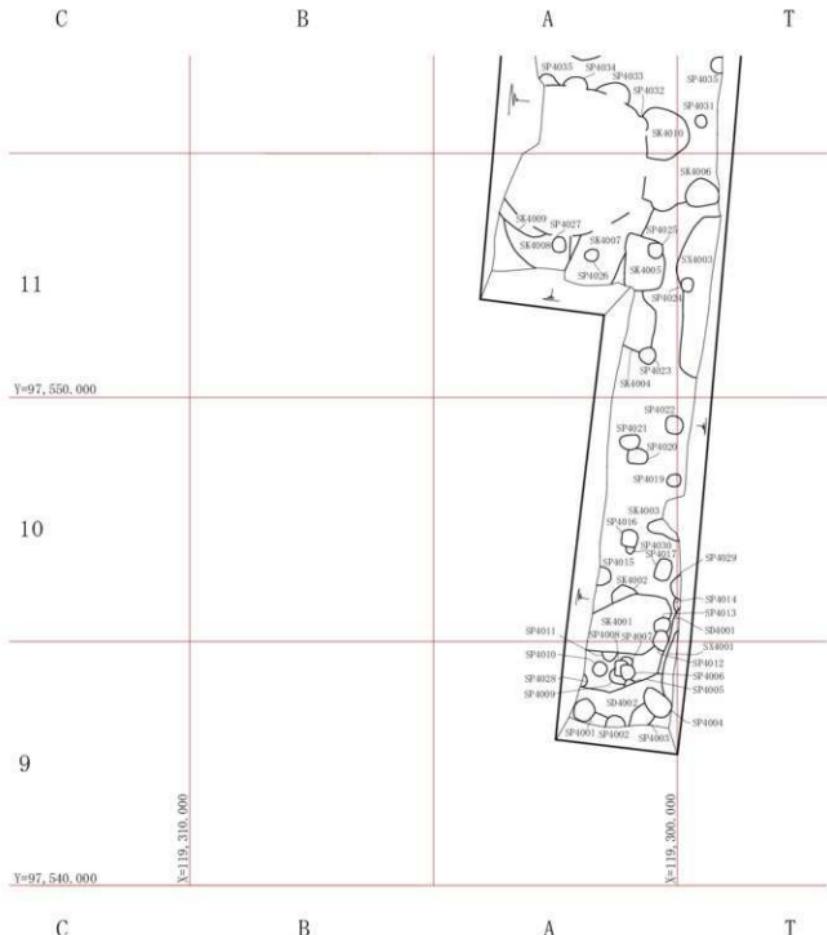
第10-1図 A区第1面遺構配置1 (1:200)



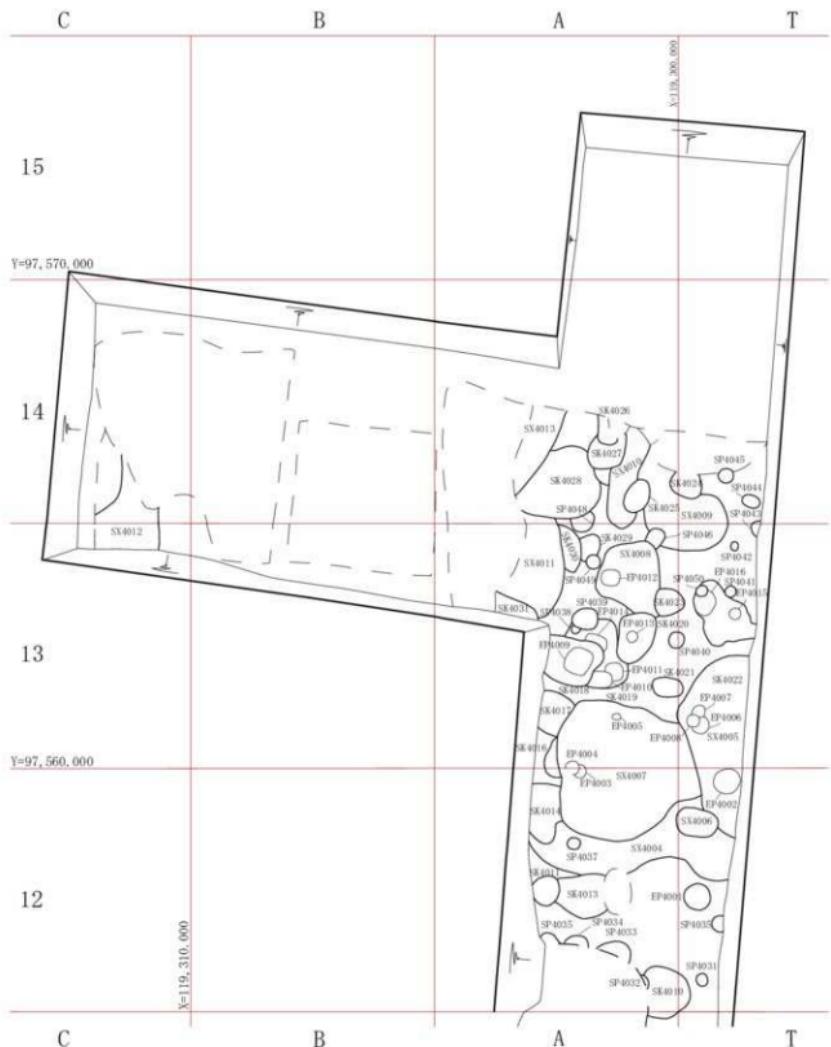
第10-2図 A区第1面遺構配置2 (1:200)



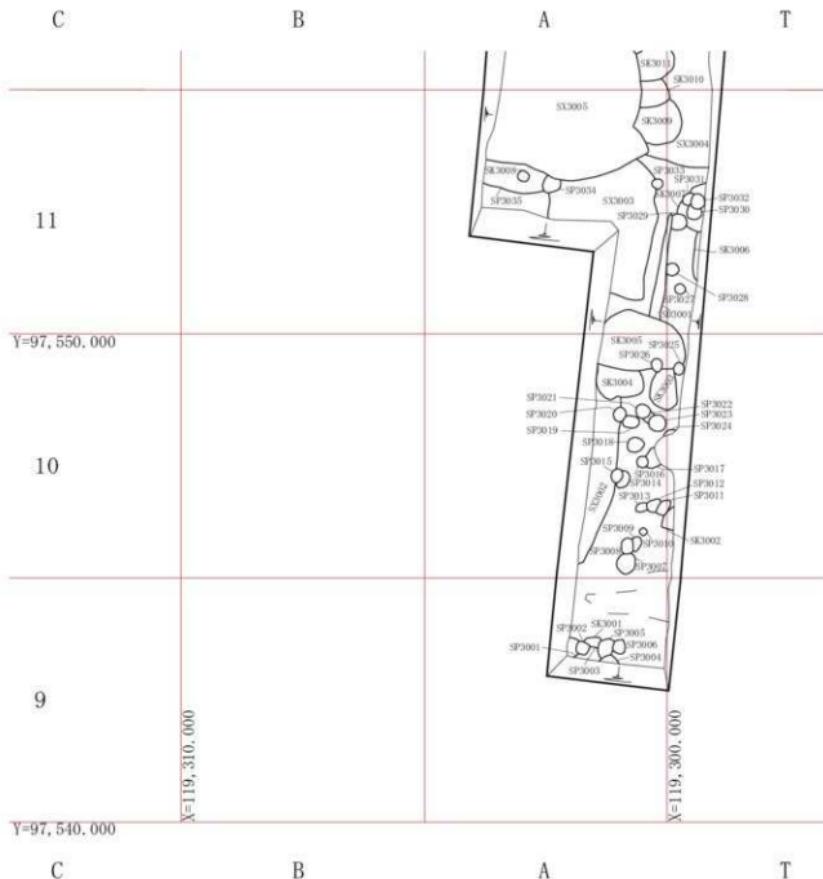
第 10-3 図 A 区第 1 面遺構配置 3 (1:200)



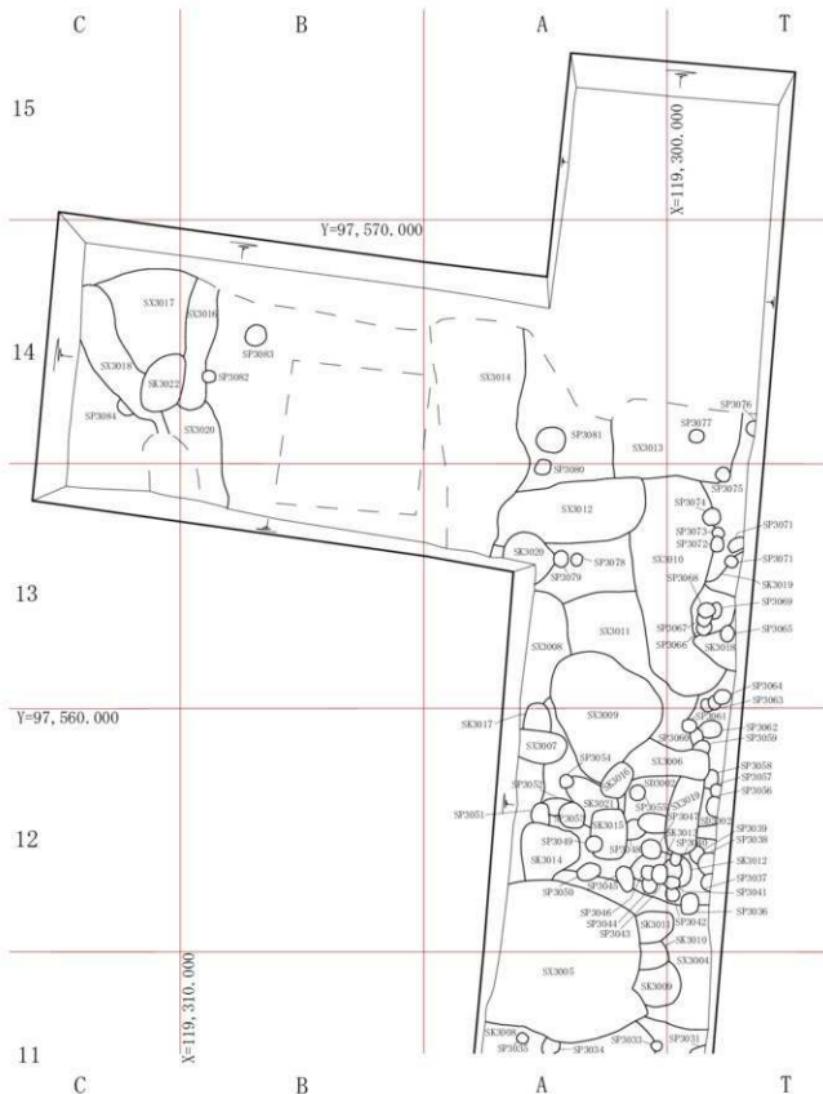
第 11-1 図 C 区第 4 面遺構配置 1 (1 : 100)



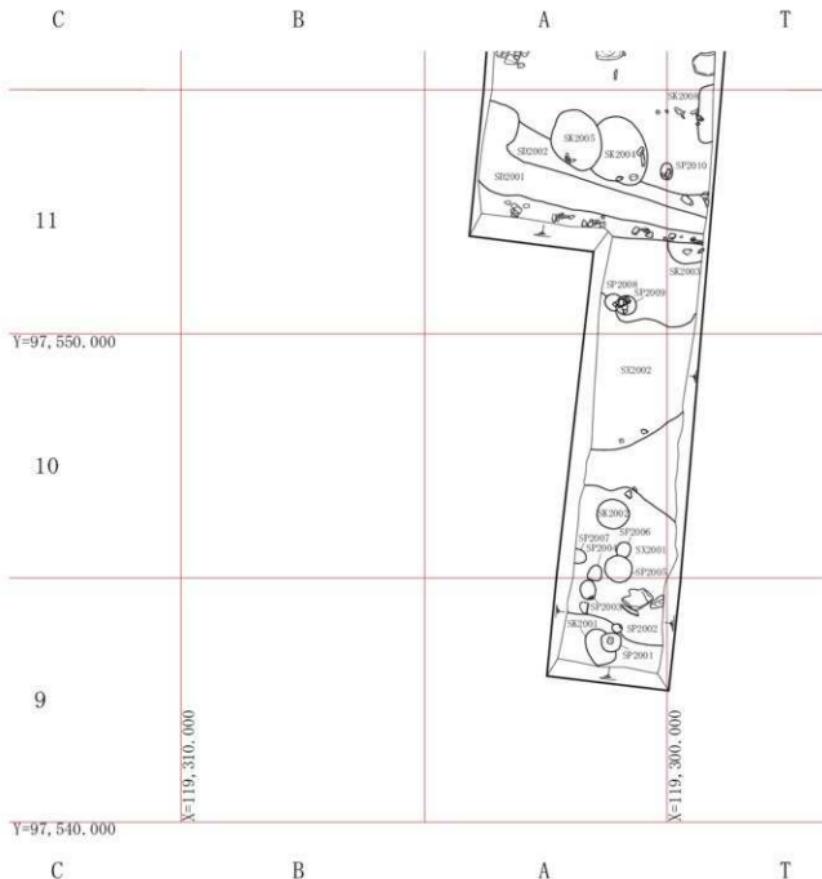
第11-2図 C区第4面遺構配置2(1:100)



第 12-1 図 C 区第 3 面遺構配置 1 (1 : 100)



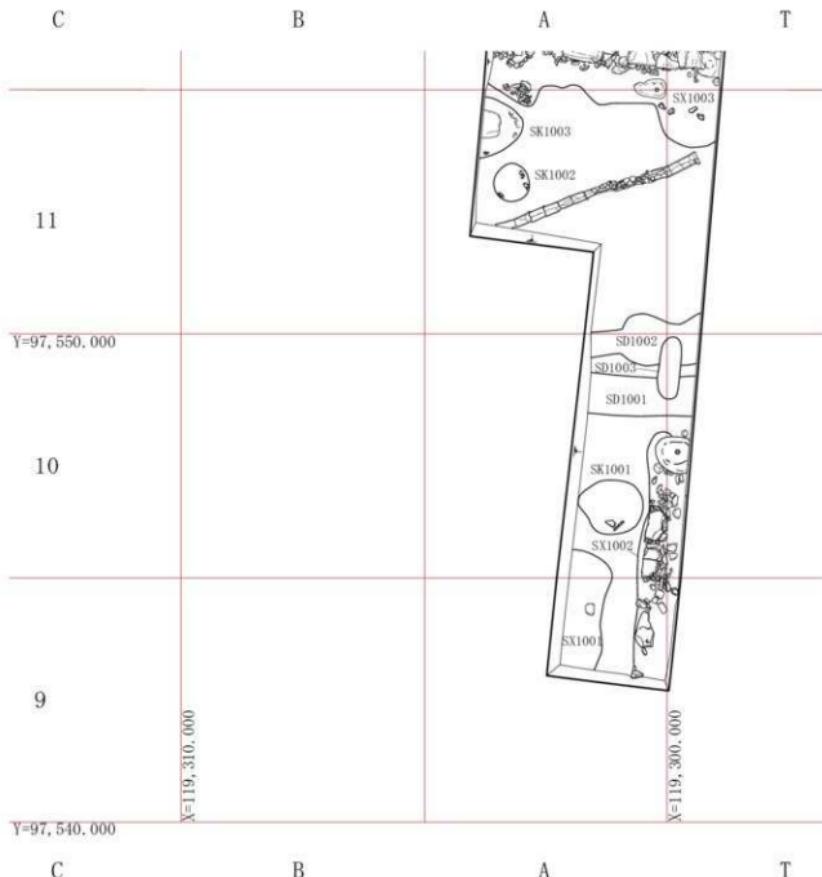
第12-2図 C区第3面遺構配置2 (1:100)



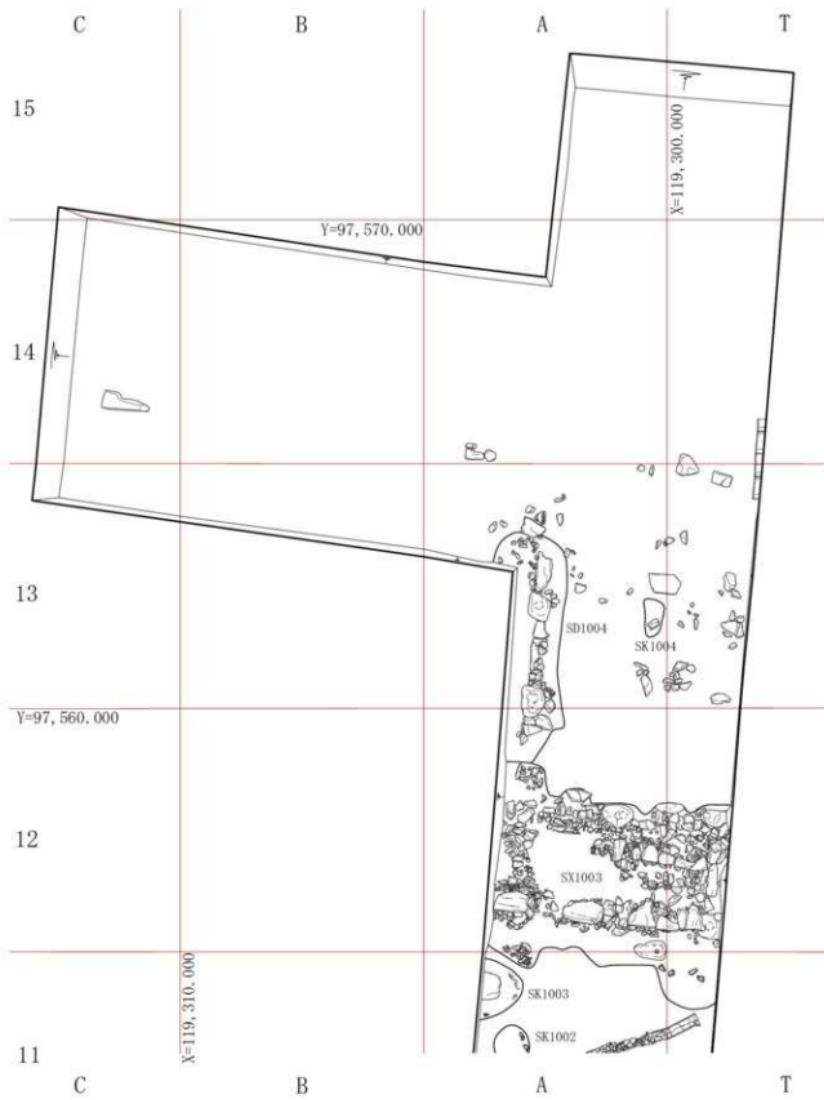
第 13-1 図 C 区第 2 面遺構配置 1 (1 : 100)



第13-2図 C区第2面遺構配置2 (1:100)



第14-1図 C区第1面遺構配置1 (1;100)



第14-2図 C区第1面遺構配置2 (1:100)

## 2. 遺構と遺物

### (1) AB 区第4遺構面

発掘調査によって、AB区およびC区から第1遺構面から第4遺構面までを検出した。時期の古い下層面から上層面の順で述べていく。ただし、発掘調査において、下層面の調査時に、上層面の遺構を検出し、調査を行った遺構もあり、本稿では調査時の遺構番号の順に成果を記述していく。

16世紀末から17世紀後半までの遺構ならびに遺物である。

#### ① AB区溝 (SD)

##### SD4006・SD4012・SD4022・SK4134 (第15・17図)

後世の擾乱によって途切れていますが、本来は調査区を東西に区切るような南北方向に長く直線的な一連の溝である。その規模は、南北長約27.5m、幅1.22m、深さ0.54mを測る。この長い溝は調査区南端部で東へほぼ直角に曲折していることがわかる。SD4016が後に形成しているが、検出東西長は5.28mを測る。後述するSX4029に隣接する南北方向の溝跡を除き、このように大規模で直線的な溝は他になく、敷地を区画する溝としての機能を有していたと考えられる。そしてこの区画する溝が、調査区南端部で東へ曲がるため、溝の南北方向に延びる部分では東西を区画し、溝の東西方向に延びる部分では南北を区画する機能を有していたと考えられる。直角に折れ曲がる溝は、徳島城下町跡の他の屋敷地調査にも認められており、規模の大小はあるものの、一般的な敷地内の区画方法といえる。

**出土遺物** 1は肥前系の磁器碗、2は肥前陶器の皿である。胎土目積の痕跡がある。3は土師器の皿である。底部外面に回転糸切り調整を施す。4は磁器の碗である。洗練された優品である。5・6は焼塩壺である。5は内面に指押さえ痕があり、厚みが均一ではなく不正形な形状である。6は内面に布押圧痕跡のある輪積み成形である。厚みが均一ではなく不正形な形状である。17世紀前半から中頃の年代である。

出土遺物は16世紀末から17世紀前半を中心とする年代である。

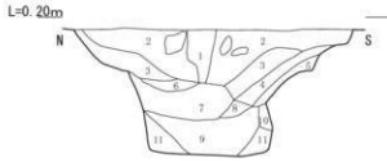
##### SD4016 (第16図)

東西方向に延びる溝である。その規模は長さ7.68m、幅2.32m、深さ約1mを測る。SD4012の後に形成されている。遺構内から東西方向に並ぶように多数の石が検出できた。SD4016はSD4012と同じ向きで延びており、一連の遺構と捉えることができる。すなわち、SD4012と同じく敷地を南北に区画する溝の機能を有していたと考えられる。

**出土遺物** 7は瀬戸美濃系の陶器輪花皿である。17世紀中頃の年代である。8は肥前産の磁器碗である。9は土師器の皿である。口縁部外面にロクロナデ調整が顕著である。10は肥前唐津の皿である。見込み内面に鉄絵で草木を描く。胎土目積の痕跡がある。11は肥前唐津の皿である。胎土目が一部遺る。12は土師器の皿である。13は肥前磁器の小碗である。14は肥前陶器の皿である。口縁部内面に鉄絵で弧状の線を2本描く。16世紀末から17世紀前半の年代である。10・11・14の高台は、削り出され小さく成形されている。15は備前産の陶器すり鉢である。すり目は8条／2.6cmである。斜め方向のすり目を有し、体部に凹凸をもつ。出土遺物は16世紀末から17世紀中ごろの年代である。



第 15 図 SD4006・SD4012・SD4016・SD4022・SK4134 遺構図



SD4016 西側土層断面図



SD4016 東側土層断面図

- 1: 墓灰黄色 (2.5Y4/2) シルト しまりやや弱い、粘性強い。約1~3mmの鉄化鉱を5%。  
 ≈1mm前後の Mn 鉱を5%、小礫・土器破片をわずかに含む。
- 2: 土灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト しまりやや弱い、粘性強い。約1~3mmの鉄化鉱を3%。  
 ≈1mm前後の Mn 鉱を2%、約4mmの Fe 鉱を15%含む。
- 3: オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト しまりやや弱い、粘性強い。約1~3mmの鉄化鉱を3%。  
 ≈1mm前後の Mn 鉱を5%、約1~3mmの Fe 鉱を20%、約90~200mmの石を10%含む。
- 4: 土灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト しまりやや強い、粘性強い。約1~6mmの Fe 鉱を5%含む。
- 5: オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト しまりやや弱い、粘性強い。約1~10mmの鉄化鉱を1%。  
 ≈1mm前後の Mn 鉱を2%、約1~3mmの Fe 鉱を10%含む。
- 6: 灰色 (10Y4/1) シルト しまりやや弱い、粘性強い。≈2mm前後の鉄化鉱を1%。  
 ≈1mm前後の Mn 鉱を2%含む。
- 7: 灰色 (5Y5/1) シルト しまりやや弱い、粘性強い。約1~15mmの鉄化鉱を1%。  
 ≈2mm前後の Mn 鉱を2%含む。
- 8: 土灰オリーブ色 (7.5Y3/2) シルト しまり弱い、粘性強い。層全体に Fe のシミが3%濃じる。
- 9: 灰色 (7.5Y4/1) シルト しまり弱い、粘性強い。約1~6mmの鉄化鉱を1%。  
 ≈1mm前後の Mn 鉱を2%含む。
- 10: 灰色 (10Y5/1) シルト しまり弱い、粘性強い。層全体に Fe のシミが2%濃じる。
- 11: 灰色 (7.5Y4/1) シルト しまり弱い、粘性強い。層全体に Fe のシミが3%濃じる。

- 1: 土灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト しまりやや弱い、粘性強い。  
 ≈1~3mmの Fe 鉱を5%、50×50mmの石を3%。  
 60×20mmの土器片を3%含む。
- 2: 土灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト しまりやや弱い、粘性強い。  
 ≈2mm前後の鉄化鉱を1%、≈1mm前後の Mn 鉱を3%含む。
- 3: 土灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト しまり弱い、粘性強い。  
 ≈1mm前後の Mn 鉱を2%含む。
- 4: 灰色 (5Y5/1) シルト しまりやや弱い、粘性強い。  
 ≈1~4mmの鉄化鉱を1%、≈1mm前後の Mn 鉱を7%含む。
- 5: 土灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト しまり弱い、粘性強い。  
 ≈1~7mmの鉄化鉱を3%、≈1mm前後の Mn 鉱を5%。  
 ≈30~100mmの石を10%、小礫・土器破片をわずかに含む。
- 6: 灰色 (7.5Y5/1) シルト しまり弱い、粘性強い。  
 層全体に Fe のシミが2%濃じる。

第 16 図 SD4016 土層断面図

### SD4023・SD4024・SD4025 (第 18・19 図)・SD4028 (第 18 図)

SD4023 は南北方向に直線的に延び、調査区北端部で東へ曲折し、また直線的に延びていた。検出した溝は中央部と南端部が後世の擾乱により損失しているが一連の溝である。検出長南北方向約 10 m、東西方向の長さ約 8 m、深さ 0.34 m を測る。

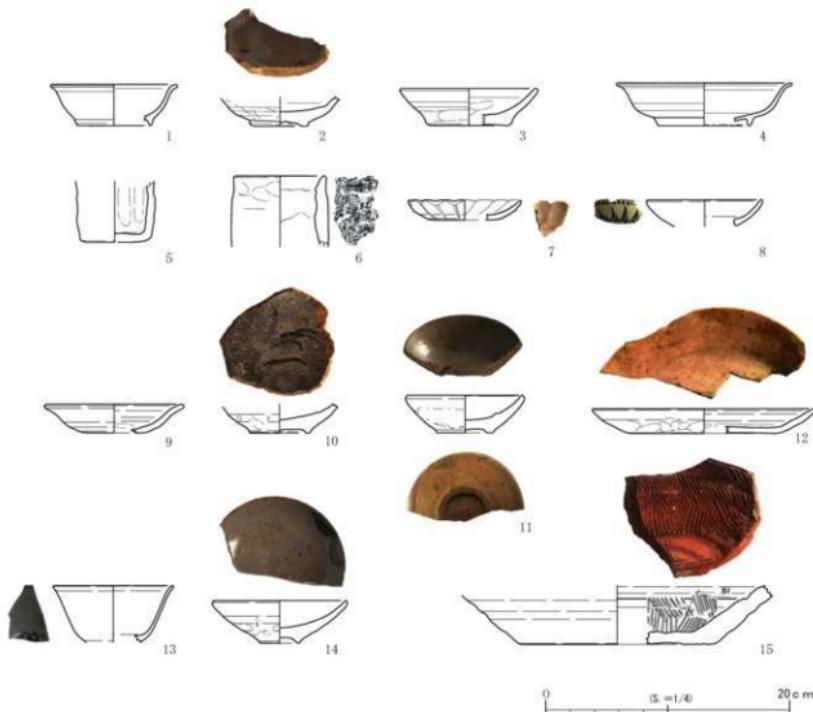
**出土遺物** 16 は陶器の炉である。香炉の可能性がある。

SD4024 は南北方向に延びる直線的な溝である。その規模は、検出長約 8 m、幅 1.12 m、深さ 0.4 m を測る。SD4024 は SD4023 と並んで延びている。SD4023・SD4028 よりも先行して形成している。

**出土遺物** 17 は土師器の皿である。口縁部外面は回転口クロ調整による凹凸が顕著である。

SD4025 は南北方向に延びる直線的な溝である。その規模は検出長 3.08 m、幅 1.36 m、深さ 0.4 m を測る。溝は南北両端部とも擾乱により失われているが、SD4023・SD4024 と並立して延びている。この 3 条の溝は規模・形状ともに類似して並んでいることから、一連の機能を有する、敷地を東西に区画する溝と考えてよいだろう。

**出土遺物** 18・19 は土師器の皿である。18 は口縁部内外面に焦げ目が付着している。灯明皿である。19 の底部外面は静止糸切り調整である。20 は肥前唐津の碗である。



第17図 SD4006・SD4016・SD4022・SK4134出土遺物

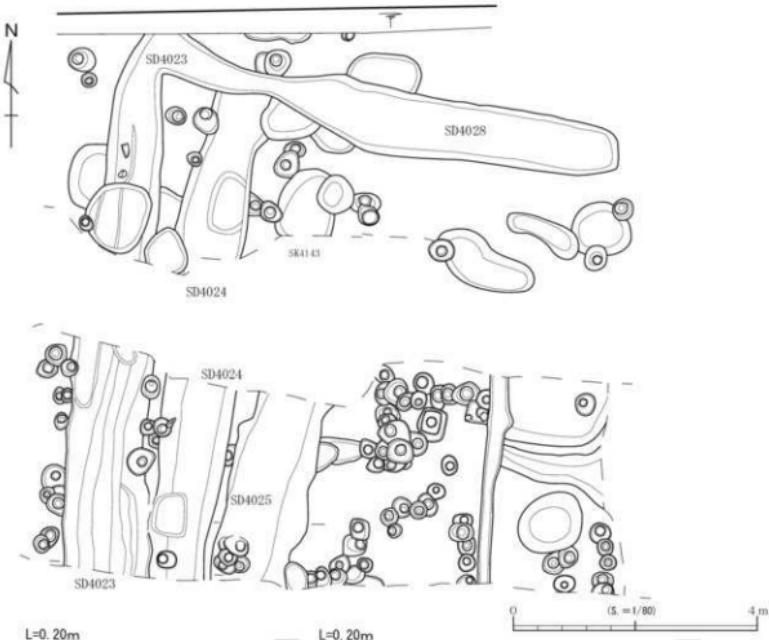
#### SD4027（第20図）

東西検出長3.52m、幅0.82m、深さ0.18mを測る。SD4027の東端部では、南北方向に延びるSD4021が先行して形成されている。SD4027とSD4021は、直交しており、この2条の溝は、SD4023・SD4028の一連の溝の形状と線対称のような位置にある。SD4027は敷地を南北に区画する溝と考えられる。

21は土師器の皿である。底部外面は回転糸切り調整である。22は「元祐通宝」の宋銭である。

#### SD4028（第21図）

SD4028は東西方向の溝で、南北方向に延びるSD4023と一連の溝である。長さ約8m、深さ1.04mを測る。23は土垂である。24は土師質の鍋である。



SD4025 土層断面図

SD4023

- 1: 灰オリーブ色 (B5/4/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1 \sim 8\text{mm}$  の炭化鉄を 15%,  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 20% 含む。
- 2: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 15% 含む。
- 3: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 5% 含む。
- 4: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1 \sim 14\text{mm}$  の炭化鉄を 2%,  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 15%, 小礫をわずかに含む。
- 5: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 2%,  $\phi 1\text{mm}$  前後の Fe 鉄を 15% 含む。

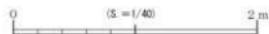
SD4024

- 1: 灰オリーブ色 (B5/4/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 25%,  $\phi 1\text{mm}$  前後の Fe 鉄を 10% 含む。
- 2: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 35%,  $\phi 1\text{mm}$  前後の Fe 鉄を 2% 含む。
- 3: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 20%,  $\phi 1 \sim 3\text{mm}$  の Fe 鉄を 20% 含む。小礫をわずかに含む。

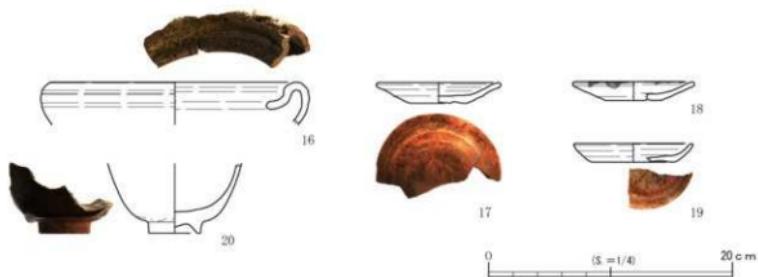
SD4025

- 1: 灰オリーブ色 (B5/4/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 2%,  $\phi 1\text{mm}$  前後の Fe 鉄を 15% 含む。
- 2: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 3% 含む。
- 3: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 5%,  $\phi 1 \sim 3\text{mm}$  の Fe 鉄を 20% 含む。
- 4: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 2%,  $\phi 1 \sim 3\text{mm}$  の Fe 鉄を 15% 含む。
- 5: 灰オリーブ色 (B5/5/2) シルト しまりやや強い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  前後の Mn 鉄を 5% 含む。

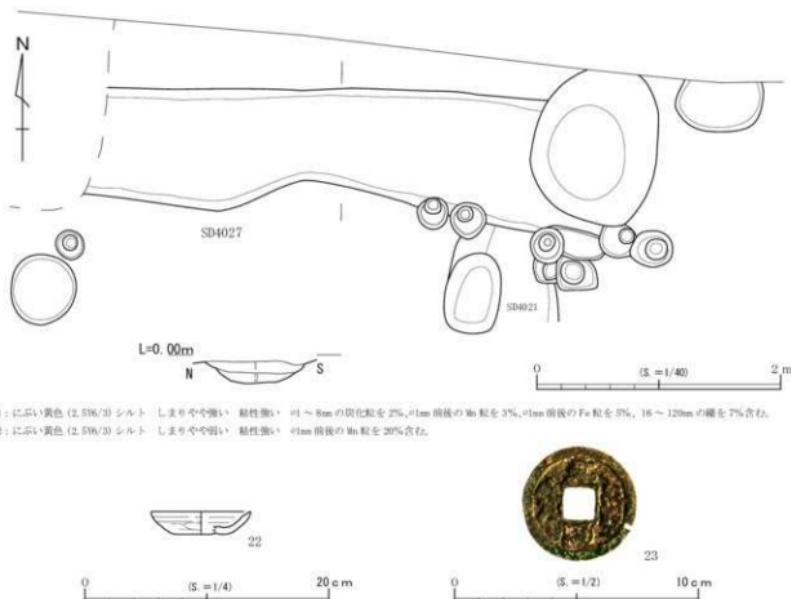
SD4023・SD4024 土層断面図



第 18 図 SD4023・SD4024・SD4025・SD4028 遺構図



第19図 SD 4023・SD4024・SD4025 出土遺物



第20図 SD4027 遺構図・出土遺物



第21図 SD4028遺構図・出土遺物

## ② AB区柵列 (SJ)

### SJ4001 (第32-1図)

第3遺構面 SX3009 の溝に切られていることから、第3遺構面の年代に、その機能は失われていたと考えられる。

## ③ AB区土坑 (SK)

### SK4071・SK4072 (第22図)

SK4071 は直径 1.16 m の円形状で、深さ 0.2 m を測る。出土遺物 25 は土師器の皿である。底部外面は回転糸切り調整である。

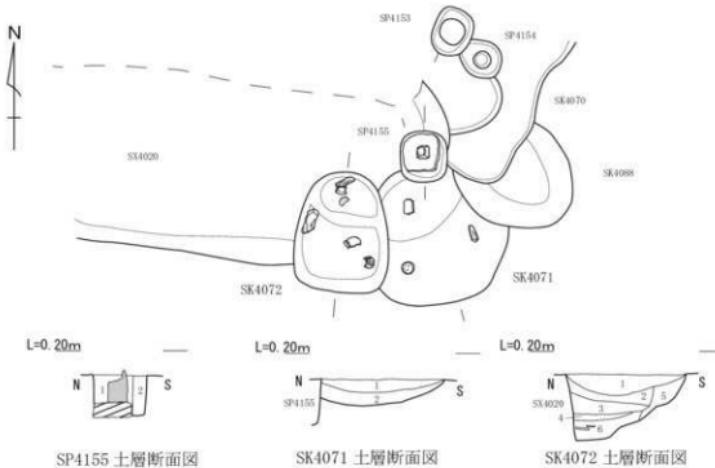
SK4072 は平面橢円形状で長軸長 1 m、短軸 0.76 m、深さ 0.54 m を測る。

出土遺物 26 は土師器の皿である。底部外面は回転糸切り調整である。27 は肥前唐津の皿である。17世紀前半の年代である。

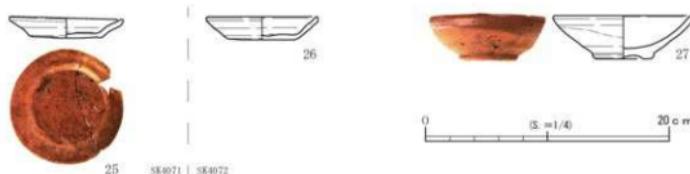
### SK4096・SK4102 (第23図)

SK4096 は平面隅丸三角形状で、長さ 1.14 m、幅 0.94 m、深さ 0.26 m を測る。出土遺物 28 は瀬戸美濃系の陶器の輪花皿である。17世紀の年代である。

SK4102 は平面橢円形状を呈し、南北長 1.66 m、東西長 1 m、深さ 0.58 m を測る。出土遺物 29 は土師器の皿である。口縁部内外面に焦げ目が付着する灯明皿である。



- SP4155 土層断面図  
SK4071 土層断面図  
SK4072 土層断面図
- SP4155  
1: オリーブ灰色 (SGV5/1) シルト しまりや弱い 粘性強い  
300×55mm の石を 20%, 280×10mm の木製品を 5% 含む。層全体に Fe のシミが 3% 漏じる。  
2: オリーブ灰色 (SGV5/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体に砂が 35% 漏じる。
- SK4071  
1: 灰色 (10Y5/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 0~5mm の炭化粧を 3%, >1mm 前後の Mn 粒を 5%, >1mm 前後の Fe 粒を 10%, 小礫をわずかに含む。  
2: オリーブ灰色 (SGV5/1) シルト しまり弱い 粘性強い 0~1~35mm の炭化粧を 5%, >1mm 前後の Mn 粒を 1% 含む。層全体に Fe のシミが 2% 漏じる。
- SK4072  
1: 灰色 (10Y5/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い >1mm 前後の Mn 粒を 2% 含む。層全体に Fe のシミが 20% 漏じる。  
2: 灰色 (10Y4/1) シルト しまり弱い 粘性強い >1~8mm の炭化粧を 5%, >2~30mm の礫を 3% 含む。層全体に Fe のシミが 5% 漏じる。  
3: 灰色 (10Y5/1) シルト しまり弱い 粘性強い 層全体に Fe のシミが 10% 漏じる。  
4: 灰色 (7.5Y3/1) 砂質土上 しまり弱い 粘性強い <2mm の砂が帯状に 40% 漏じる。  
5: 灰色 (10Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い >1~5mm の炭化粧を 3%, >1mm 前後の Mn 粒を 5%, >1mm 前後の Fe 粒を 10%, 小礫をわずかに含む。  
6: 灰色 (10Y4/1) シルト しまり弱い 粘性強い >1~8mm の炭化粧を 5%, >1mm 前後の Mn 粒を 7%, 小礫・土器細片をわずかに含む。



第22図 SK4071・SK4072 遺構図・出土遺物



第23図 SK4096・SK4102遺構図・出土遺物

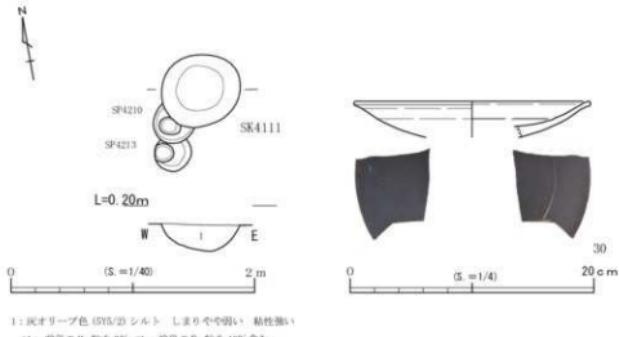
#### SK4111（第24図）

平面円形状直径0.6m、深さ0.2mを測る。30は肥前磁器の大皿である。

#### ④ AB区柱穴（SP）

##### SP4093（第25図）

平面直径0.32m、深さ0.42mを測る。また柱穴跡の中央部には柱痕跡が直径0.1mを測り、柱の一部が残存していた。出土遺物31は土師器の皿である。



第 24 図 SK4111 遺構図・出土遺物

#### SP4150 (第 25 図)

平面楕円形状で東西長 0.52 m、南北長 0.37 m、深さ 0.24 m を測る。柱穴跡の中央部には直径 0.18 m の柱痕跡が認められる。出土遺物 32 は土師器の皿である。口縁部内外面に焦げ目が付着する。灯明皿である。

#### SP4370 (第 26 図)

0.68 m × 0.48 m の楕円形状で、深さ 0.5 m を測る。大形の柱穴跡である。柱穴跡の西側には、直径 0.48 m の柱痕跡が認められた。柱痕跡には柱の一部が残存していた。

出土遺物 33 は瀬戸美濃系の陶器小碗である。底部外面は回転糸切り調整を施す。

#### ⑤ AB 区性格不明土坑 (SX)

##### SX4013 (第 27 図)

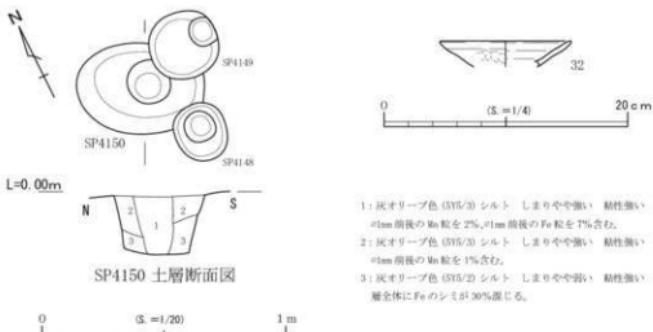
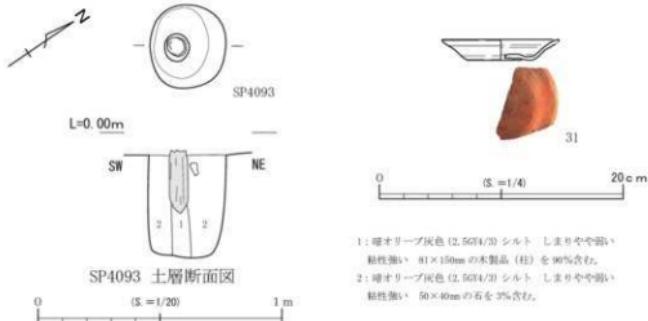
平面楕円形状で東西長 1 m、南北長 0.44 m、深さ 0.23 m を測る。

出土遺物 34 は備前産の鉢である。

##### SX4015 (第 28 図)

平面不正形状を呈し、検出長さ 6.32 m、幅 2.16 m、深さ 0.34 m を測る。遺構北端部は一部重なって、SX4013 が後に形成されている。

出土遺物 35 は土師器の皿である。底部外面は回転糸切り調整を施す。36 は肥前唐津の輪花皿である。37 は肥前唐津の皿で、鉄絵を口縁部内面に描く。胎土目積の痕跡がある。16 世紀末から 17 世紀前半の年代である。



第 25 図 SP4093・SP4150 遺構図・出土遺物

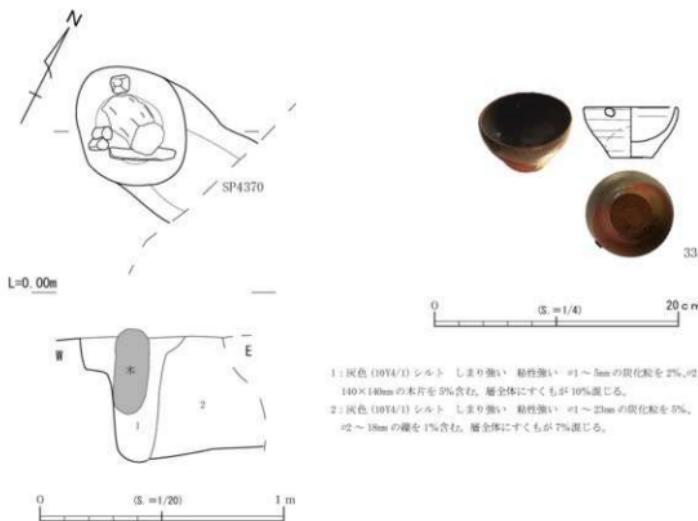
### SX4016・SX4024 (第 29 図)

平面楕円形状を呈し、東西長 2.52 m、南北長 1.72 m、深さ 0.64 m を測る。遺構北端部と西端部には一部重なって、SK4066・SK4089・SK4070 が後に形成されてる。

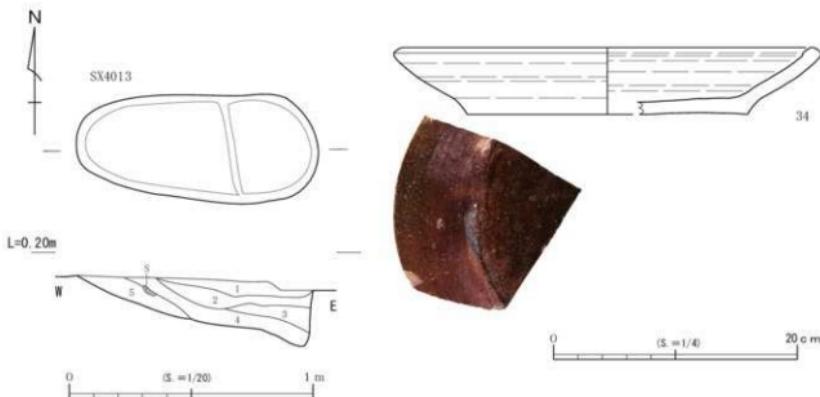
出土遺物 38・39 は土師器の皿である。

SX4024 は SK4071・SK4088・SX4015・SX4016 が重なって後に形成されていて、遺構の形状は不明である。検出長 2.48 m、検出幅 0.56 m、深さ 0.2 m を測る。

出土遺物 40 は肥前唐津の皿である。底部外面の胎土には焦げ目が付着する。



第 26 図 SP4370 遺構図・出土遺物



第 27 図 SX4013 遺構図・出土遺物



第28図 SX4015 遺構図・出土遺物

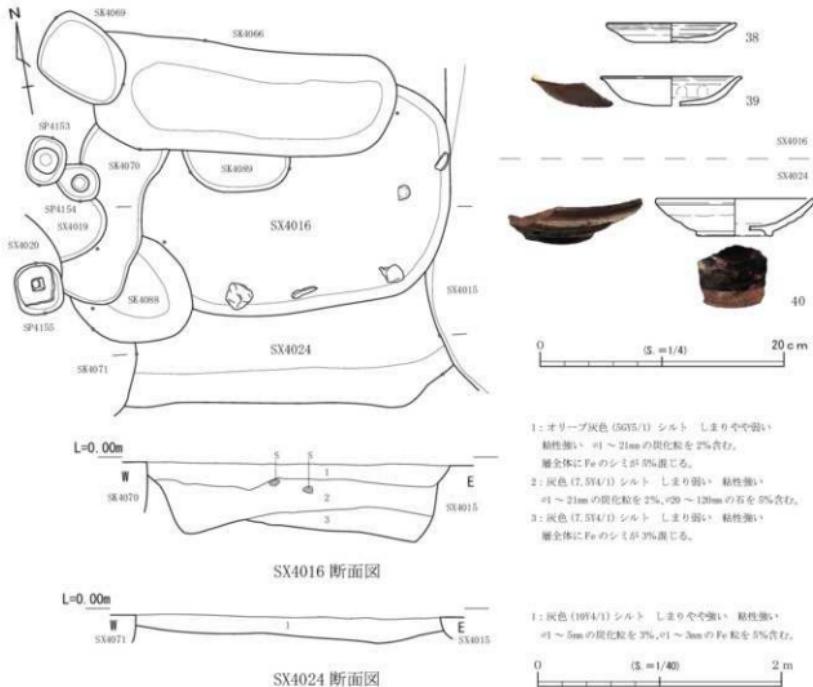
### SX4022 (第30図)

遺構の規模は東西長2.88m、南北長2.44m、深さ0.76mである。遺構の北端部は一部攪乱によつて失われているが、平面梢円形状と認められた。

出土遺物41・42は土師器の皿である。43は肥前唐津の溝縁皿である。内面に鉄絵を描く。16世紀末頃の年代である。44は備前のすり鉢である。注口部は機能的な形態である。

### SX4028 (第31図)

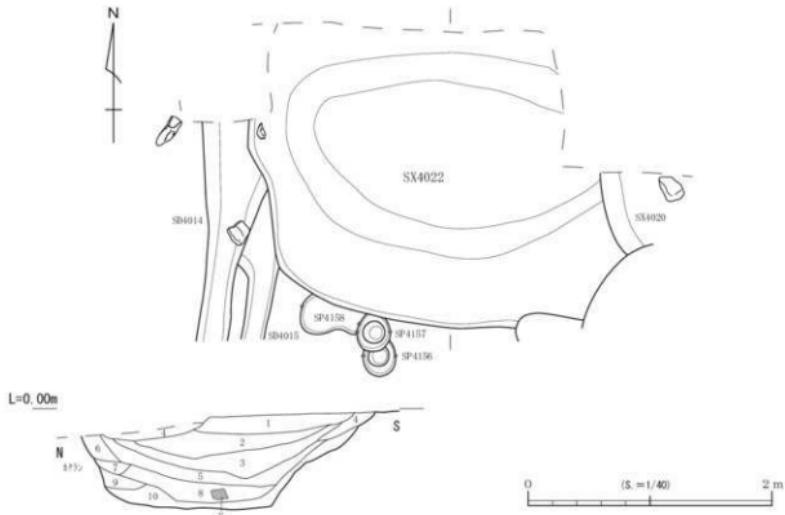
検出長1.64m、検出長0.72m、深さ0.24mを測る。遺構北半は調査区外へ延び、その西側は攪乱によつて失われている。45は肥前磁器の碗である。17世紀後半の年代である。



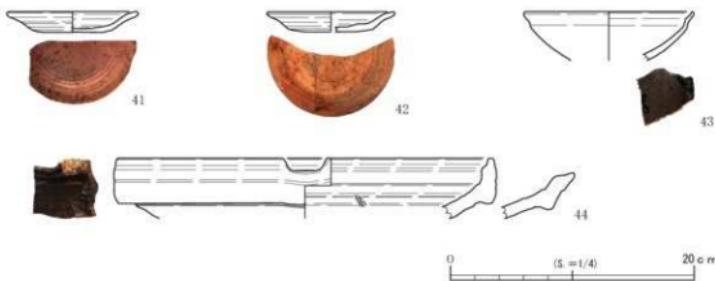
第29図 SX4016・SX4024遺構図・出土遺物

### SX4029 (第32・33・34・35図)

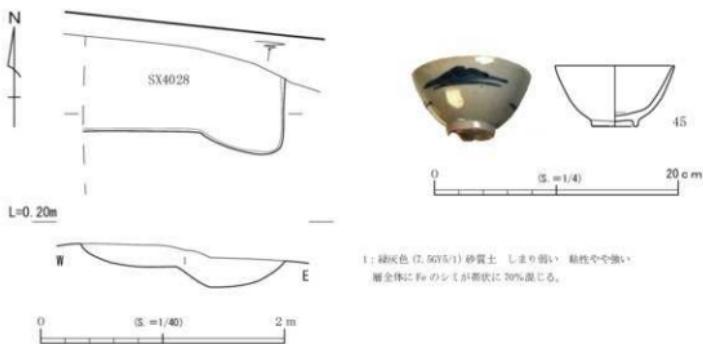
南北方向に直線的に延びる溝部分と東に隣接する不正形の土坑部分で構成され、AB調査区の1/5から1/6ほどの表面積を占める大形遺構である。溝部分の検出長は31.3m、幅1.68m、深さ約0.8mを測る。溝部分は北端部が調査区外へさらに延びている状況である。この大規模な溝は敷地を東西に区画する機能を有していたと考えられる。土坑部分は、東西最大幅17.6m、南北最大長16m、深さ1.1mを測る。平面は不成形状である。土坑部分の南東部隅に幅30cm長さ2m以上を測る細長い板材を4枚組み合わせた方形形状の筒を検出した。この筒は直立しており、その内部には1本の竹を通していった。筒と竹の内部には砂礫が堆積していた。筒を遺構から取り外したところ、今も下から湧水が勢いよくあり、当時は、この筒を使って湧水を汲み上げていたと考えられる。そのため、SX4029は池状遺構としての機能を有していたといえよう。この湧水を広く遺構に貯水する方法を考えると、以下に記す柵杭列を伴う掘り込みの役割が考えられる。



- 1: 橄榄綠色 (5Y5/2) シルト しまりやや弱い、粘性強い、0-1mm 前後の Mn 粒を 25%, 0-1 ~ 3mm の Fe 粒を 20% 含む。  
 2: 橄榄色 (5Y4/1) シルト しまりやや弱い、粘性強い、0-1 ~ 3mm の Mn 粒を 5% 含む。層全体に Fe のシミが 10% 蔑じる。  
 3: 橄榄色 (5Y4/1) シルト しまりやや弱い、粘性強い、層全体に Fe のシミが 5% 蔑じる。  
 4: 橄榄色 (5Y4/1) シルト しまりやや弱い、粘性強い、0-1mm 前後の Mn 粒を 7% 含む。層全体に Fe のシミが 3% 蔑じる。  
 5: オリーブ黒色 (7,5Y3/1) シルト しまり弱い、粘性強い、0-1 ~ 24mm の炭化鉱を 10%, 0-1mm 前後の Mn 粒を 5%, 0-1 ~ 32mm の Fe 粒を 5%、3 ~ 7mm の塊状鉱を 5% 含む。  
 6: 橄榄綠色 (5Y4/2) シルト しまりやや弱い、粘性強い、層全体に Fe のシミが 10% 蔑じる。  
 7: 橄榄綠色 (5Y4/2) シルト しまりやや弱い、粘性強い、層全体に Fe のシミが 30% 蔑じる。  
 8: オリーブ黒色 (7,5Y3/2) シルト しまり弱い、粘性強い、0-1 ~ 4mm の炭化鉱を 15%, 130x100mm の石を 7% 含む。層全体に多くの 60% 蔑じる。  
 9: 橄榄綠色 (5Y6/4/2) シルト しまり弱い、粘性強い、0-1mm 前後の Mn 粒を 1% 含む。  
 10: 橄榄綠色 (5Y4/2) シルト しまり弱い、粘性強い、0-1mm 前後の Mn 粒を 3%、0-1mm 前後の Fe 粒を 2% 含む。層全体に Fe のシミが 7% 蔑じる。



第30図 SX4022 遺構図・出土遺物



第31図 SX4028 遺構図・出土遺物

この掘り込みは南北約2m、東西約1.5m、深さ0.5mを測る平面円形状の遺構である。この遺構西端には杭列と横板で造られた柵が長さ約2mを測った。横板を固定するため、東側（土坑側）に杭を打ち込んでいた。杭は棒状のもののほか、加工材を転用して使用しているものもあった。溝部分は灰色シルト層が堆積しており、かつては水が堆積していたと理解でき、溝と土坑をつなぐ柵によって、溝から水によって運ばれてくる土砂などの堆積物を堰き止めていたと考えられる。

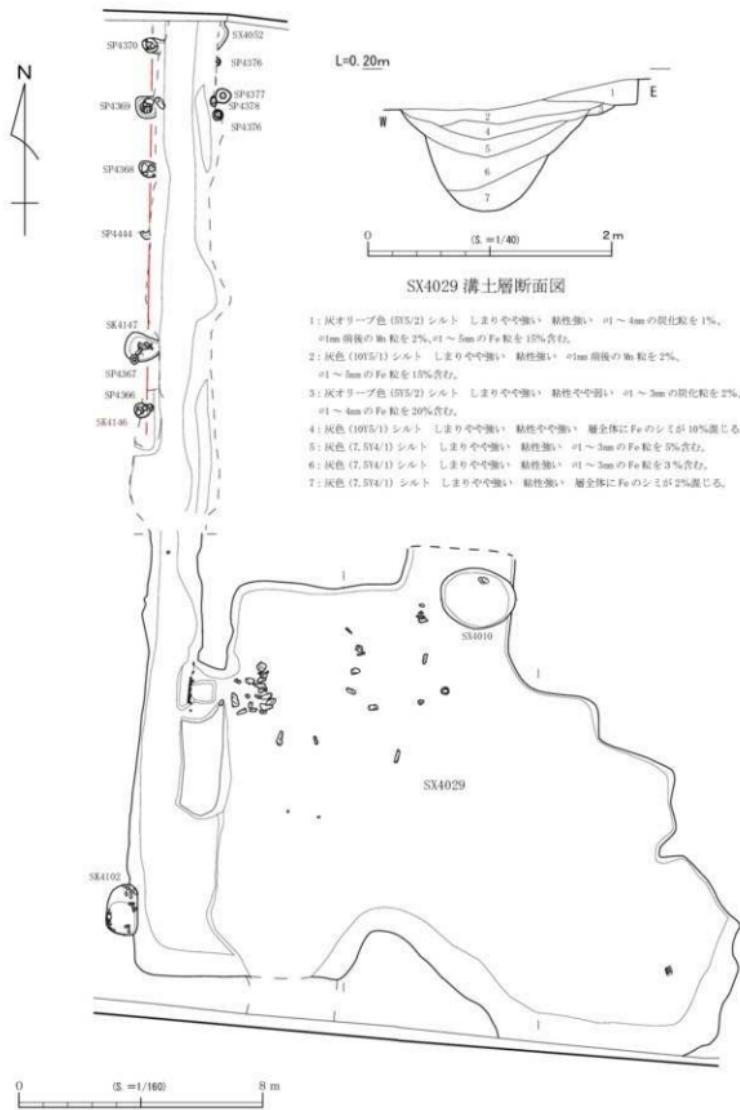
SX4029は第3遺構面で検出したSX3009と重複している範囲が広く、同様の形状であることから、第4遺構面のSX4029から第3遺構面のSX3009にかけて、長い時間使用していたことが窺える。

出土遺物46は焼塙壺の蓋である。土師質で口径が小さく厚みがあるのが特徴である。47・48は土師器の皿である。底部外面は回転糸切り調整である。47は外側面に48は内側に焦げ目が付着する灯明皿である。49・52・53・54は肥前唐津の陶器の溝縁皿である。砂目積の痕跡がある。50・51は肥前磁器の碗である。50は外側に草木、51は「様」と染付を行う。55は京信楽系の磁器の碗である。56は備前の火消し壺の蓋である。出土遺物の年代は17世紀前半を中心とした年代である。

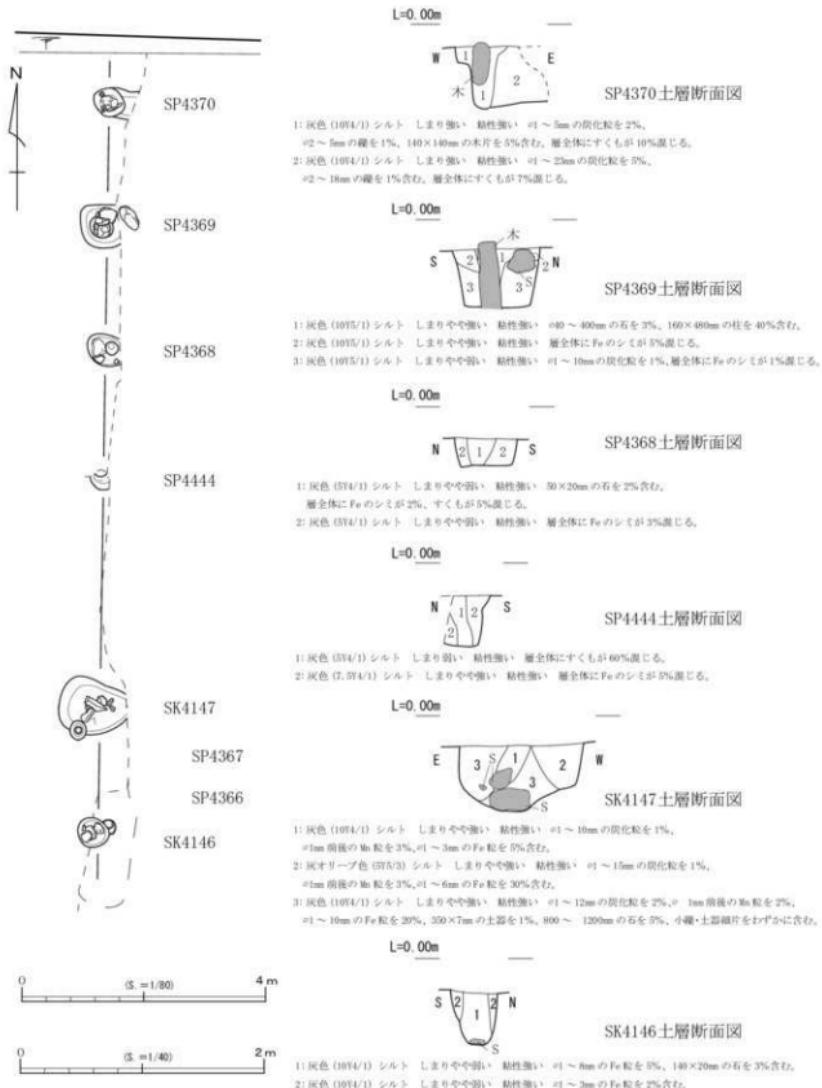
#### SX4034（第36図）

平面不正形の土坑で、その規模は長軸長3.48m、短軸長1.8m、深さ1.6mを測る。遺構内から杭を検出した。

出土遺物57は肥前陶器の小碗である。底部外面は回転糸切り調整を施す。58は瀬戸美濃系の天目茶碗である。高台部が欠損している。出土遺物の年代は17世紀前半頃である。

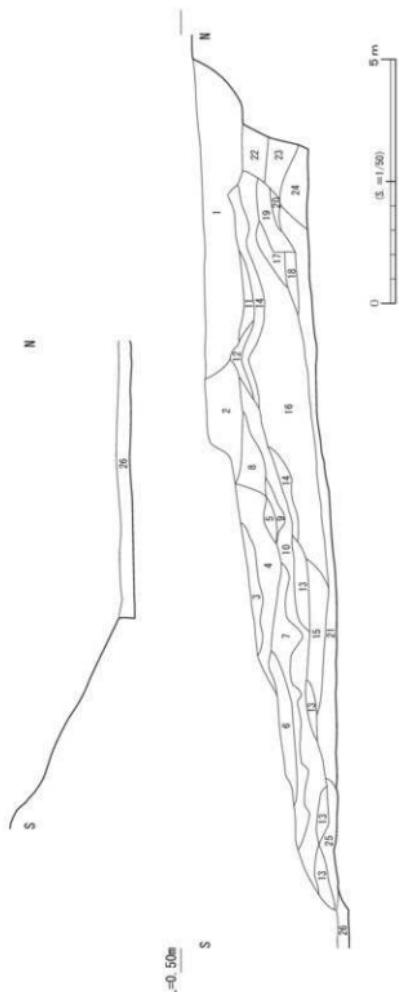


第32図 SX4029 遺構図



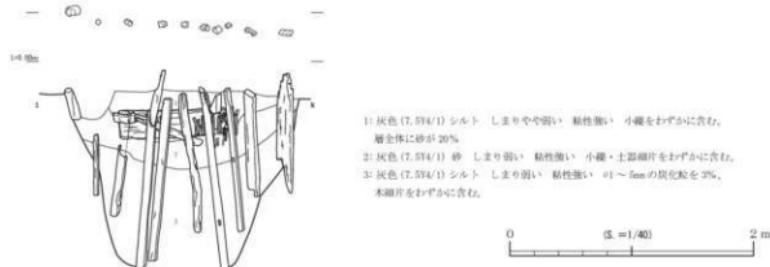
第 32-1 図 SJ4001 遺構図

L=0, 50m

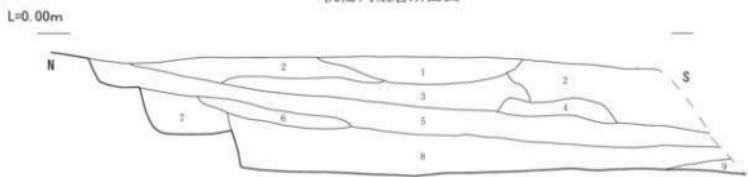


第33図 SX4029 西側土壠断面図

1. 土壠オーライジン(0.84.2) 砂質土。しまりやや強め、粒状やや弱め、粒状やや弱めの1cmの炭化度を1%。  
2. オーライジン黒色。(0.32.2) 砂質土。しまりやや強め、粒状やや弱め、粒状やや弱めの1cmの炭化度を1%。  
3. オーライジン黒色。(0.31.2) 砂質土。しまりやや強め、粒状やや弱めでもが1%炭化度を1%。  
4. 土壠色(0.085.1) シルト。しまりやや強め、粒状やや弱め、粒状やや弱めでもが1%炭化度を1%。  
5. 土壠色(0.34.0) シルト。しまりやや強め、粒状やや弱め、粒状やや弱めでもが1%炭化度を1%。  
6. 土壠色(0.30.0) シルト。しまりやや強め、粒状やや弱め、粒状やや弱めでもが1%炭化度を1%。  
7. 土壠色(0.34.0) シルト。しまりやや強め、粒状強め、層中に砂が20%、層下に土が10%混じる。  
8. 土壠オーライジン黒色(0.80.1) シルト。しまりやや強め、粒状強め、層中に砂が20%、層下に土が10%混じる。  
9. 土壠色(0.84.0) シルト。しまりやや強め、粒状強め、小粒を多く含む。
10. オーライジン黒色(0.33.2) シルト。しまりやや強め、粒状強め、層中に砂が10%、少くも10%混じる。  
11. 土壠オーライジン黒色(0.2.56.0) 砂質土。しまりやや強め、粒状やや弱め、層中に砂が10%、少くも10%混じる。
12. 土壠オーライジン黒色(0.66.0) 砂質土。しまりやや強め、粒状やや弱め、層中に砂が10%、少くも10%混じる。
13. 土壠色(0.30.4) シルト。しまりやや強め、粒状やや弱め、層中に砂が10%混じる。
14. 土壠色(100.83.2) シルト。しまりやや強め、粒状強め、層全体に少くも10%炭化度を1%。  
15. 土壠色(100.83.1) 砂質土。しまりやや強め、粒状やや弱め、1cm～2mmの炭化度を1%含む。
16. 土壠色(100.64.1) シルト。しまりやや強め、粒状強め、層全体に少くも10%炭化度を1%含む。
17. 土壠色(100.4) シルト。しまりやや強め、粒状強め、層全体に少くも10%炭化度を1%含む。
18. 田代リーフ灰色(0.80.4) 砂質土。しまりやや強め、粒状強め、層全体に少くも10%炭化度を1%含む。
19. 田代リーフ灰色(0.80.2) シルト。しまりやや強め、粒状強め、層全体に少くも10%炭化度を1%含む。
20. 田代リーフ灰色(0.80.1) 砂質土。しまりやや強め、粒状強め、層全体に少くも10%炭化度を1%含む。
21. 土壠色(100.81.0) 砂質土。しまりやや強め、粒状やや弱め、小粒を多く含む。層全体に少くも10%炭化度を1%含む。
22. 土壠色(100.81.0) シルト。しまりやや強め、粒状強め、1cm～2mmの炭化度を1%含む。
23. 土壠色(100.81.0) シルト。しまりやや強め、粒状強め、層全体に少くも10%炭化度を1%含む。
24. 田代リーフ灰色(0.80.1) シルト。しまりやや強め、粒状強め、層全体に少くも10%炭化度を1%含む。
25. 田代リーフ灰色(0.80.1) 砂質土。しまりやや強め、粒状やや弱め、層全体に少くも10%炭化度を1%含む。
26. 土壠色(100.82.0) シルト。しまりやや強め、粒状やや弱め、層全体に少くも10%炭化度を1%含む。

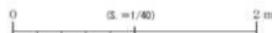


杭柵列土層断面図



東側土層断面図

- 1: 灰色 (7.5V/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 110×60mmの漆器を 2%、層全体に Fe のシミが 10%混じる。
- 2: 灰色 (10V/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 11～18mmの貝貝殻を 2%含む。層全体にすくもが帶状に 15%、Fe のシミが 5%混じる。
- 3: 灰色 (5V/1) シルト しまり弱い 粘性強い 層全体に Fe のシミが 20%混じる。
- 4: 灰色 (3V/1) シルト しまり弱い 粘性強い 0.1～3mmの貝貝殻を 2%、層全体に Fe のシミが 10%混じる。
- 5: 灰色 (7.5V/1) シルト しまり弱い 粘性強い 0.1～15mmの貝貝殻を 3%、0.5～25mmの木片を 2%含む。
- 6: 灰色 (10V/1) シルト しまりやや弱い 粘性やや強い 層全体に Fe のシミが 2%混じる。
- 7: 灰色 (7.5V/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 小縫をわずかに含む。層全体に Fe のシミが 30%混じる。
- 8: 灰色 (7.5V/1) 砂 しまり弱い 粘性強い 小縫・土器細片をわずかに含む。層全体に Fe のシミが 5%混じる。
- 9: 灰色 (7.5V/1) シルト しまり弱い 粘性強い 0.1～5mmの炭化粧を 3%、木細片をわずかに含む。

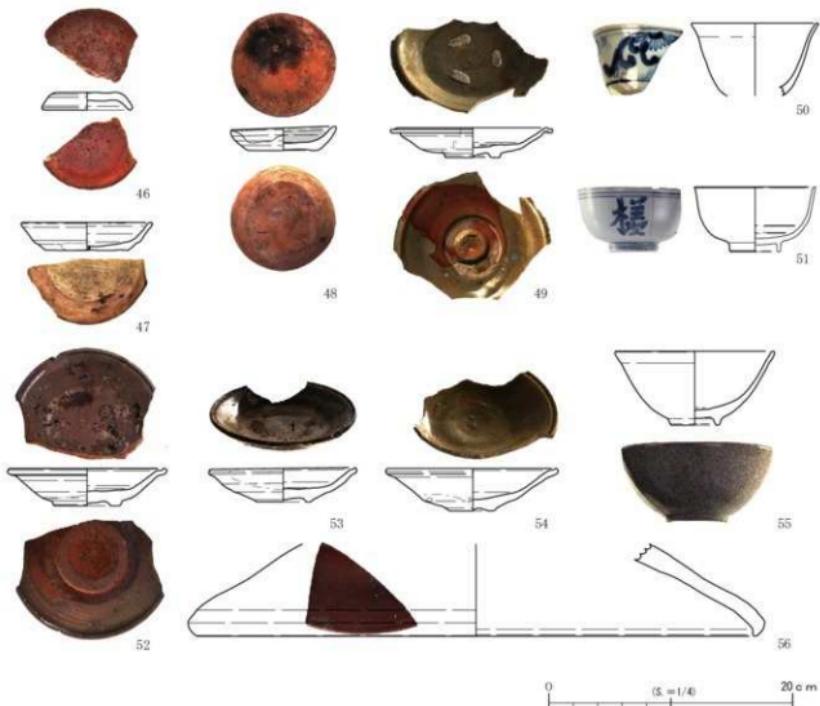


第 34 図 SX4029 土層断面図

### SX4035 (第 37・38 図)

平面不整円形状で、東西長 1.8 m、南北長 2.08 m、その深さは約 1.5 mを測る。第 4 遺構面で検出し調査を行ったが、遺物は 19 世紀の年代を中心であり、第 2 遺構面の年代の遺構と考えられる。

出土遺物 59 は肥前系の磁器小碗である。60 は瀬戸美濃系の磁器の蓋である。61 は瀬戸美濃系の仏飯器である。62 は京信楽系の碗である。外面に梅唐草文を描く。63 は京信楽系の磁器小碗である。色絵で注連繩文のウラジロを描く。64 は萩の磁器のビラ掛け小碗である。19 世紀初頭である。65 は瀬戸美濃系の受付皿である。受け部は断面が三角形状で、口縁部よりも低い位置にある。66 は用途不明の楕円形状の鉄製品である。67 は瀬戸美濃系の磁器碗、68 は肥前系の磁器碗である。69 は瀬戸美濃系の磁器の広東形碗である。70 は肥前系の大形碗である。71 は瀬戸美濃系の磁器水滴である。72 は



第35図 SX4029出土遺物

肥前系の磁器の花器である。73は瀬戸美濃産の陶器鉢である。体部外面に獅子の装飾を貼り付け、緑釉を掛ける。74は土師質の舟窓と呼ばれる焜炉である。

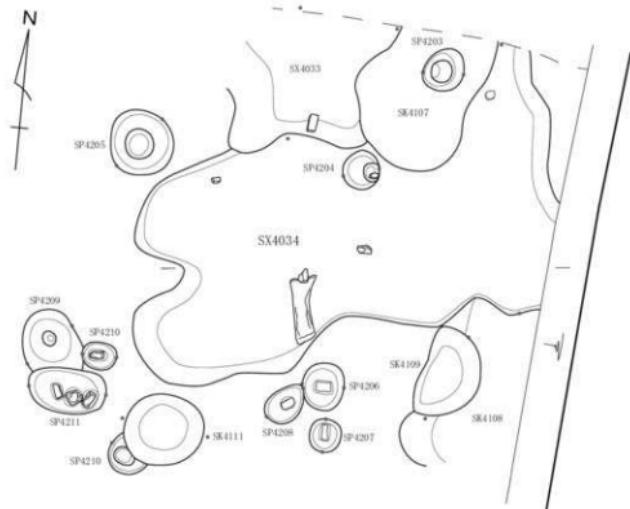
出土遺物の年代は19世紀初頭から前半である。

#### SX4038（第40図）

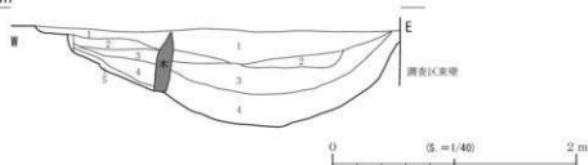
出土遺物75は土師器の皿である。口縁部内外面に焦げ目が付着する灯明皿である。76は京信楽系の植木鉢である。口縁部が輪花状となる。77は堺明石産のすり鉢である。

#### SX4041（第39・40図）

調査区西壁に沿うように検出した。検出幅5.6m、検出長1.76m、深さ1.2mを測る。平面形状は不明点が多いが、大形土坑である。出土遺物78は備前産のすり鉢である。体部の凹凸が顕著ですり目が斜め傾く。



L=0.20m



1:オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト しまりやや強い 黏性無い ≪3mmの炭化粧を1%, ≪1mm前後の Mn板を3%含む。

2:暗オリーブ灰褐色 (2.5D4/1) シルト しまりやや強い 黏性強い ≪1mm前後の Mn板を2%含む。

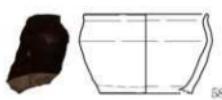
3:暗オリーブ灰褐色 (2.5D4/1) シルト しまりやや強い 黏性強い 層全体にFeのシミが10%覆する。

4:オリーブ黒色 (5Y2/2) シルト しまり弱い 黏性強い 層全体にすぐもが95%覆る。

5:オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト しまりやや弱い 黏性強い 層全体にFeのシミが1%覆る。



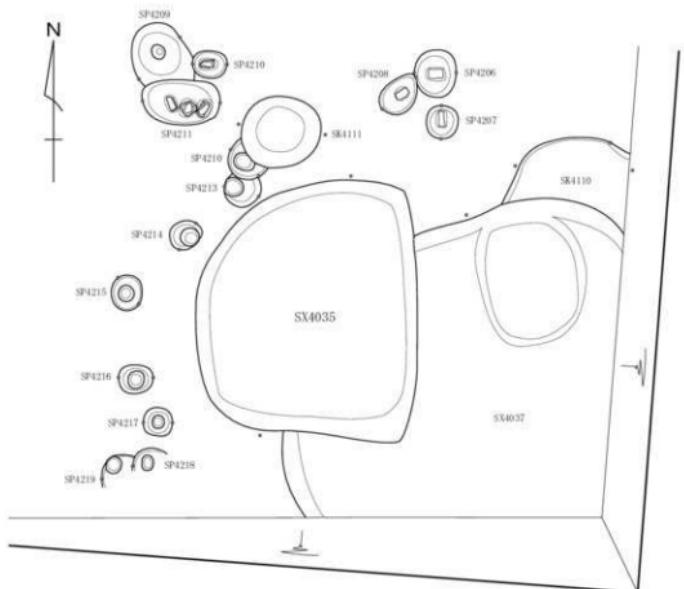
57



58

0 (S = 1/4) 20 cm

第36図 SX4034遺構図・出土遺物



0 (S. = 1/40) 2 m



第37図 SX4035 遺構図・出土遺物



66



67



68



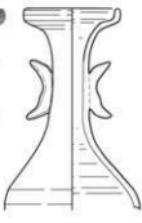
69



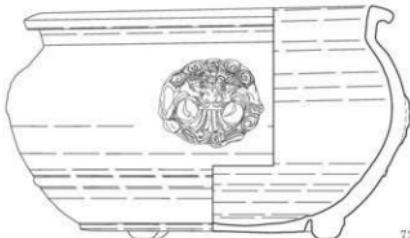
70



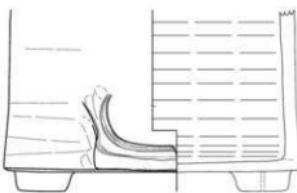
71



72

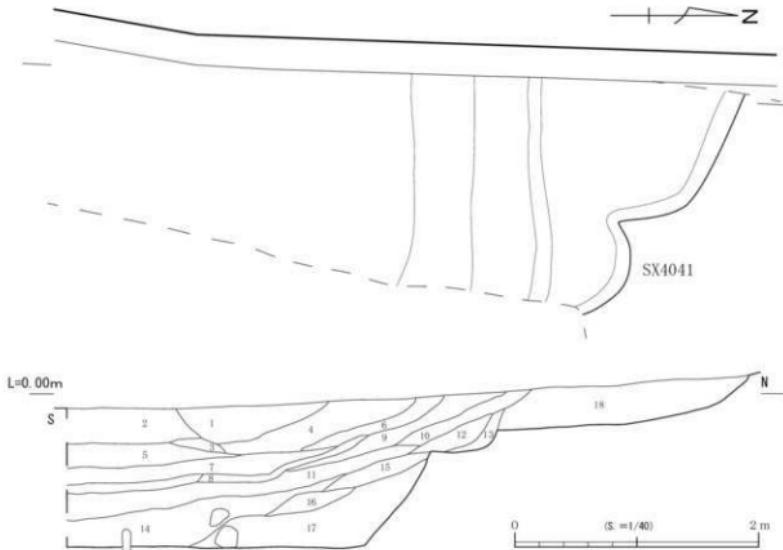


73



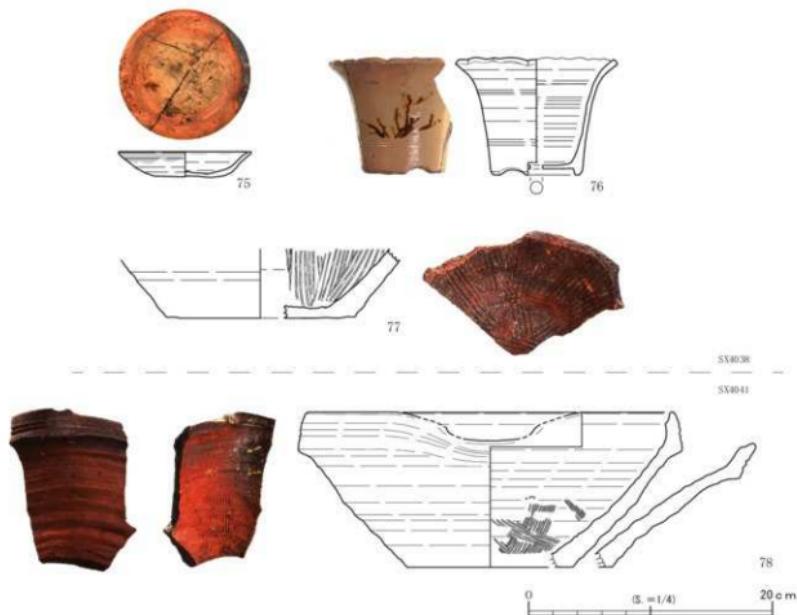
74

第38図 SX4035出土遺物



- 1: 地オリーブ色 (3Y5/2) シルト しまり強い 黏性強い 1mm 前後の Mn 颗を 20%, 1mm 前後の Fe 颗を 20% 含む。  
 2: 地オリーブ色 (3Y5/2) シルト しまり強い 黏性強い 1mm 前後の Mn 颗を 7%, 1mm 前後の Fe 颗を 15% 含む。  
 3: 地オリーブ色 (3Y4/2) シルト しまり強い 黏性強い 1mm 前後の Mn 颗を 7%, 1mm 前後の Fe 颗を 15% 含む。  
 4: 地オリーブ色 (3Y4/3) シルト しまり強い 黏性強い 0.1 ~ 6mm の炭化鉄を 3%, 1mm 前後の Mn 颗を 25%, 1mm 前後の Fe 颗を 20%。小礫をわずかに含む。  
 5: 灰色 (7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 黏性強い 1mm 前後の炭化鉄を 2%, 0.1 ~ 3mm の Fe 颗を 2%, 0.1 ~ 21mm の礫を 1% 含む。  
 6: オリーブ色 (3Y3/2) シルト しまりやや弱い 黏性強い 0.1 ~ 3mm の炭化鉄を 5%, 1mm 前後の Mn 颗を 2%, 0.1 ~ 5mm の Fe 颗を 30% 含む。  
 7: 灰色 (7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 黏性強い 0.1 ~ 5mm の炭化鉄を 3%, 0.1 ~ 3mm の Fe 颗を 10%。小礫をわずかに含む。  
 8: 黒褐色 (10Y3/2) シルト しまりやや弱い 黏性強い 0.1 ~ 3mm の炭化鉄を 2%, 0.1 ~ 4mm の礫を 2% 含む。層全体にすくもが 70% 蔑じる。  
 9: 地オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト しまりやや弱い 黏性強い 0.1 ~ 4mm の Fe 颗を 30% 含む。  
 10: 墓碑状色 (7.5G3/1) シルト しまりやや弱い 黏性強い 層全体に Fe のシミが 30% 蔑じる。  
 11: 地オリーブ色 (2.5G3/4/1) シルト しまりやや弱い 黏性強い 1mm 前後の炭化鉄を 3%, 0.1 ~ 3mm の Fe 颗を 10%, 0.1 ~ 10mm の礫を 10% 含む。層全体に Fe のシミが 30% 蔑じる。  
 12: 墓碑状色 (7.5G3/4/1) シルト しまりやや弱い 黏性強い 層全体に Fe のシミが 30% 蔑じる。  
 13: 墓碑状色 (7.5G3/4/1) シルト しまり弱い 黏性強い 層全体に Fe のシミが 3% 蔑じる。  
 14: 地オリーブ色 (3Y5/3) シルト しまり強い 黏性強い 0.1 ~ 24mm の炭化鉄を 7%, 1mm 前後の Mn 颗を 5%, 1mm 前後の Fe 颗を 3% 含む。  
 15: 灰色 (3Y4/1) シルト しまりやや弱い 黏性強い 0.1 ~ 8mm の Fe 颗を 20% 含む。  
 16: 墓碑状色 (7.5G3/4/1) シルト しまりやや弱い 黏性強い 0.1 ~ 12mm の炭化鉄を 7%, 1mm 前後の Fe 颗を 3%, 100 × 50mm の石を 2% 含む。層全体にすくもが 20% 蔑じる。  
 17: 灰色 (3Y4/1) シルト しまりやや弱い 黏性強い 0.1 ~ 3mm の炭化鉄を 2%, 1mm 前後の Mn 颗を 5%, 150 × 60mm の石を 2% 含む。層全体にすくもが 15% 蔑じる。  
 18: 灰色 (3Y4/1) シルト しまりやや弱い 黏性強い 0.1 ~ 5mm の炭化鉄を 1%, 1mm 前後の Mn 颗を 25%, 0.1 ~ 3mm の Fe 颗を 30% 含む。

第 39 図 SX4041 遺構図



第40図 SX4038・SX4041出土遺物

#### SX4047（第41図）

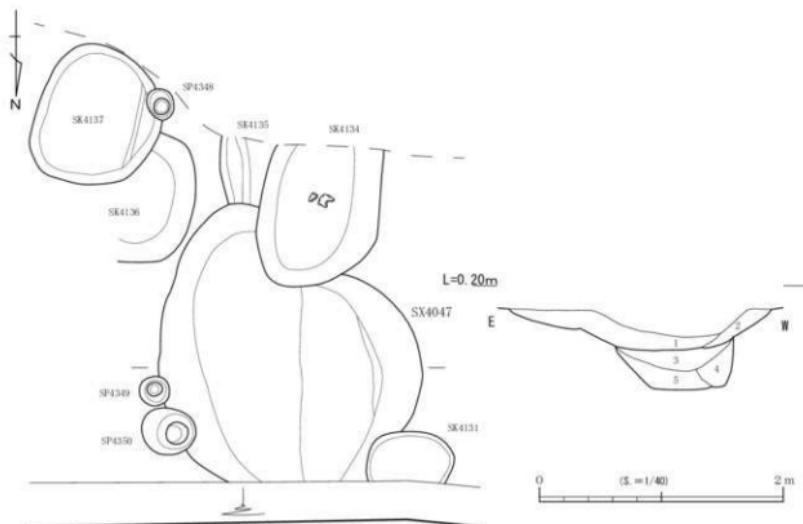
平面橢円形状で、東西長2.16m、南北長2.24m、深さ0.32mを測る。下層には、南北検出長1.6m、幅0.6m、深さ0.32mの溝を検出した。この溝は、南で検出したSD4006・SD4012・SD4022・SK4134の直線的な南北方向の溝の延長線上にある。遺構の前後関係は存在するものの、同様に敷地を東西に区画する溝としての機能を有していたと考えられる。

出土遺物79は土師質の土垂である。80は土師器の皿である。81・82は肥前唐津の陶器皿である。81は内面に鉄絵で草木を描く。83は把手付きの陶器の鍋である。

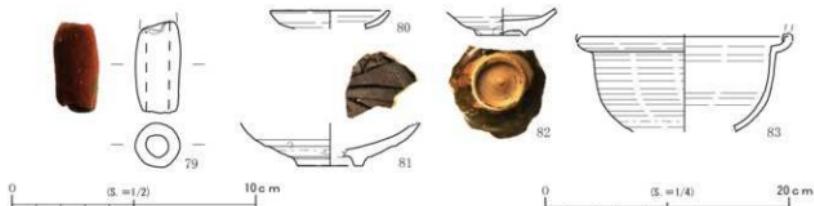
出土遺物は16世紀末から17世紀前半の年代である。

#### ⑥ AB区第4遺構面・第4遺物包含層（第42図）

出土遺物84は瀬戸美濃産の茶碗、織部焼である。装飾的で口縁部を歪ませている。17世紀前半である。85は土師器の皿である。86は陶器の蓋である。京信楽系の器種不明品、優品である。19世紀代である。87は瀬戸美濃産の天目茶碗である。高台部が欠損している。88は瀬戸美濃産の天目茶碗である。89は肥前産の輪花皿である。見込み内面にハリ溶着痕がある。18世紀から19世紀の年代である。

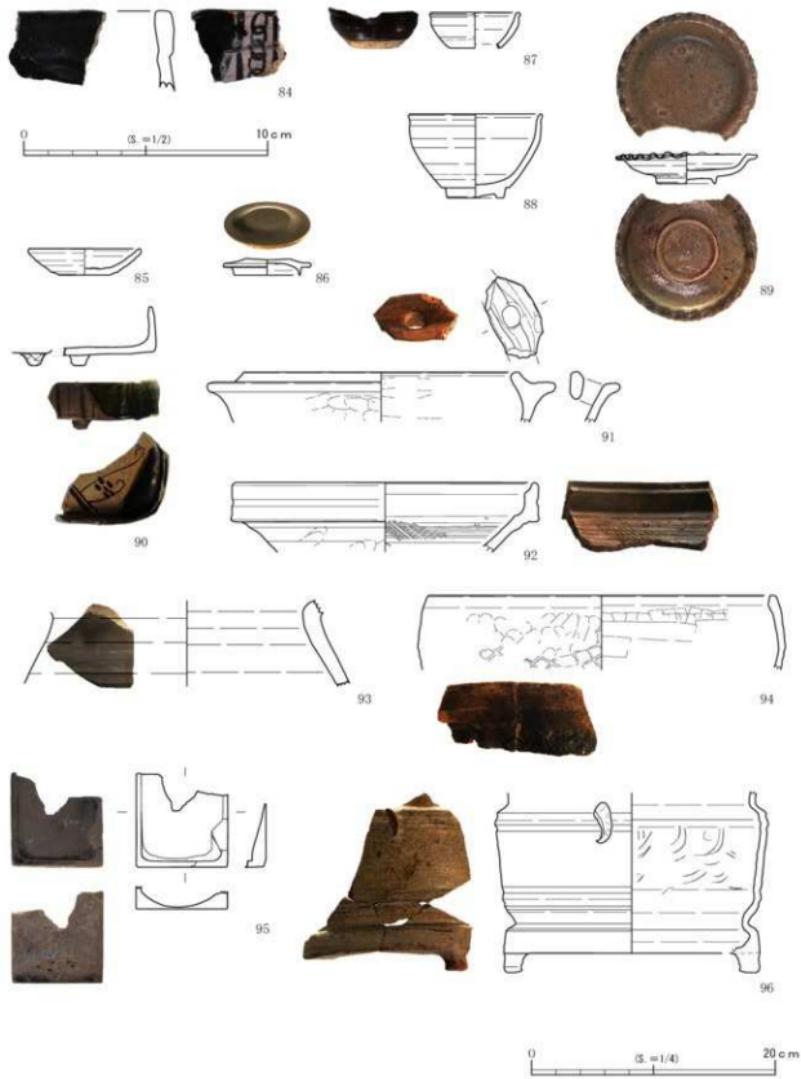


- 1: 灰オリーブ色 (B15/2) シルト しまりやや弱い 黏性強い、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の炭化粒を3%、 $\phi 1\text{mm}$ 前後の $\text{MnO}_2$ 鉱を3%、小礫をわずかに含む。  
 2: 灰オリーブ色 (B15/2) シルト しまりやや弱い 黏性強い、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の炭化粒を1%、 $\phi 1\text{mm}$ 前後の $\text{MnO}_2$ 鉱を3%、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ のFe鉱を2%含む。  
 3: 灰オリーブ色 (B15/2) シルト しまりやや弱い 黏性強い、 $\phi 1\text{mm}$ 前後の $\text{MnO}_2$ 鉱を7%、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ のFe鉱を1%含む。  
 4: 灰オリーブ色 (B14/2) シルト しまりやや強い 黏性強い、 $\phi 1\text{mm}$ 前後の $\text{MnO}_2$ 鉱を2%、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ のFe鉱を3%、小礫・土器破片をわずかに含む。  
 5: 灰オリーブ色 (B14/2) シルト しまり強い 黏性強い、 $\phi 1\text{mm}$ 前後のFe鉱を1%含む、層全体にすくもが10%混じる。



第41図 SX4047 遺構図・出土遺物

90は瀬戸美濃産の黒織部の向付である。17世紀前半である。91は土師器の鍋である。鍋に穿孔を有する。92は備前産のすり鉢である。93は須恵器の甕頸部片である。中世の可能性が高い。94は土師質の焙烙である。95は滑石の硯である。陸部分の摩耗が顕著である。摩耗により穿孔するまで使用したと考えられる。96は脚部を有する香炉である。接合しなかったが、胎土・色調・形状から16と同一遺物の可能性あり。



第42図 第4遺物包含層出土遺物

## C区第4遺構面

### ⑦ C区土坑 (SK)

#### C区 SK4017 (第43図)

平面円形状の土坑で、その規模は幅0.64m、検出長0.56m、深さ0.52mを測る。

出土遺物97は須恵器の壺・甕の体部片である。外面平行タタキ・内面同心円文を施す。古代の遺物である。

### ⑧ C区性格不明土坑 (SX)

#### C区 SX4006 (第44図)

長さ0.88、幅0.56m、深さ0.28mを測る。土坑としたが、遺構中央に柱痕跡をもつ柱穴跡である。柱痕跡の下部には礎石をもつ。

出土遺物98は備前系のすり鉢である。

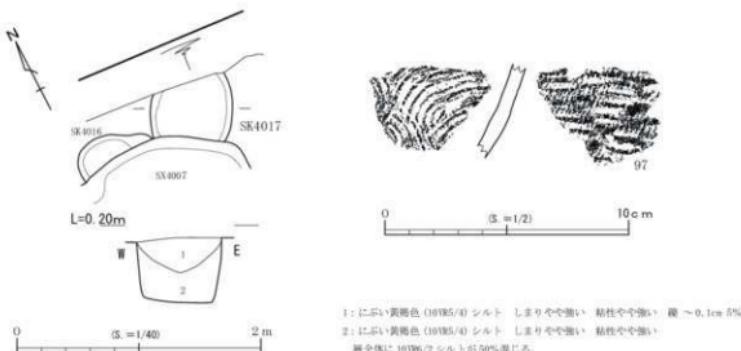
#### C区 SX4013 (第45図)

平面形状は不明な点が多い土坑である。その規模は、検出長1.92m、検出幅0.64m、深さ0.56mを測る。出土遺物99は土師質の甕である。

SP4001出土の100は備前系のすり鉢である。

### 第4遺構面出土遺物 (第46図)

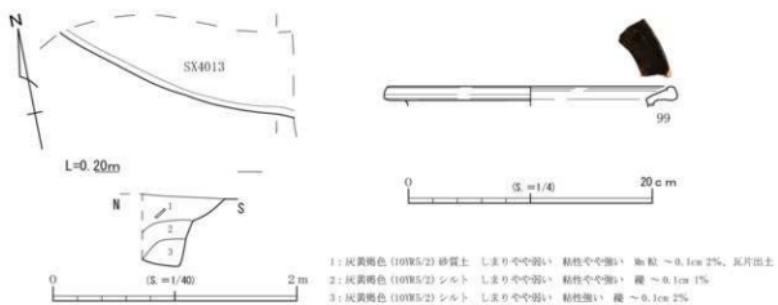
101は瀬戸美濃系の陶器碗である。102・105は陶器碗、103は受付皿、受部に「U」字状に2箇所切りかける。104は陶器鉢である。



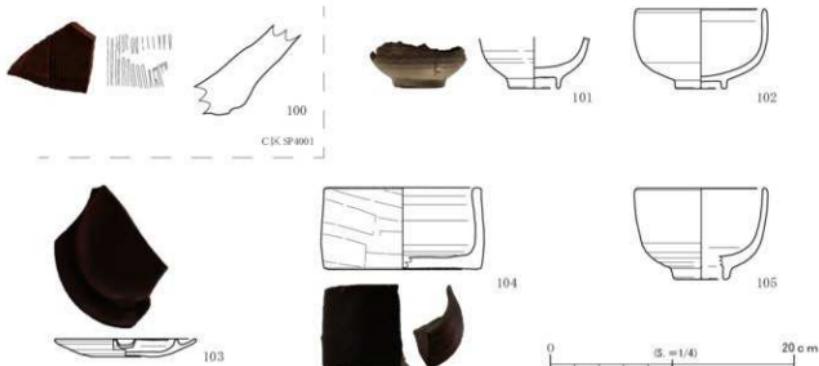
第43図 C区 SK4017 遺構図・出土遺物



第 44 図 C 区 SX4006 遺構図・出土遺物



第 45 図 C 区 SX4013 遺構図・出土遺物



第 46 図 C 区 S P 4001・第 4 遺構面出土遺物

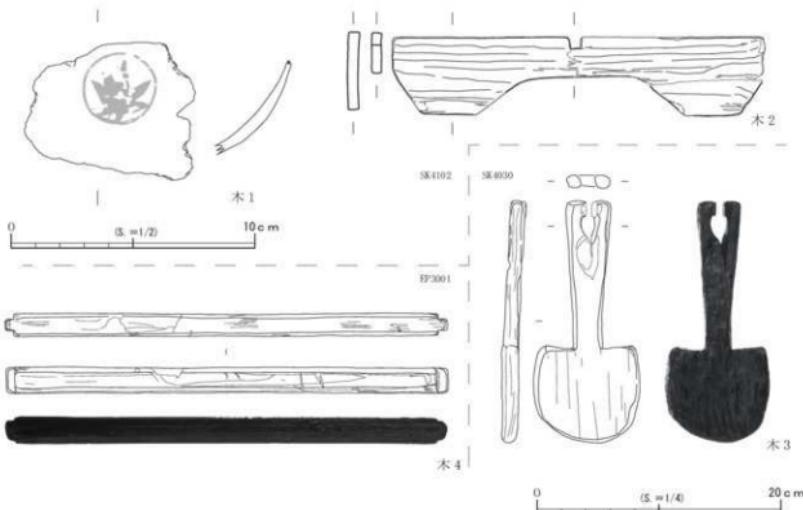
## ⑨ 木製品

第4遺構面から出土した木製品をここでまとめて記述する。

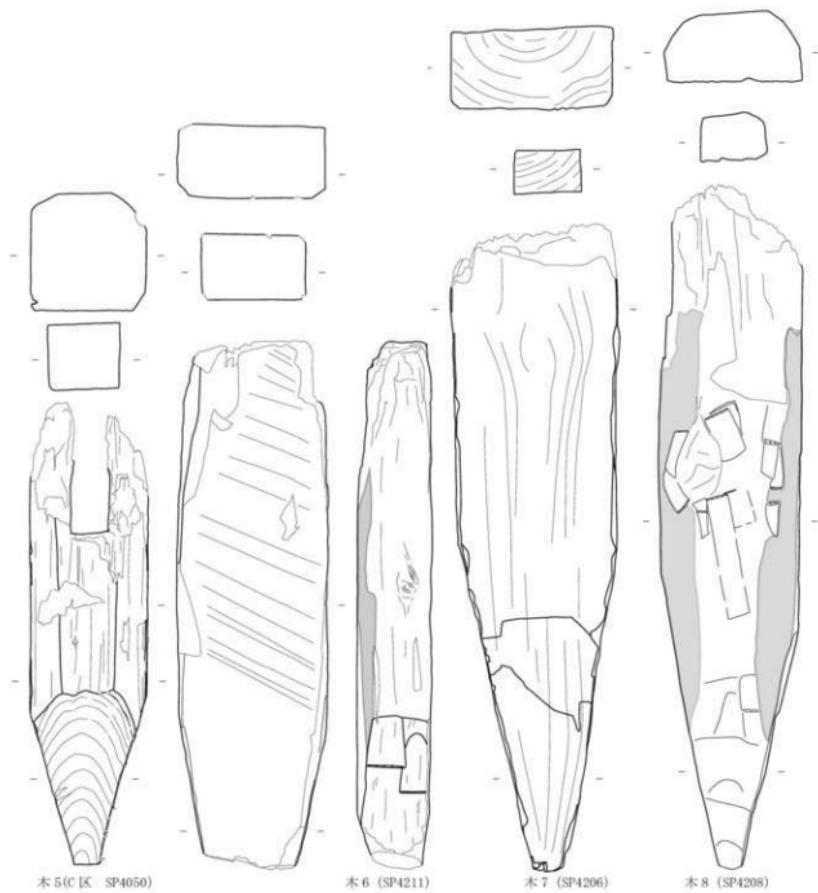
木1～木4（第47図）SK4102から木1と木2が出土した。木1は漆器椀である。内面に黒褐色、外面黒色の漆を塗る。外面に紋を描く。木2は折敷の脚部となる足打である。下端部中央を大きく窪ませ両端に脚を形成する。もう一つと並行に設置し足打とした。SK4030から木3が出土した。木3は杓文字である。上部は摩耗により方形状となり、下部は上部中央から棒状に成形し、下端部に1.0cmの穿孔を施す。穿孔部一部欠損する。EP3001から木4が出土した。木4は部材である。両端部を長方形状に削り出し柄を成形する。

木5～木8（第48図）は、建築部材の柱である。先を尖らし杭状とする。木5（C区SP4050）は丸太を断面方形に成形し、端部を尖るように成形する。上端部には大きく10.8cm×3.2cmの切り込みがある。この切り込みに桁を通すと考える。木6（SP4211）は断面長方形状に成形し、先を尖らせている。木7（SP4206）は丸太を縱に二分割し、一端を細く尖らせている。木8（SP4208）は断面長方形状に成形し、先を尖らせている。

木9～木11（第49図）はSX4015から出土した。木9は横櫛である。本体から齒を三角形状に削り出して成形する。木10は把手である。中央部を屈曲させて持ち手とし、両端部に柄を切り出す。復元長21.2cmとなる。柄に表面から一箇所穿孔する。木11は漆器腰丸椀である。内面に赤漆、外面に黒漆を塗る。



第47図 SK4030・SK4102・EP3001出土木製品



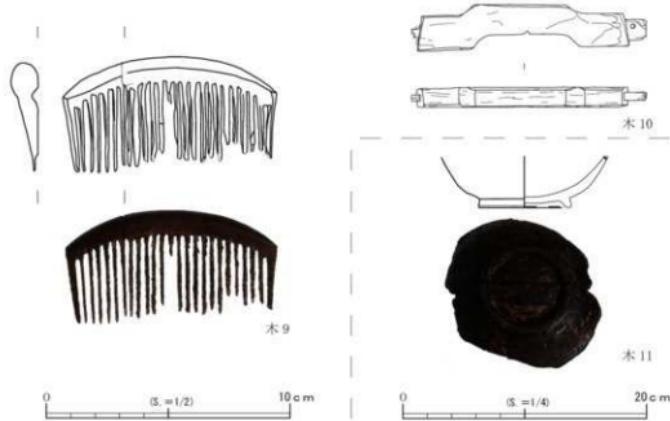
0      (1/4)      20 cm

第 48 図 SP4206・SP4208・SP4211・C 区 SP4050 出土木製品

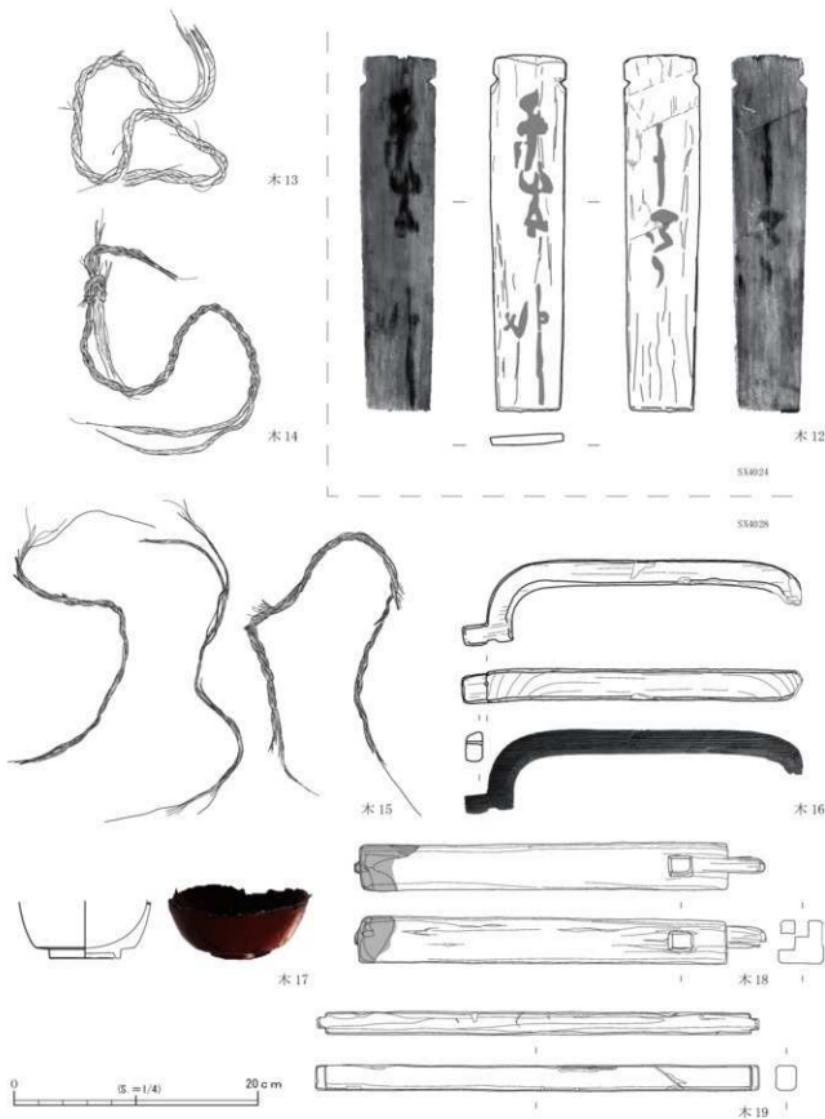
木12～木19(第50図)SX4024から木12が出土した。木12は木簡である。両側面上端部を切り欠き、上下両端部を切削する。両面に墨書きする。木13～木19はSX4028から出土した。

木13～木15は棕櫚繩である。木13～木15は2本の紐を右回り(時計回り)に縫り、紐はそれぞれ反時計回りに縫っている。木13の紐の太さは0.4cmと0.25cm、木14の紐の太さは0.3cmである。木15の紐の太さは最大0.4cmである。木16は把手である。断面方形状の平面「U」字形の把手。先端は外に開き、端部に釘穴を穿つ。木17は漆器椀である。体部の腰が張る、一文字腰椀Bである。内外面に赤漆を塗る。口縁部欠損する。木18は角材である。一端の側面中央部を方形状の柄に成形し、端部側面2箇所に方形の枘穴を穿つ。もう一端の側面端部は方形状の小さな枘を作り出し、炭化している。木19は木4と同形式の角材である。両端側面を長方形状に削り出して成形する。

木20～木24(第51図)、木25～木32(第52図)はSX4029から出土した。木20は金箔を貼った木製品である。長方形状の一端部を斜めに切り取る。木21は木垂である。細かく削り成形している。木22～木28は漆器椀である。木22は腰丸椀である。内面に赤漆、外面に黒漆を塗る。外面に赤漆の紋あり、菖蒲紋の可能性がある。木23は蓋椀である。内面に赤漆、外面に黒漆を塗り、外面に赤漆の根菜の紋がある。木24は腰丸椀である。内外面に赤漆を塗り、外面に黒漆の花の紋がある。高台部欠損する。木25は腰丸椀で内面に赤漆、外面に黒漆を塗る。木26は腰丸椀である。内外面に赤漆を塗る。下地に黒漆を塗布する。木27は高台が高い腰丸椀で、内面に赤漆、外面に黒漆を塗る。見込みに窪みがありロクロ成形時の痕跡と思われる。木28は高台が高い腰丸椀である。内面に赤漆、外面に黒漆を塗り、外面に草木の模様がある。木29は曲物である。側面に切り込みを入れ、樹皮の紐を通して縫うように留めている。木30は丸型連歛下駄である。台の厚み1.5cm、前歛欠損し前歛の位置に鉄釘1本木釘2本を打ち補修した痕跡がある。木31は刃物の柄である。板材をゆるやかな曲線状に成形し、裏面を方形状に削り窪ませる。木32は刃物の柄である。板材をゆるやかな曲線状に成形し、裏面



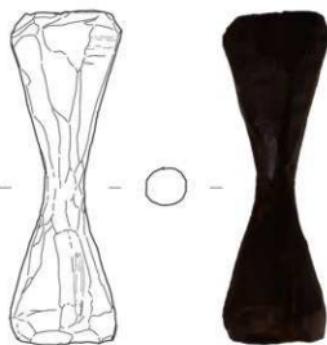
第49図 SX4015 出土木製品



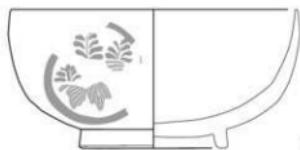
第50図 SX4024・SX4028出土木製品



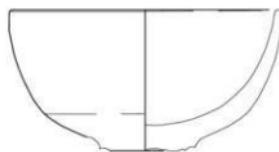
木20



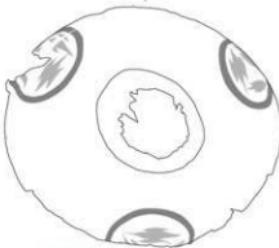
木21



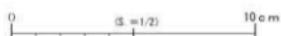
木22



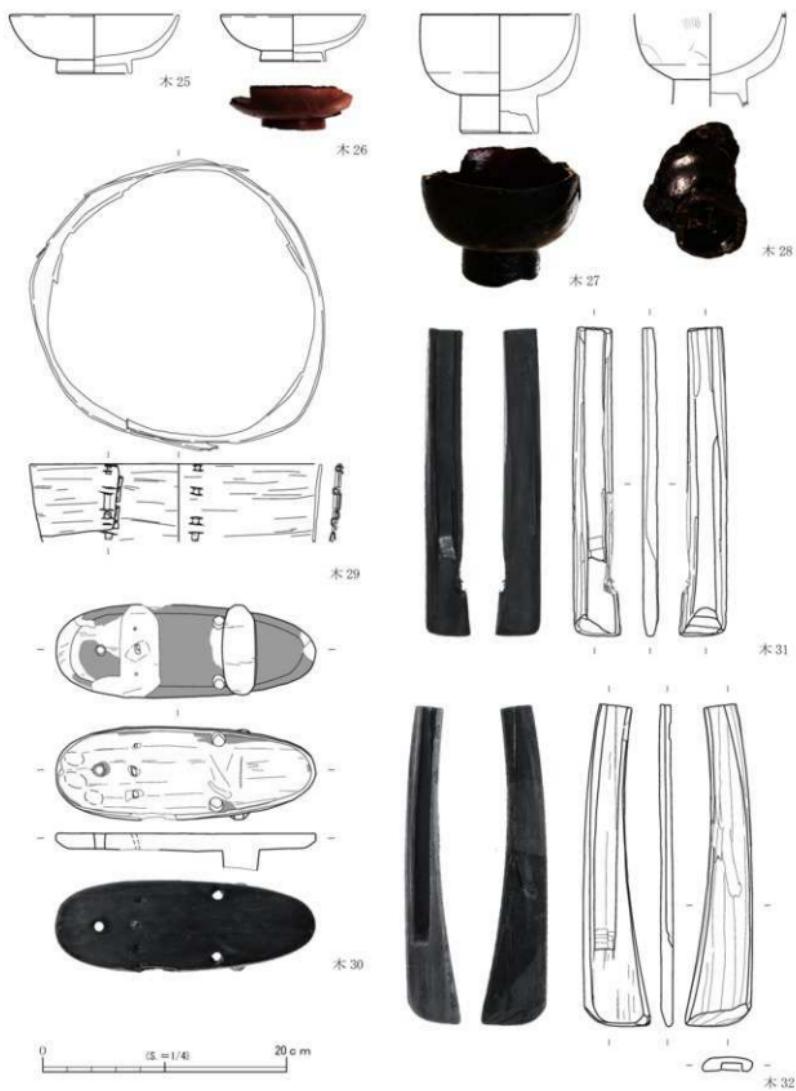
木25



木27



第51図 SX4029 出土木製品 1



第52図 SX4029出土木製品2

を方形状に削り窪ませる。表面に布を巻いた痕跡あり。

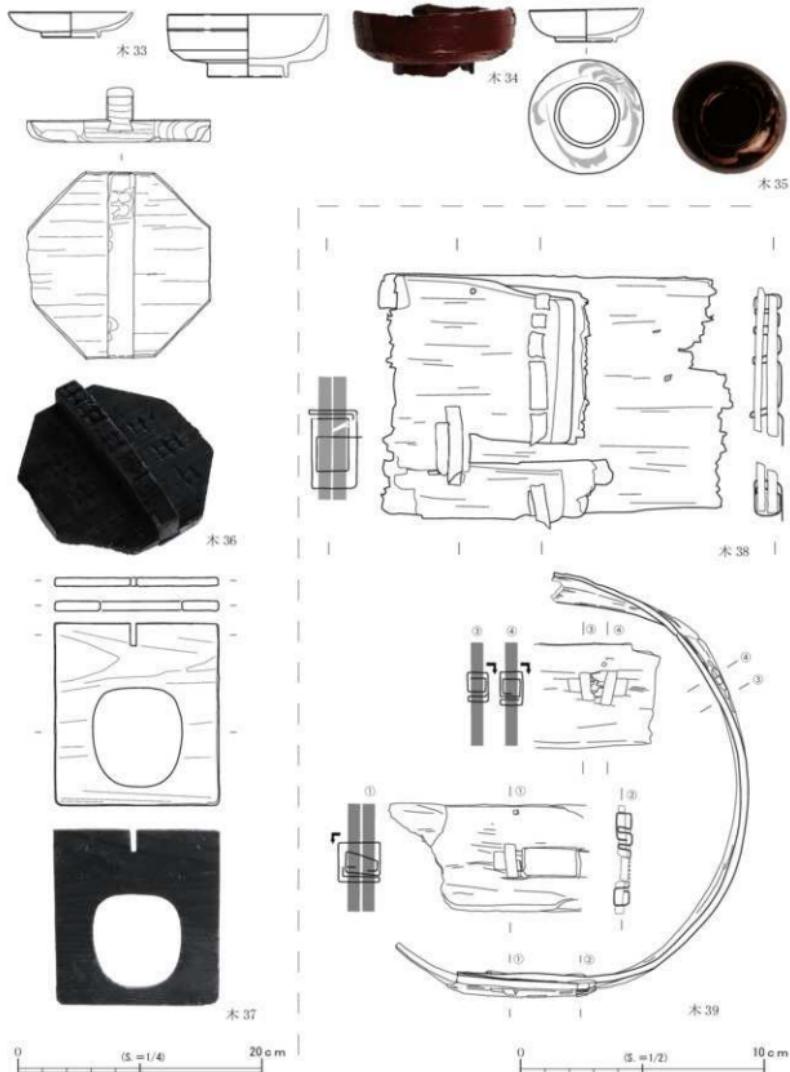
木33～木39（第53図）、木40～木43（第54図）はSX4037から出土した。木33は椀蓋である。内面に赤漆、外面に黒漆を塗る。木34は体部の腰が張る壺榠である。内外面に赤漆を塗る。木35は椀蓋である。内面に赤漆、外面に黒漆を塗り、外面に黄土色の草木模様を描く。木36は容器の蓋で八角形状に成形する。表面に焼印のような直線的な模様あり。直線的な板状の把手摘みに柄、本体に柄穴を成形し組合せている。木37は膳脚部の足打である。板材に梢円を削抜き、一側面中央部に1.9cm×0.5cmの切り込みをいれる。もう一対を平行に並べ足打とする。木38・木39は曲物である。木38は側板の重なりを樹皮の紐2箇所で綴じる。木39は側板を樹皮の紐で綴じる。縦1.1cm、幅2.2cmの方形孔を穿つ。

木40～木43（第54図）木40は敷居を切断したものである。表面に1.0cmの間隔を空けて幅2.1cmの溝が2条延びる。木41から木43は下駄である。木41は丸型連歯下駄である。木42は鼻緒を含めた厚み4.9cm、台の厚み1.3cmを測る。角型例り下駄である。鼻緒は前壺裏で棒に、横緒裏で結び固定する。木43は台の厚み1.5cmを測る角型連歯下駄である。前歯一部欠損する。

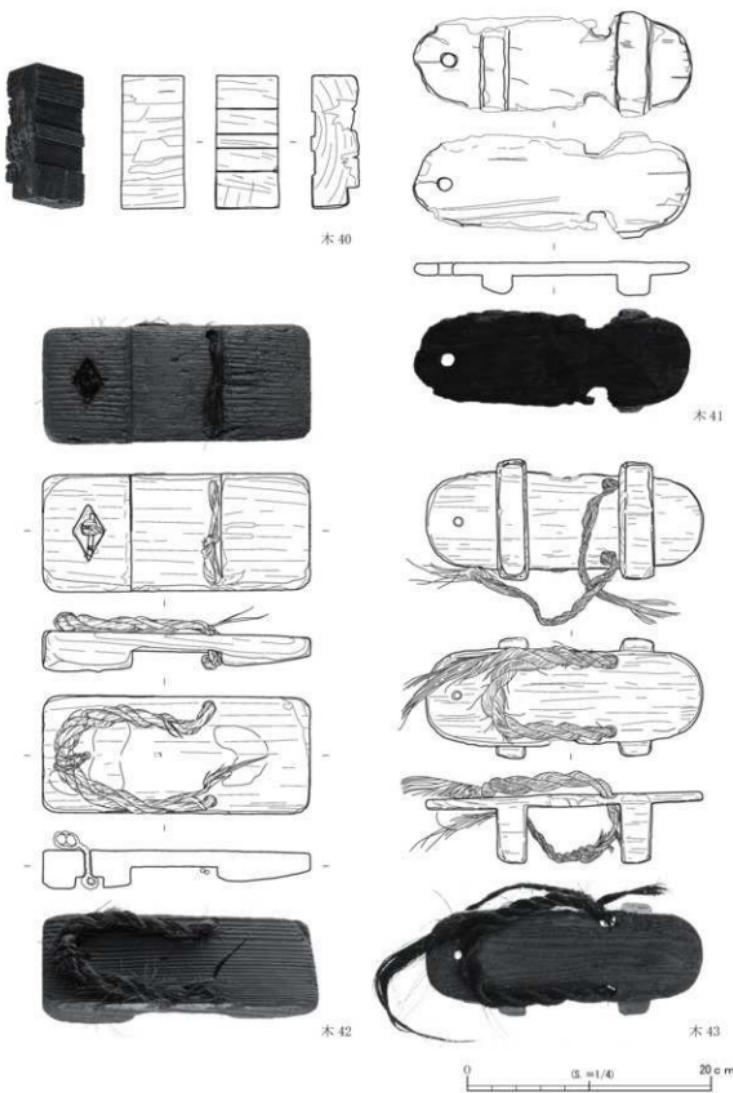
木44～木47（第55図）木44と木45はSX4038から出土した。木44は角型連歯下駄である。特に後歯左側は著しく摩耗する。下駄幅狭い。木45は角型連歯下駄である。後歯は著しく摩耗する。下駄幅狭い。木46と木47は第4遺物包含層から出土した。木46は簪である。竹製の板材を二股にして先端を尖らせる。木47は蓋である。大きさ直径1.2cmの貫通孔を端に穿つ。



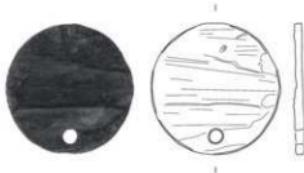
B区 第4遺構面調査状況（北東から望む）



第53図 SX4037出土木製品1



第54図 SX4037 出土木製品 1



第4遺物包含層  
SX4038



0 1/4 20 cm

第55図 SX4038・第4遺物包含層出土木製品

## (2) 第3遺構面

### ① AB区溝 (SD)

#### SD3002 (第56図)

SD3002は、SD3003、SK3015に先行して形成されている。その規模は東西方向検出長1.76m、幅0.5m、深さ0.27mを測る。SD3002の東側には大きな擾乱によって損壊を受けており、その長さは判然としない。

#### SD3003 (第56図)

SD3003は、SD3004の東側で連なるように検出した。その規模は、東西方向に約6m、幅0.64m、深さ約0.2mを測る。SD3004、SK3015に先行して形成されている。SD3004で確認した石列は、僅かにSD3003でも出土した。

#### SD3004 (第56図)

東西方向に約5.3m、幅約0.26m、深さ0.1mを測る。溝は不整形であるが長く延びている。遺物106は擂鉢の口縁部分が出土した。口縁部が直立しており、18世紀中頃の堺産である。

遺構の内並びに遺構上面で東西方向に検出長8mの石列を確認した。石列は溝の西側まで延びていた。石列の石は最大約0.4mの長さを測り、南側で石を揃えるような面を持っている。

#### SD3005 (第57図)

SD3005は、SD3002・SD3003・SD3004の北側に並行して延び、その規模は長さ8.9m、最大幅約1m、深さ0.12mを測る。遺構の内から多くの石を検出した。石は最大約0.4mの長さを測り、石列となっている。石列は溝の南辺掘形に沿って出土しており、南側に面を揃えた状態となっている。SD3005はSD3002・SD3003・SD3004と並行に延びることや同じく石列を伴うことなどから、南側を区画する機能を有するものと考えられる。出土した遺物をみると、107は灯火具の受付皿である。黄灰色の釉を施した京・信楽系である。受付の切り欠きが「く」の字状に施されている。108は肥前系の染付碗である。19世紀前半ころである。109は青磁の香炉の口縁部である。口縁外面に円状の突起を貼り付けている。

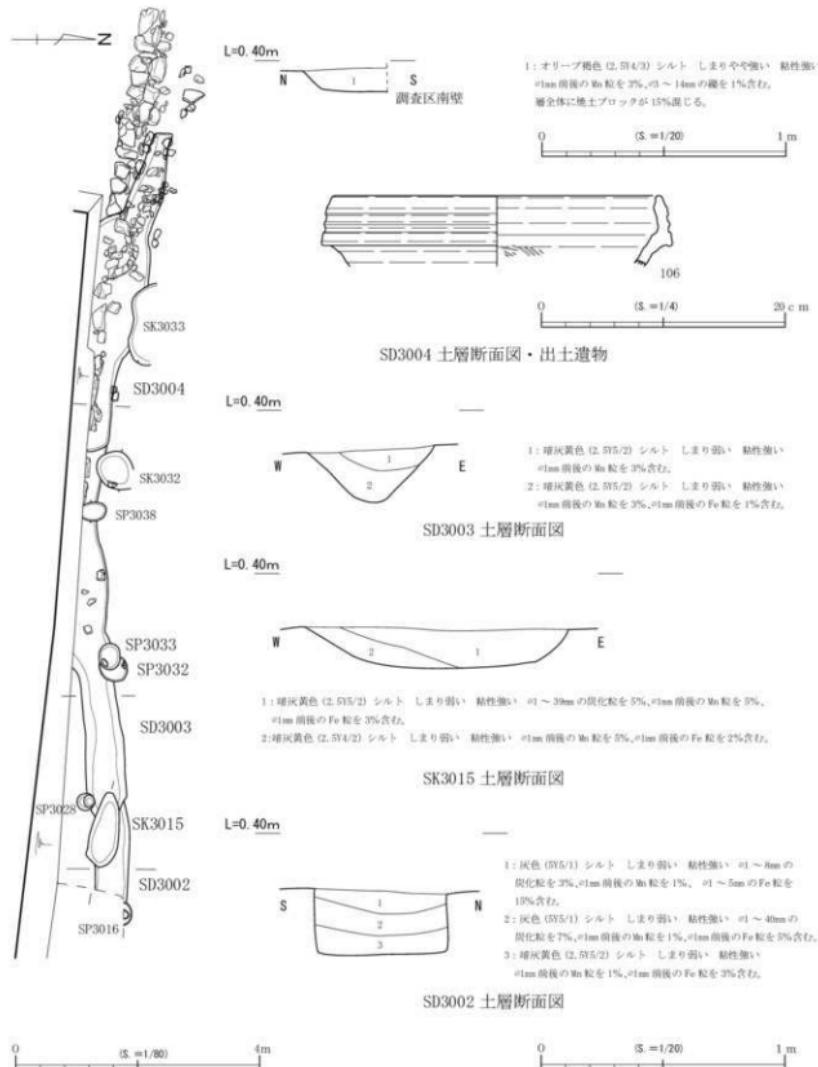
#### SD3006 (第58図)

SD3006は検出長8m、最大幅0.7m、深さ0.38mを測る。溝は南北方向に延びており、その南端部は、南東に向きを変え、調査区外へ延びている。110は青磁の鉢の破片である。

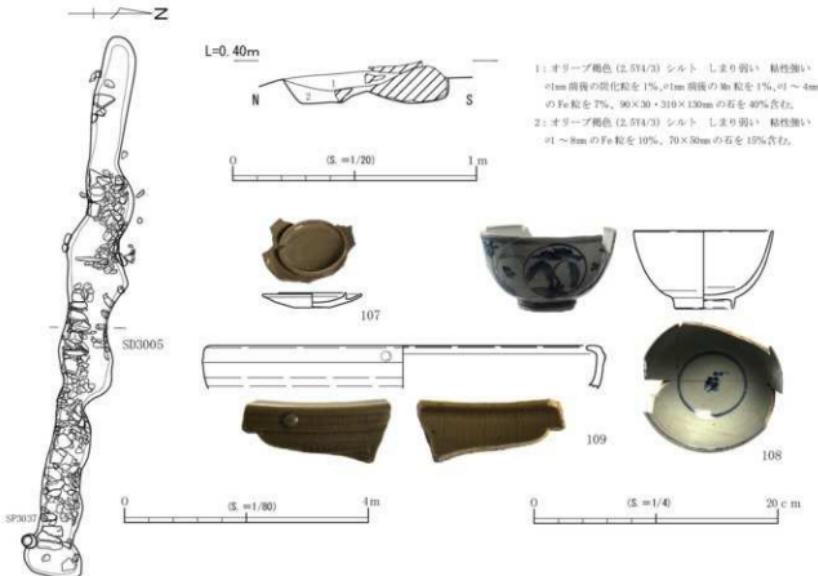
#### SD3008 (第59図)

SD3008は東西方向に延び、その規模は長さ5.6m、幅0.84m、深さ0.26mを測る。SP3044より先行して形成している。111は肥前唐津産の陶器皿である。内面に鉄絵を施した絵唐津である。

17世紀前半頃の時期に製作された。SD3008は第3遺構面の他の遺構と比べて古い年代となる。



第 56 図 SD3002・SD3003・SD3004・SK3015 遺構図・出土遺物



第57図 SD3005 遺構図・出土遺物

#### SD3010（第58図）

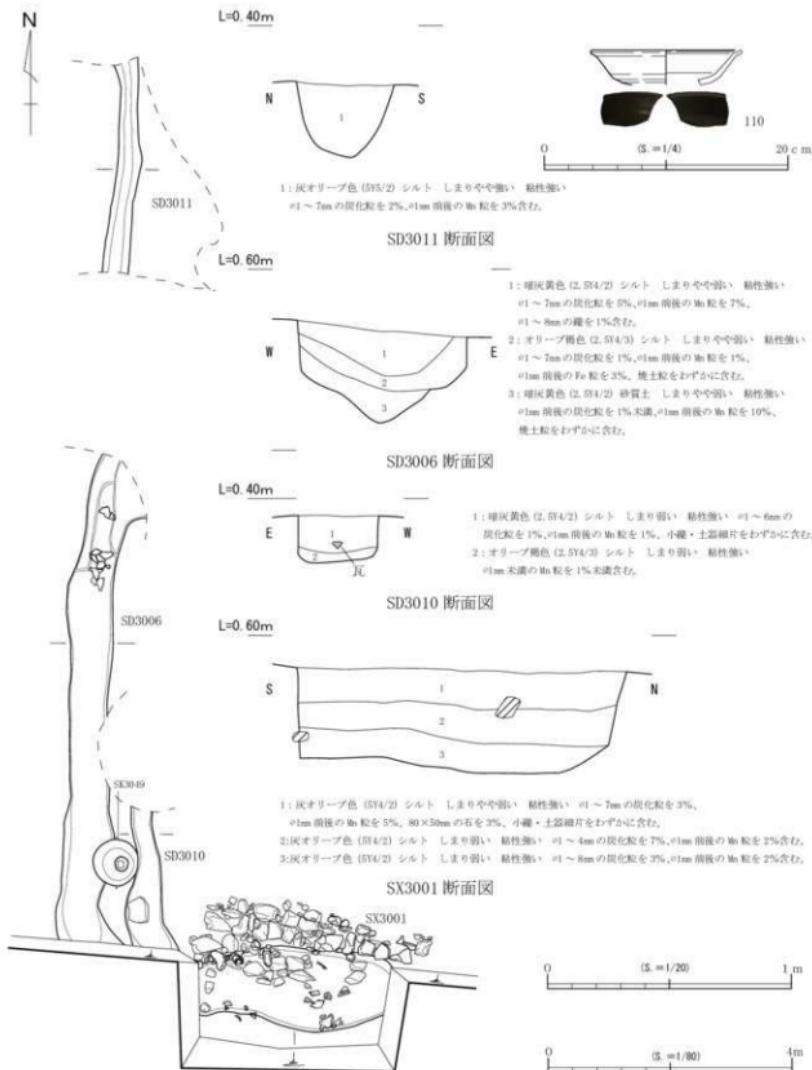
南北方向の溝である。検出長2.24m、最大幅0.6m、深さ0.18mを測る。SD3006と並行するように南北方向に延び、南端部で南東に向きを変えて、調査区外へ延びている。

#### SD3011（第58図）

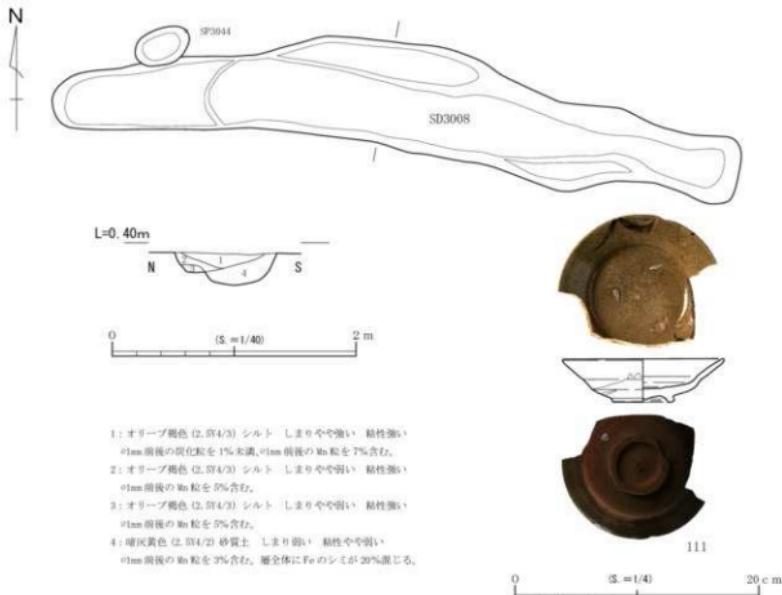
SD3006の北側で、南北方向に延びている。検出長3.6m、幅0.4m、深さ1.2mを測る。SD3006とSD3011の間には長さ3mの攪乱によって途切れているが、本来は同じ溝であると考えられる。

#### SD3012（第60・61図）

東西方向に直線的に延びる溝である。南北方向の溝（SD3014・SD3016・SX3027）が後に形成することで、途切れた状態で検出した。一連の溝であるので、その規模は検出長16.7m、最大幅1.76m、最深0.8mを測る。溝の深さは、東から西に向かうにしたがって、浅くなっている。本来の溝の西端位置は、SX3027と重なる部分とみる。その規模と直線的な平面形状から敷地内を南北に区画する主要な溝と考えられる。



第58図 SD3006・SD3010・SD3011・SX3001遺構図・出土遺物



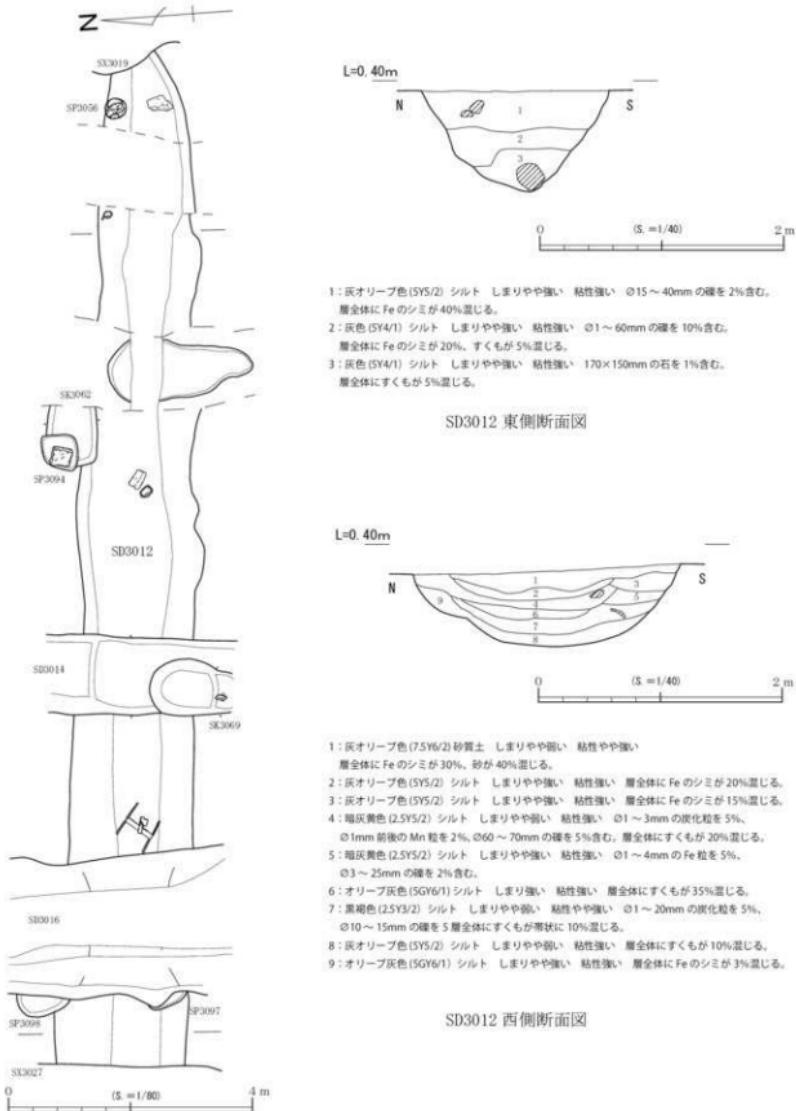
第59図 SD3008 遺構図・出土遺物

112～115・117・118・121・122・124～126は土師器の皿である。112～114の底部は回転ナデ調整である。115・118の底部には回転糸切り痕、117・121・122・124・125の底部は静止糸切り痕である。121・122・124～126は口縁部内外面や内面底部に煤が付着する。灯明皿として使用されている。

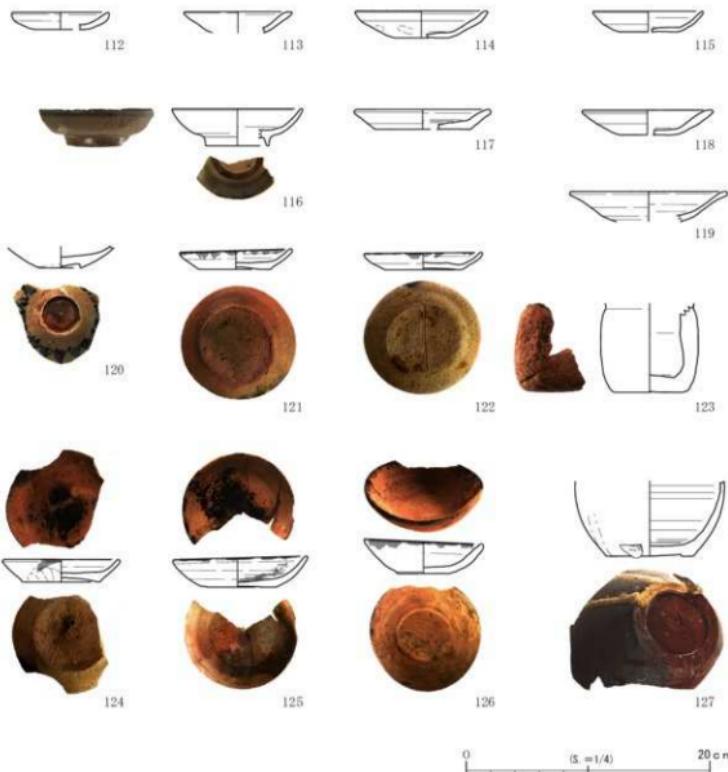
116は陶器皿である。口縁部外面に一条の圓線を引き、内面見込みに蛇目釉剥ぎを施す。123は焼塩壺である。内面に布目痕跡なく、また底部に粘土を充填するため板づくり成形である。127は陶器甕である。底部外面に「小」と銘を刻む。120は肥前磁器の皿である。内面見込みに菊文を描く。17世紀後半頃の年代である。

#### SD3016（第62・63図）

調査区を東西に区切るような直線的な溝である。長さは約31m、最大幅2.35m、深さ0.84mを測る。溝は調査区からさらに北へ延びている。溝の南半は、東にある池状遺構であるSX3009と接している。接する部分にはSD3016・SX3009内に長さ約7m、最大幅1.8mの堤防状の高まりが南北に延びており、この高まりがSD3016とSX3009を緩やかに区画するものと考えられる。またこの堤防状の高まりの



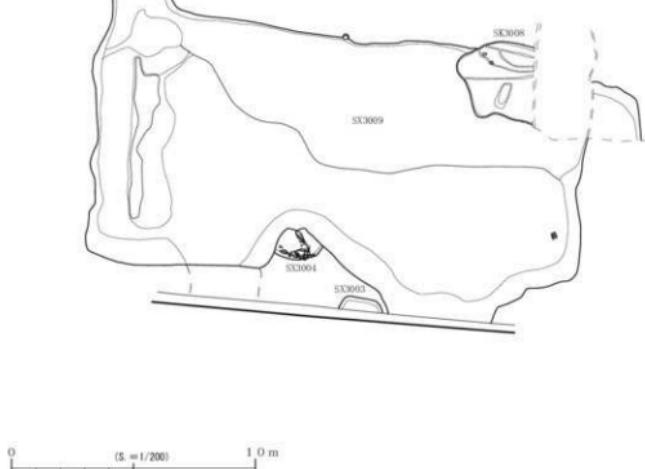
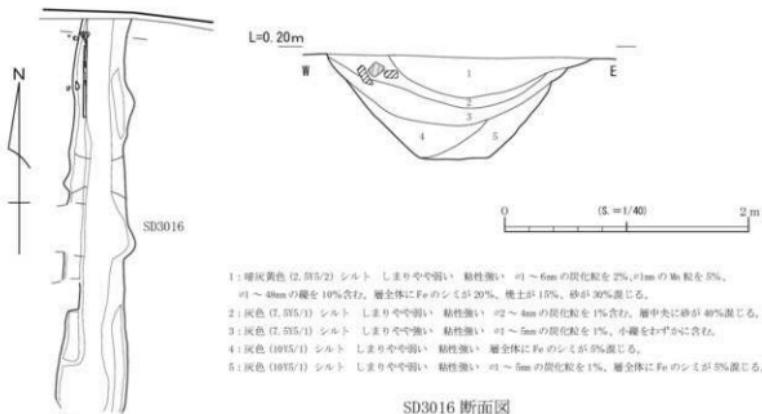
第 60 図 SD3012 遺構図



第 61 図 SD3012 出土遺物

南北両端部は SD3016・SX3009 の掘形に接することなく途切れている。つまり SD3016 と SX3009 はこの部分で繋がっていることになる。SD3016 の堆積土の下層は、強い粘性のシルト層を形成しており、かつてこの溝には水が堆積していたことが窺われる。

128 は土師器の皿である。底部外面には成形時の板目痕跡がある。口縁部内外面に煤が付着する、灯明皿である。129 は肥前唐津の陶器碗である。大きく破損しているが、外面にわずかに鉄絵による草木が認められる。130 は肥前唐津の陶器碗である。外面に鉄絵による草木がわずかに認められる。131 は磁器の盤である。釉薬を施し、貫入がある。胎土・焼成が優れており精緻に成形されている。17 世紀前半頃の年代である。



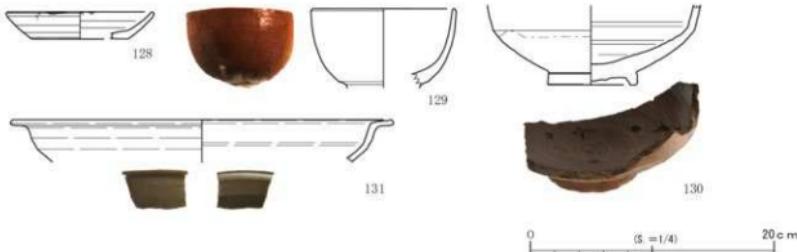
第 62 図 SD3016 遺構図

## ② AB 区井戸 (SE)

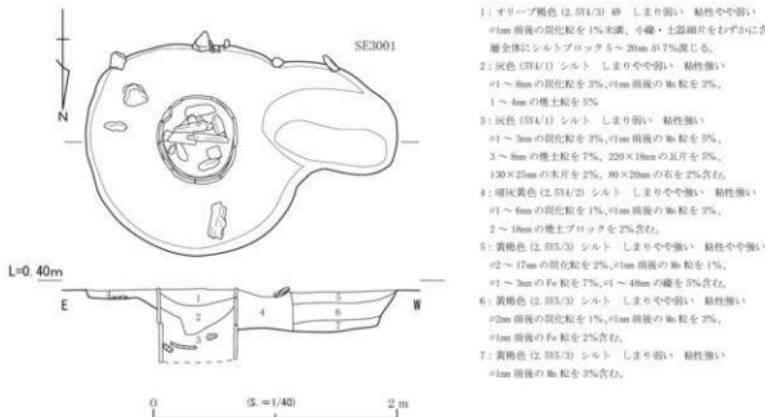
SE3001 (第 64・65 図)

井戸跡である。発掘調査時の検出面が第3遺構面であったが、第2遺構面の年代（19世紀）に形成されたと窺われる。井戸枠は直径約 0.6m の円形状であり、井戸枠に平瓦が使用されていた。平瓦 9 枚を縦に並べ巡らし、その反りを利用して枠を形成していた。井戸枠の平瓦は縦に 2 段まで確認することができたが、それ以上については不明である。

131 は在地の阿波大谷焼の徳利である。鉄軸が掛けられた体部外面にはヘラ描きで「森」「鳩雨」、縦に並べた二つの三角形の頂点が向かい合うような形状、「福」と 4 箇所に刻まれている。132 は瀬戸美



第 63 図 SD3016 出土遺物



第 64 図 SE3001 遺構図

濃産の陶器水瓶である。外面には流水文がヘラ彫りされ、灰釉に緑釉をかけて描かれている。133は肥前産の染付磁器の仮飯器である。蛇ノ目凹型高台で唐草文が描かれている。134は肥前産の磁器碗である。135は井戸枠内から出土した。土師質の焜炉である。平面六角形に復元でき、脚部の三足は円形状である。

19世紀前半頃の年代である。

### ③ AB 区土坑（SK）

#### SK3001（第 66 図）

SK3001 は平面隅丸長方形状である。南北長軸 1.44m、東西短軸検出長 1.04m、深さ 0.22m を測る。136 は瀬戸美濃系の皿である。黄瀬戸の系統であるが、成形が丁寧で焼成が良好である。近世の作成であろう。内面見込みに菊花文を印刻する。

#### SK3008（第 67 図）

SX3009 の後に形成された土坑である。遺構中央部は第 2 遺構面の溝によって失われてゐるが、東西の土坑は一連のものである。検出長 7.76m、幅 3.12m、深さ 0.32m を測る。

137 は肥前産陶器皿である。波佐見焼か、内面に二本線の文を描き、見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施されている。138 は肥前系の陶器碗である。外面に草花文を描く。139 は肥前系の陶器碗である。140 は肥前唐津の鉢である。外面に円形状の突起を貼り付ける。口縁部内面に波線を描く。17世紀前半～中頃の年代である。

#### SK3026（第 68 図）

平面円形状直径約 1.32m、深さ 0.44m を測る。141 は焜炉に使用される目皿である。底部被熱により胎土が硬化変色している。

#### SK3029（第 69 図）

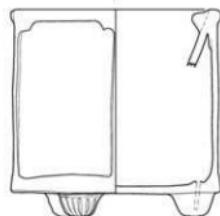
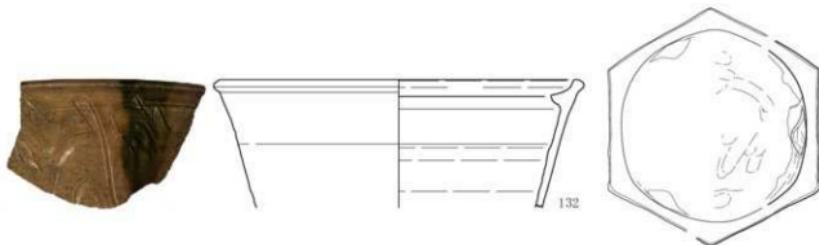
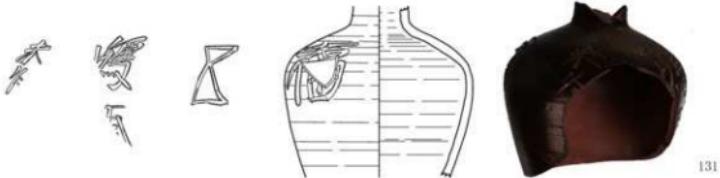
SK3029 は、検出長 0.8m、幅 0.6m、深さ 0.3m を測る。SP3025 に先行して形成されている。142 は焼塩壺である。内面中位を押圧接合するため断面の厚みが不揃いとなっている。輪積み成形である。口縁部外側が反っており 17 世紀の年代である。

#### SK3034（第 70 図）

0.7m × 0.6m の平面楕円形の土坑である。深さ 0.3m を測り、SP3041 が後に形成され重なっている。143 は瀬戸美濃系の陶器天目茶碗である。17 世紀の年代である。

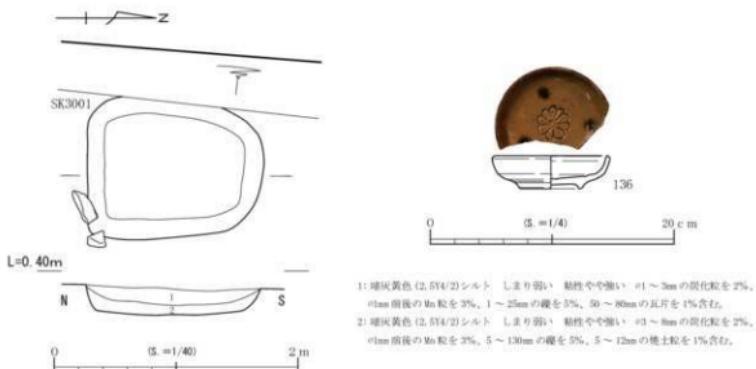
#### SK3053（第 71 図）

発掘調査時に第 3 遺構面で検出したが、第 2 遺構面の年代（19 世紀）に形成されたことが窺われる。遺構の規模は 1.52m × 1.6m の不正形な円形状である。遺構中ほどから井戸枠を検出した井戸跡である。井戸枠は桶を利用している。直径 0.56m を測った。144 は京信楽系の陶器碗である。



0 (S = 1/4) 20 cm

第65図 SE3001出土遺物



第 66 図 SK3001 遺構図・出土遺物

#### SK3068 (第 72 図)

検出長 0.88m、検出幅 0.4m、深さ 0.22m を測る。SX3018 が後に形成されていて、SK3068 の南側は失われている。また東側は第 2 遺構面遺構の SD2004 によって失われていた。145 は瀬戸美濃系の端反碗である。外面鉄釉、内面を染付である。19世紀の年代であるが、切り合う遺構との前後関係に齟齬をきたす。145 は、SD2004 からの流れ込みの可能性が考えられる。

#### SK3069 (第 73 図)

平面楕円形状の土坑である。その規模は検出長 1.4m、最大幅 0.92m、深さ 0.2m を測る。土坑の南端は擾乱によって失われていた。146 は土師器皿の破片である。口縁部に煤が付着している灯明皿である。

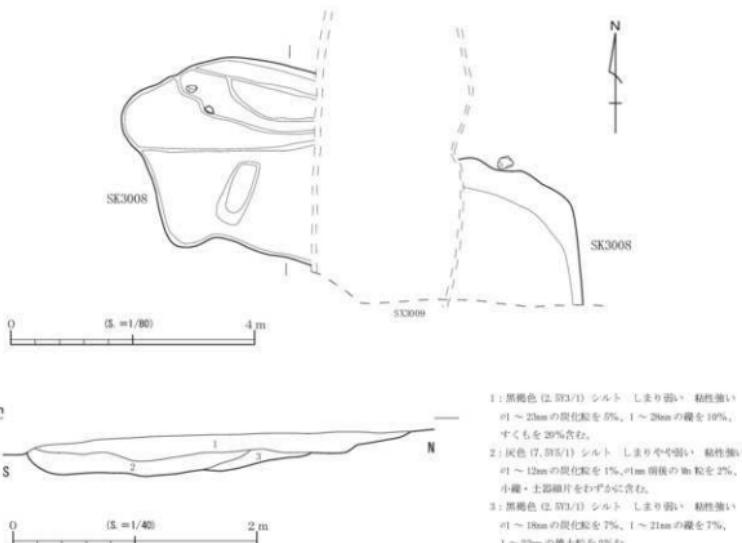
#### ④ AB 区柱穴 (SP)

##### SP3004 (第 74 図)

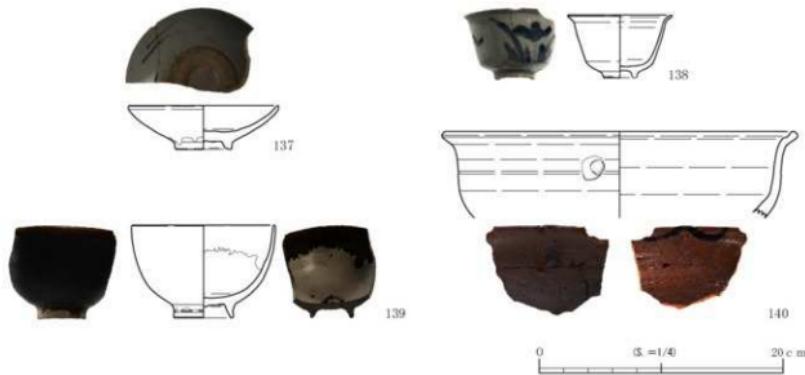
柱穴規模は直径 0.26m、深さ 0.22m を測る。147 は備前系の陶器すり鉢の口縁部片である。内面残存部にわずかにすり目が認められる。

##### SP3009 (第 75 図)

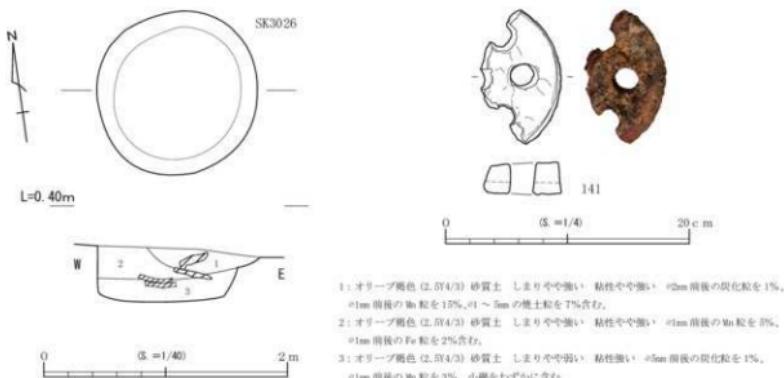
規模 0.5m × 0.34m、深さ 0.24m を測る平面楕円形状の柱穴跡である。また柱穴跡の中央部分には 0.24m × 0.18m を測る平面楕円形状の柱痕跡を確認した。148 は肥前産の磁器染付、筒形碗である。18世紀中頃から後半の年代である。



SK3008 遺構図



第 67 図 SK3008 遺構図・出土遺物



第 68 図 SK3026 遺構図・出土遺物



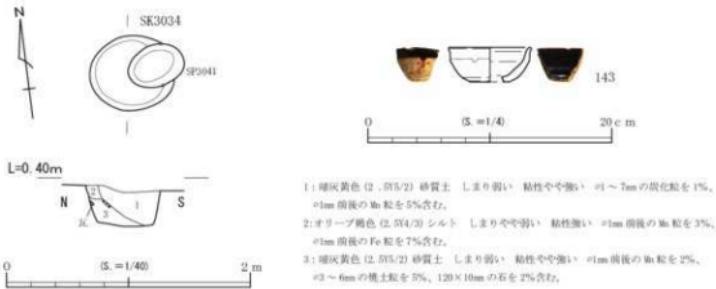
第 69 図 SK3029 遺構図・出土遺物

### SP3012 (第 76 図)

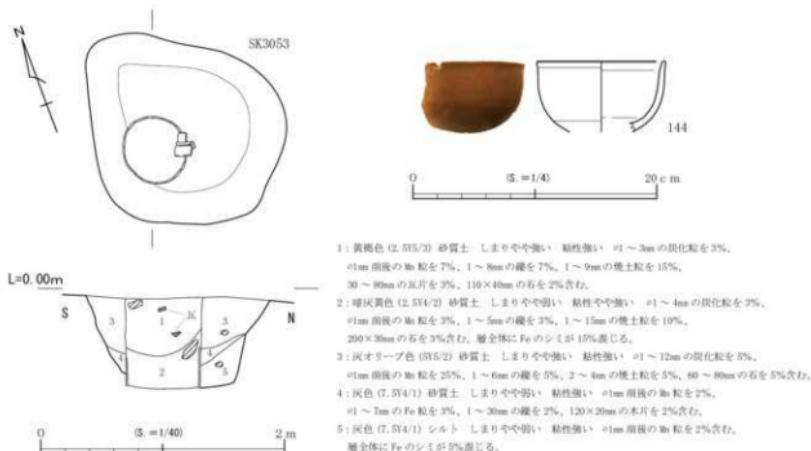
0.28m × 0.36m、深さ 0.16m を測る平面楕円形状の柱穴跡である。また柱穴跡の中央部分には楕円形状の柱痕跡を確認し、そこから石塊が出土した。149 は軟質瓦質火鉢である。

### SP3022 (第 77 図)

0.52m × 0.44m、深さ 0.2m を測る平面不正円形状の柱穴跡である。また柱穴跡の中央部には円形の柱痕跡を確認した。断面観察の結果、柱痕跡の層は斜めに傾いていた。150 は土師器皿である。



第70図 SK3034 遺構図・出土遺物



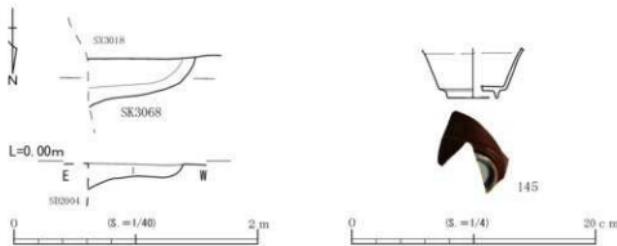
第71図 SK3053 遺構図・出土遺物

### SP3027 (第78図)

規模 0.64m × 0.54m、深さ 0.38m を測る平面楕円形状の柱穴跡である。また柱穴跡には直径約 .38m の柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘形と比べ下端の幅がとても小さいことから、柱抜き取り時に上端が広がったためと想定する。151は陶器皿の口縁部片である。152は大形の土師器皿である。

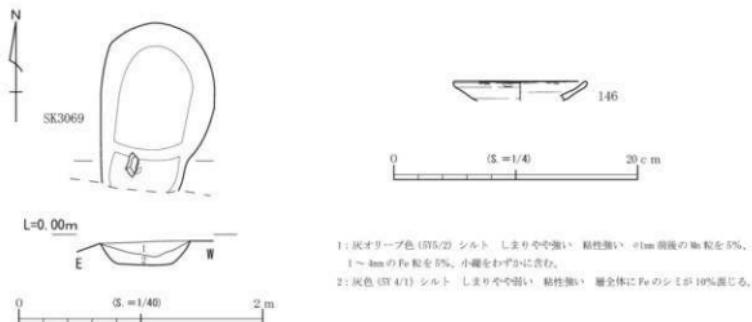
### SP3043 (第79図)

規模 0.3m × 0.32m、深さ 0.42m を測る円形状の柱穴跡である。また柱穴跡の中央部には直径 0.14m を測る円形状の柱痕跡を確認した。柱痕跡の層位は、柱穴の底面にまで至ることが多いが、この柱穴跡では柱痕跡は 3 層の上面までの深さであった。153は土師器皿である。



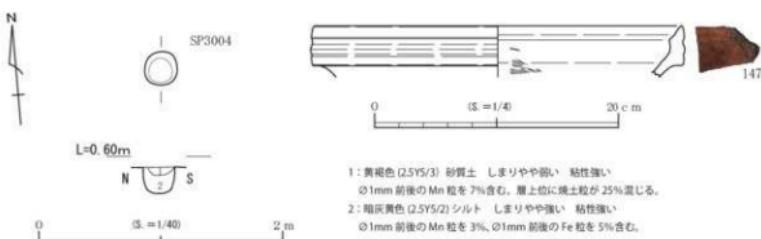
1: 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト しまりやや強い 粘性強い  
Ø1mm 前後の Mn 粒を 3%, 1~5mm の Fe 粒を 20% 含む。

第 72 図 SK3068 遺構図・出土遺物



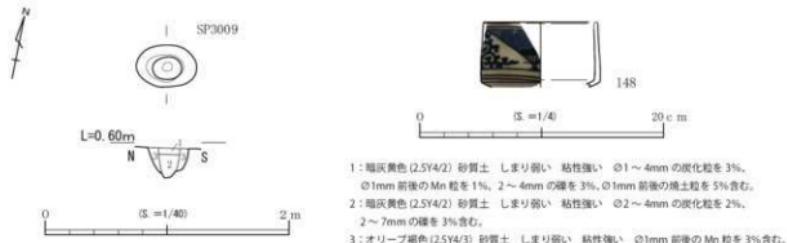
1: 灰オーブ色 (3Y5/2) シルト しまりやや強い 粘性強い Ø1mm 前後の Mn 粒を 5%,  
1~4mm の Fe 粒を 5%, 小纖維をわずかに含む。  
2: 灰色 (3Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 縦全体に Fe のシミが 10% 強じる。

第 73 図 SK3069 遺構図・出土遺物

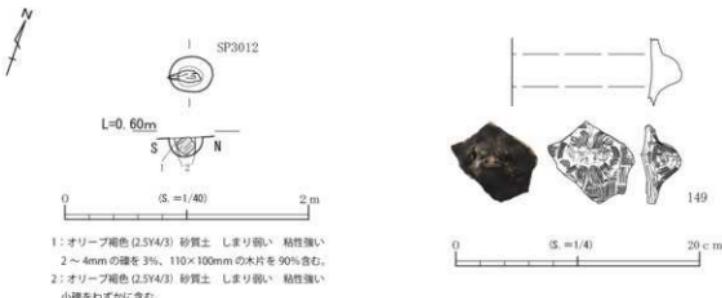


1: 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 しまりやや弱い 粘性強い  
Ø1mm 前後の Mn 粒を 7% 含む。層上位に飛土粒が 25% 混じる。  
2: 暗灰褐色 (2.5Y5/2) シルト しまりやや強い 粘性強い  
Ø1mm 前後の Mn 粒を 3%, Ø1mm 前後の Fe 粒を 5% 含む。

第 74 図 SP3004 遺構図・出土遺物



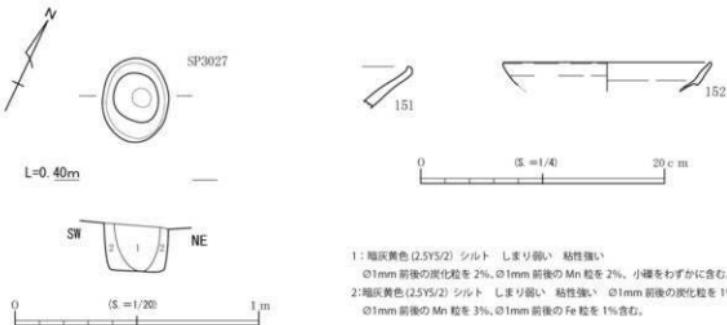
第 75 図 SP3009 遺構図・出土遺物



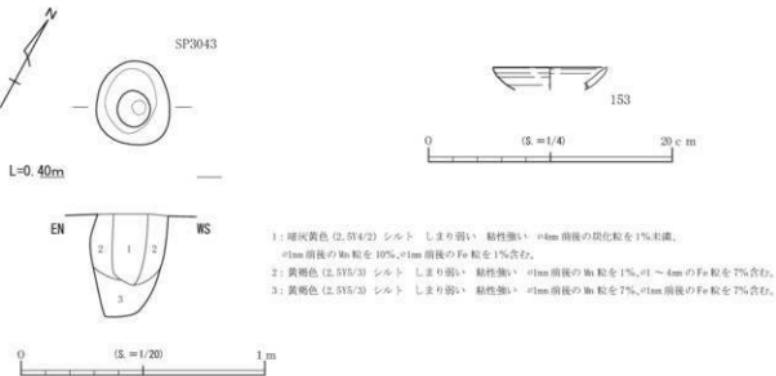
第 76 図 SP3012 遺構図・出土遺物



第 77 図 SP3022 遺構図・出土遺物



第 78 図 SP3027 遺構図・出土遺物



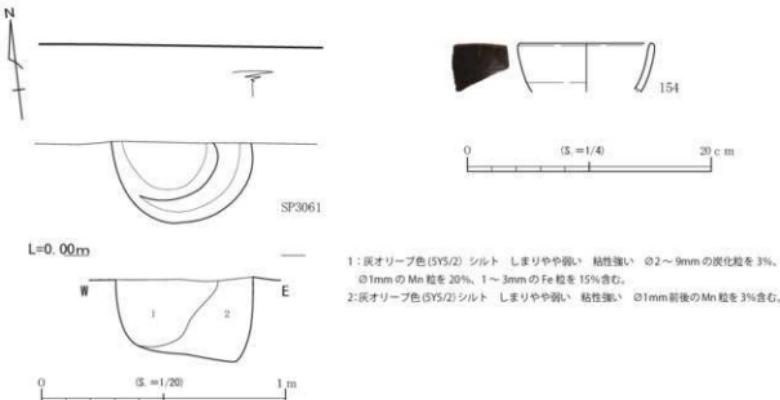
第 79 図 SP3043 遺構図・出土遺物

### SP3061 (第 80 図)

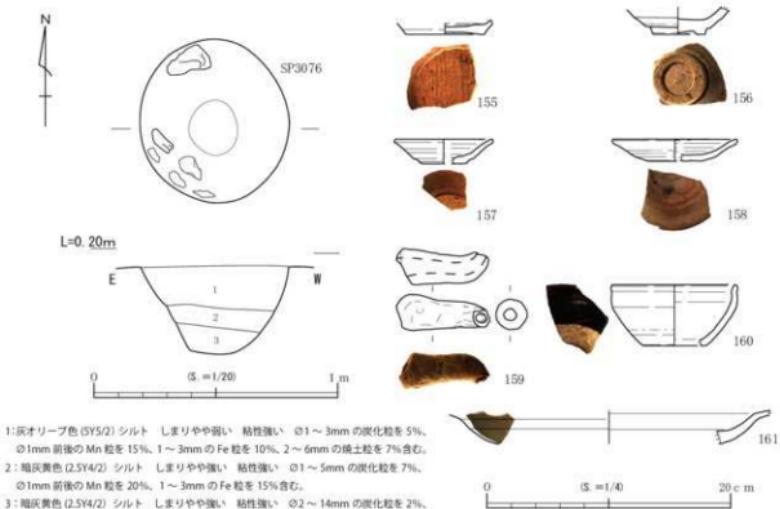
遺構北半は調査区外となっているが、復元直径 0.58m、深さ 0.34m を測る円形状の柱穴跡である。また柱痕跡は平面復元直径 0.42m と大きく、抜き取りなどにより上端が広がったためと想定する。154 は瀬戸美濃系の陶器天目茶碗の口縁部片である。

### SP3076 (第 81 図)

規模 0.6m × 0.67m、深さ 0.36m を測る平面円形状の柱穴跡である。柱穴跡としたが、柱痕跡は認められなく、土坑である。160 は瀬戸美濃産の陶器天目茶碗である。高台部は欠損し、口縁部・体部片である。155 は土器盤である。底部のみ残存しており、外面底部の静止系切り痕跡が認められる。



第 80 図 SP3061 遺構図・出土遺物



第 81 図 SP3076 遺構図・出土遺物

156 は瀬戸美濃系の陶器碗の高台部片である。157 は土師器皿である。底部外面は回転糸切り痕跡が残る。158 は土師皿である。外面の回転ナデは顕著に段差となっている。内面に焦げ目が付着する、灯明皿として使用している。159 は土師質の把手部分である。中空になっており、一端は斜めに折れ曲がる。161 は陶器皿の大形品である。

#### ⑤ AB 区性格不明土坑 (SX)

##### SX3001 (第 5882 図)

調査区南端中央部の拡張区部で東西方向に延びた楕円状を呈する。その規模は、検出長約 3m、幅 1.36m、深さ 1.68m を測る。遺構東西両端は調査区外となっているため、遺構の規模について不明な点はあるものの、西側ならびに北西側に直線的に延びる溝跡 (SD3006・SD3010・SD3011) と繋がることか、もしくは一連の機能を有することが考えられることから、東西に直線的に延びる溝跡になることが窺える。

162 は京信楽系の皿である。高台部見込みに「小松吉」と銘を刻む。163 は肥前産の口唇部を水平方向につまみだす溝縁皿である。164 は泥岩製の砥石である。使用のため、四角垂状となる。165 は肥前系の磁器碗である。高台部見込みに「大明年製」の銘あり。166 は京信楽系の甕である、口縁部上面と体部外面にヘラによって草花文を施す。167 は瓦質の火鉢である。偏平な三足が貼りつく、口縁部を欠損しているが器高は低めと思われる。

##### SX3002 (第 83 図)

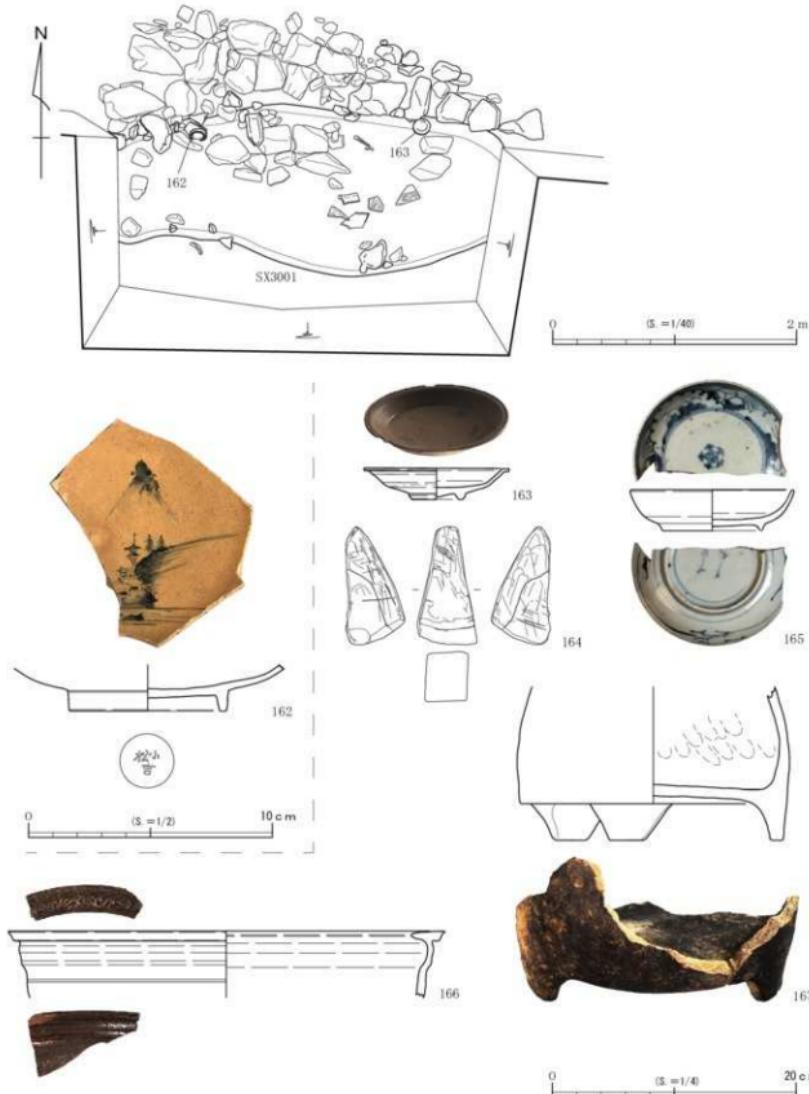
平面不正形状となる長軸 2.04m、短軸 1.64m、深さ 0.28m を測る土坑である。168 は煙管の吸口部片である。その内部に木質の管が残存していることから、羅字と呼ばれる煙管中央部の木質部分に近い箇所である。肩と口付部分の段差の有無は不明である。169 は瀬戸美濃系の磁器皿である。口縁部内面には四方擣文、体部内面には二十闊線、内面見込みには花文を描いている。170 は土製品の置き竈である。体部に直径 2 cm の穿孔を穿つ。

##### SX3005 (第 84 図)

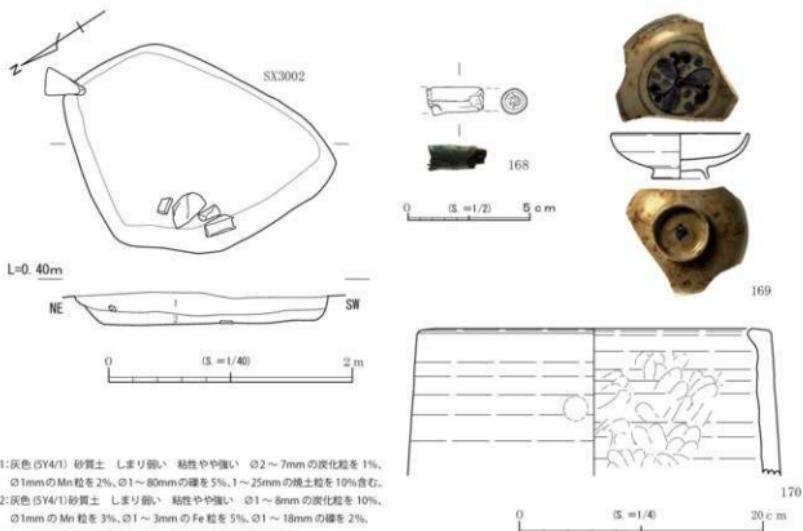
遺構中央が攪乱によって損壊を受けているが、復元すると、1.68m × 2.76m の平面楕円形状に、深さ 0.36m を測る。171 は瀬戸美濃系の陶器植木鉢である。口縁部を水平方向に延びるものは、18世紀中頃から後半の年代である。

##### SX3007 (第 85 図)

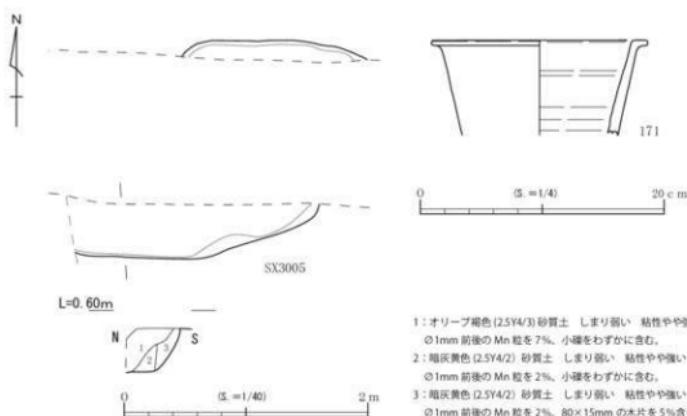
平面不正円形状となる 3.08m × 2.88m、深さ 0.42m を測る土坑である。172 は肥前系の磁器角皿である。173 は肥前系の磁器碗で、体部外面には「壽」の字を縱に延ばし、それを巡らせている。内面見込みにも同じような「壽」の字を一字描く。174 は瀬戸美濃産の陶器水瓶の底部である。18世紀後半ころの年代である。



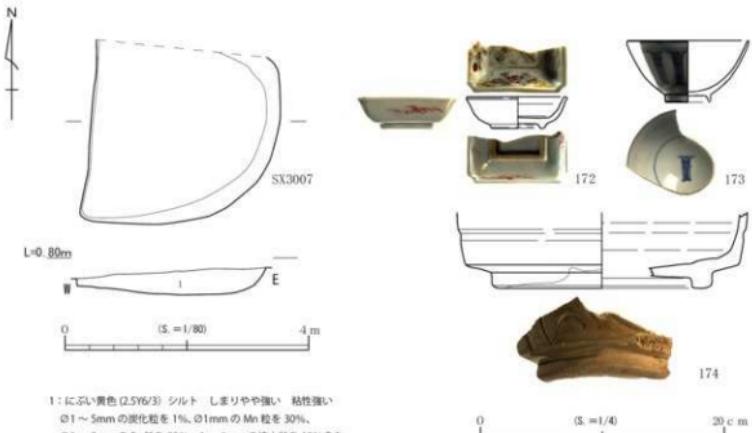
第82図 SX3001 平面図・出土遺物



第83図 SX3002遺構図・出土遺物



第84図 SX3005遺構図・出土遺物



第85図 SX3007 遺構図・出土遺物

### SX3009 (第86・87・88・89・90・91・92図)

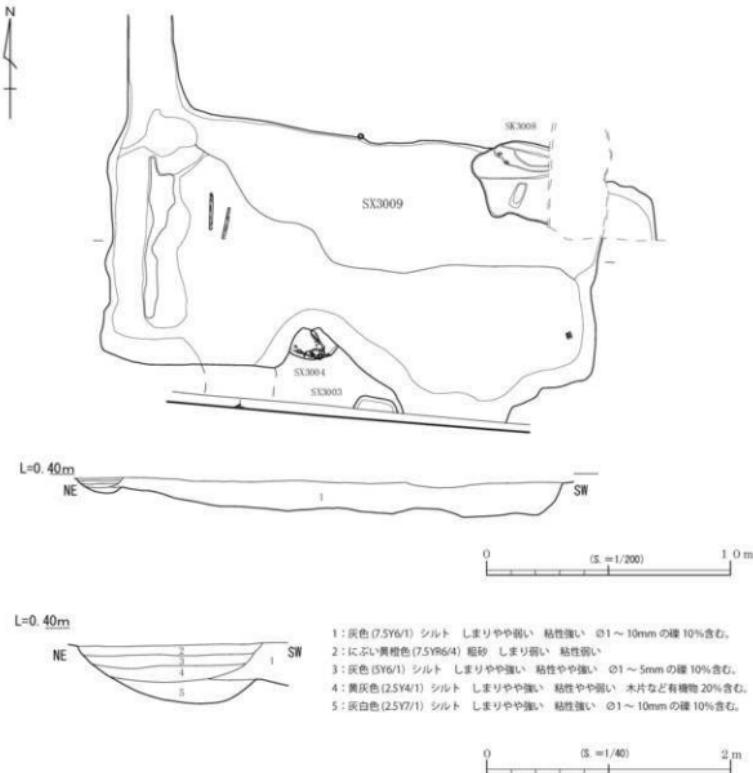
遺構の南端の一部は後世の搅乱により範囲が判然としない部分もあったが、AB調査区の1/5から1/6ほどを占める平面隅丸方形状の大形土坑である。東西長軸18m、南北短軸11m、深さ0.2m~1.3mを測る。南東部は調査区外へ延びている。

SX3009の底面は北から南へ傾斜して深くなっていた。底面が最も深い範囲は遺構の南半分ほどを占めるが、その西側では、さらに北半部の先述した杭柵列(SX4029杭柵列)近くにまで範囲が広がっている状況であった。底面が深い範囲の北端辺には、長さ2m以上の木杭を3本検出した。3本の木杭はそれぞれ南北方向を向いており、それが東西方向に並んでいた。この3本の木杭も杭柵列と同様に柵の機能を有していたと考えられる。その後、土砂に押し出され南へ倒れたものと思われる。

SX3009は当初、方形状の筒と竹からの湧水と、北西側の溝を通ってきた水により、貯水機能を有していたと思われるが、それは第3遺構面の年代(18世紀)になると、これまでSD3016からの土砂流入を防いでいた杭柵列が埋没し、土砂流入が始まる。するとSX3009は北から南へと深くなる顕著な傾斜面ができると思われる。そして土砂がSX3009に堆積し、湧水管である方形状の筒と竹の内部には砂礫が堆積する。その後、貯水機能が果たせなくなると、木製品などを廃棄するようになり、そして最後には土地を整地するために、2層の砂層を、充填したと思われる。

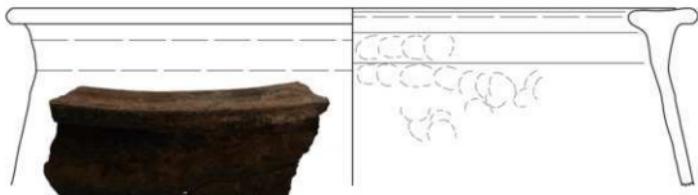
182・183・188・190は肥前唐津の陶器皿である。184・185・186・187・189・192・196・199・202は肥前唐津の陶器溝縁皿である。17世紀前半の年代である。

175は瀬戸美濃系の磁器の神酒徳利である。体部外面に花文を描く。176は肥前産の磁器染付壺である。体部外面に草木を描く。177は肥前産の磁器大皿である。178は肥前産の磁器大皿である。



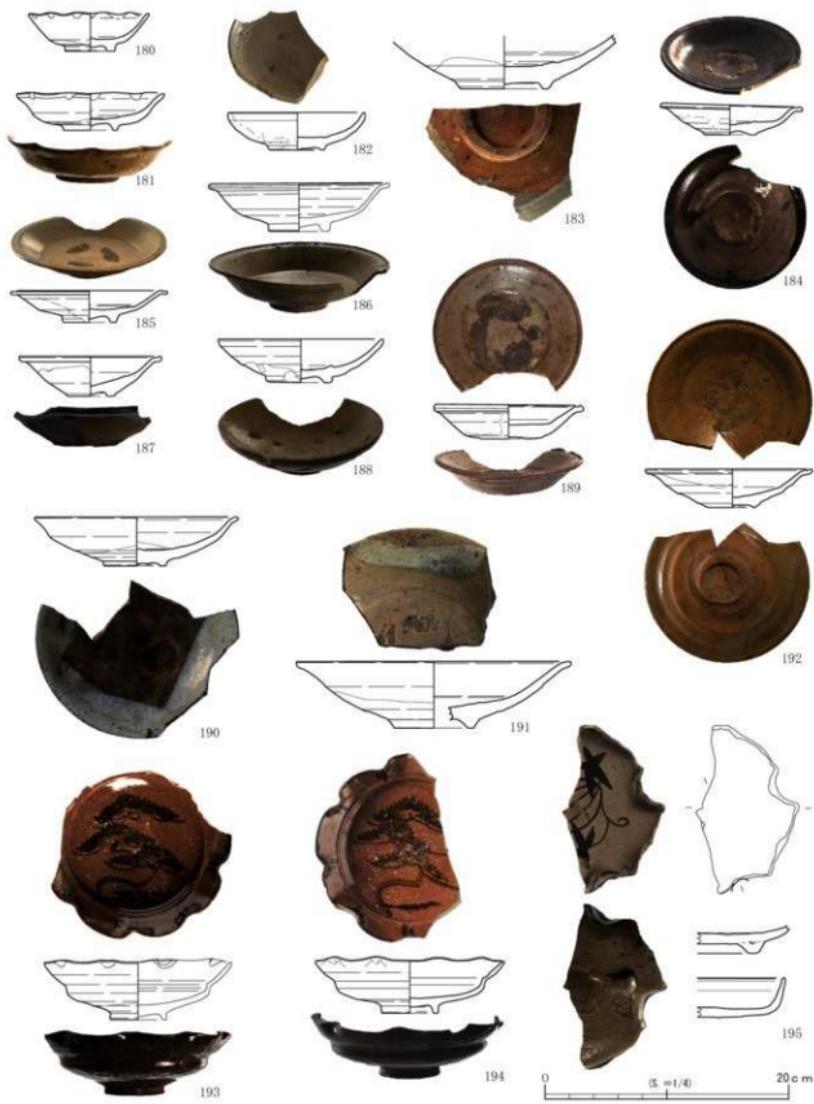
第 86 図 SX3009 構造図

179 は京信楽系の甕である。180・181 は肥前唐津の輪花皿である。191 は肥前絵唐津の陶器皿である。193・194 は肥前絵唐津の輪花皿である。内面見込みに鉄絵で松を描く。16 世紀末の年代である。195 は肥前絵唐津の向付である。底部に半環足を貼り付け、口縁部は輪花とし内面に鉄絵で草木を描く。197 は肥前磁器のぐい呑みの小碗である。17 世紀半ば頃の年代である。198 は肥前磁器の染付碗である。草木と川を描く。200 は肥前産の磁器ぐい呑み、小碗である。201 は肥前磁器の碗である。203・204 は肥前磁器の碗である。205 は肥前磁器染付皿である。17 世紀前半の年代である。206 は肥前系の陶胎染付碗である。陶器碗である。外面に山木を描く。207 は肥前系の磁器碗である。外面に染付「福寿」と描く。208 は肥前磁器の輪花皿である。209 は磁器の盤の口縁部片である。210 は肥前系磁器の碗である。211 は肥前染付磁器皿である。212 は瀬戸美濃産の磁器碗である。外面に青磁釉をかけている。

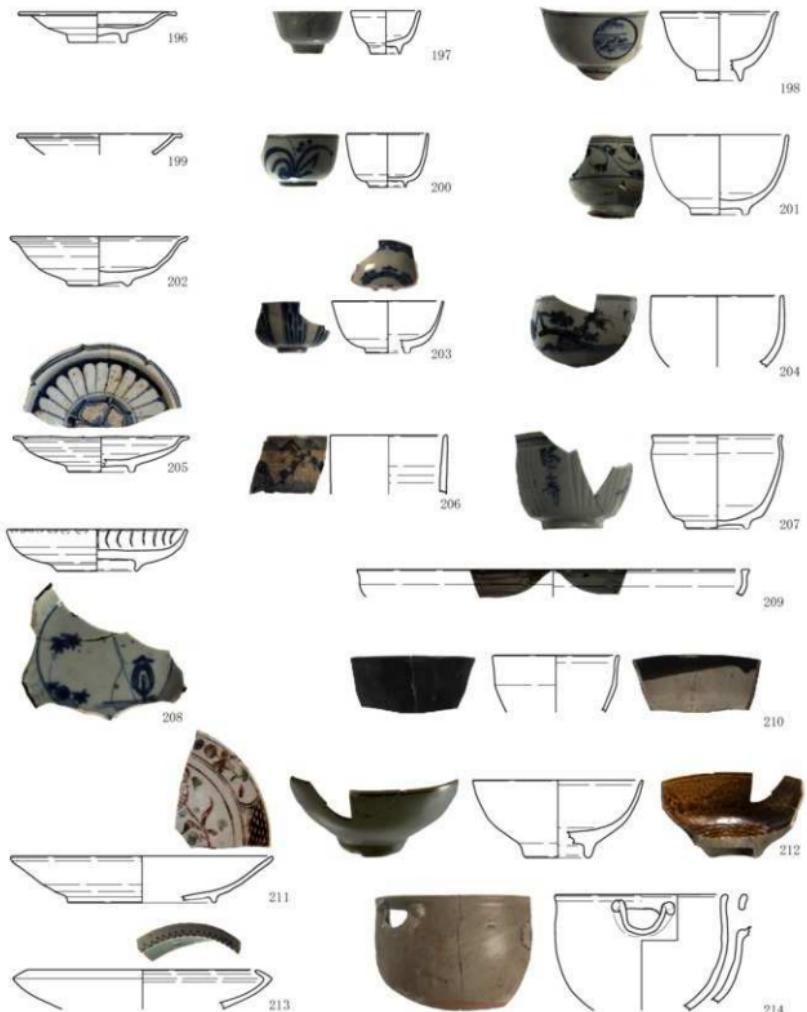


0 (S = 1/2) 10 cm (S = 1/4) 20 cm

第 87 図 SX3009 出土遺物

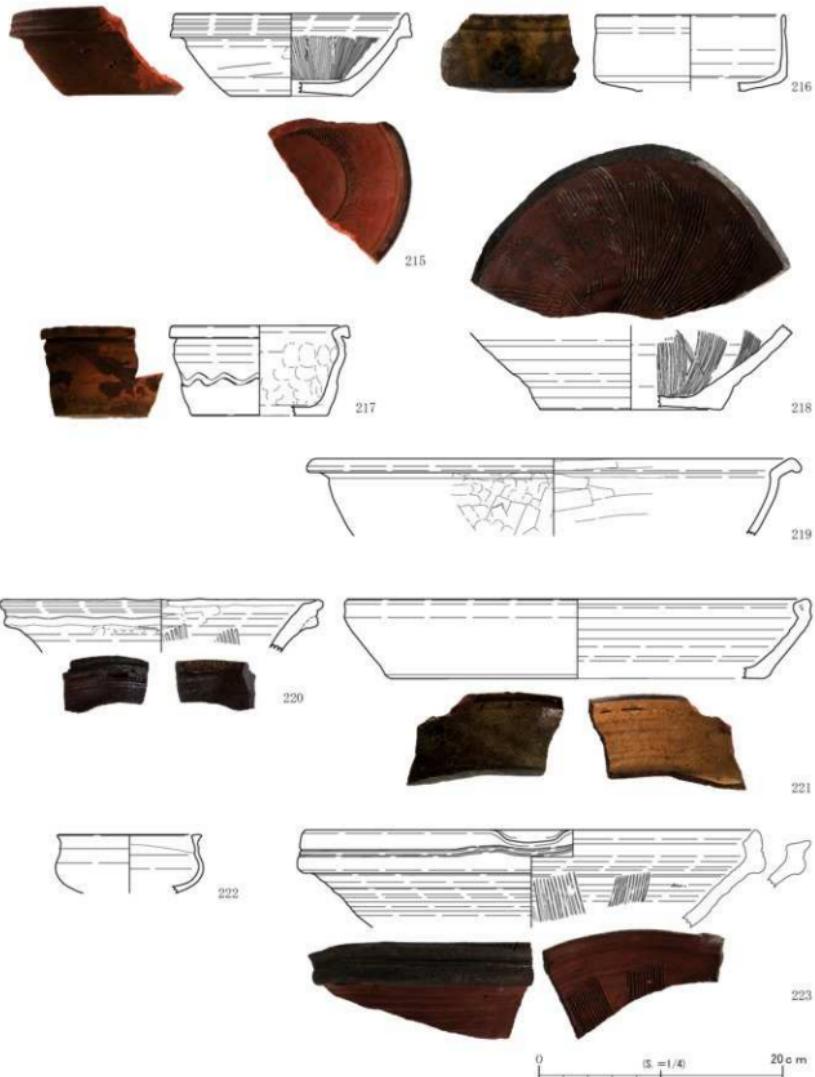


第88図 SX3009出土遺物2

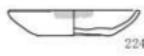


0  $(\times 1/4)$  20 cm

第89図 SX3009出土遺物3



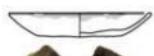
第90図 SX3009出土遺物4



224



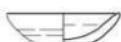
225



226



227



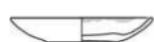
228



229



230



231



232



233



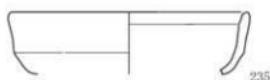
234



236



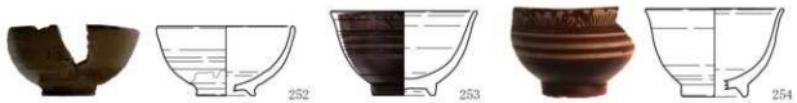
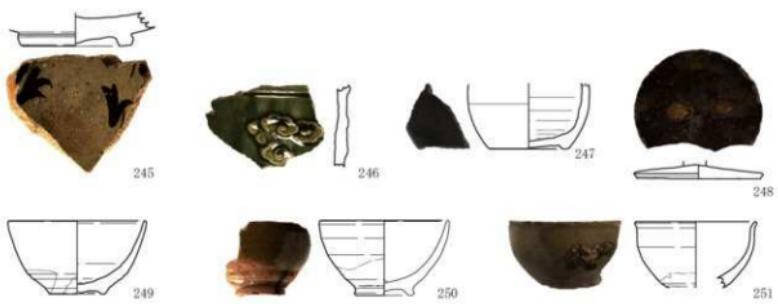
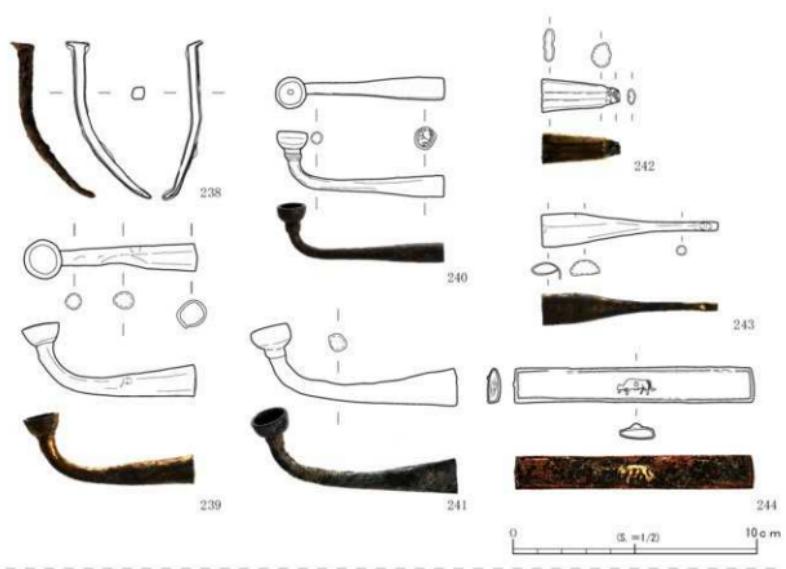
237



238



第91図 SX3009出土遺物5



第92図 SX3009出土遺物6

213は磁器鉢である。口縁部が断面「く」字に鋭く曲がる。口縁部外面に鋸歯文を描く精製品である。214は瀬戸美濃産の陶器片口鉢である。口唇部の一部を切り欠き、注口を取り付けている。板状の菊文飾りを貼り付けている。17世紀末から18世紀前半頃の年代である。216は陶器の鉢である。217は陶器の鉢である。215・218・765・220は陶器擂鉢である。215・218は堺・明石産の擂鉢である。218は内面底部のすり目が放射状に広がることが特徴である。765はすり鉢である。口縁部外面を暗褐色となる備前産か。220は備前系のすり鉢である、7条/2.5cmのすり目が認められた。219は瓦質の鍋である。221は備前産の陶器鉢である。222は京信楽系の碗か。225は肥前唐津陶器の溝縁皿である。224・226・227・228・229・230・231・232・233・234・236は土師器皿である。224・226・229・231・232・234・236は口縁部内外面に焦げ目が付く灯明皿である。235は土師質の炮烙である。237は土師質の焜炉である。内面に焦げ目がつく。245は肥前の絵唐津の皿である。内面に鉄絵で草花を描く。246は瀬戸美濃産の水盤の体部である。深い緑釉が特徴である。247は肥前唐津産の陶胎染付の瓶である。248は陶器壺の蓋である。上面に半環状の把手が貼りついていたと思われる。249は肥前陶器の碗である。250・251・252は陶器碗。253・254は肥前産の陶器の二彩碗である。外面は白化粧土で上面に草花を、下面は刷毛目で条線を描く。17世紀の年代である。238は鉄釘である。打ち付け曲げて固定したのか。239・240・241・242・243は煙管である。煙管は室内に常備される道具から懷中しやすい直線的な形態に変化していく。製作工程上は時代が下るにしたがって単純化する。煙管・雁首火皿窓が穿たれず、脂返しの湾曲は小さくなり、やがて直線的になる。雁首・吸口ともに肩付のものではなくなり、小口から吸口先端の口付まで滑らかに細くなるよう作られるようになる。239は全体に金色をした真鍮製の雁首である。240は鉄製の煙管雁首部分である。火皿下部に補強帯が顕著に設けられている。火皿窓・肩付はない。脂返しの湾曲は小さくはない。241は鉄製雁首である。火皿の補強帯が認められる。242は真鍮製の吸口である。段差の小さい肩付がある。243は金色の真鍮製の吸口である。肩付はなく、口付に歯で噛んだ痕跡あり。煙管は18世紀前半から半ばの年代である。

244は男性用の笄である。金銅製で彫金により魚子をあしらい、その上に真鍮製の動物（牛か）が付けられている。櫛をくすぐさずに頭を搔くのに使用する。

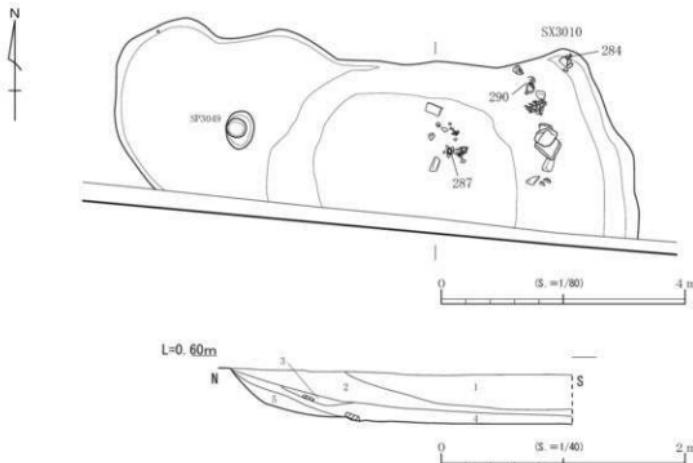
出土遺物の年代は、古いもので唐津の皿など16世紀末から17世紀前半の年代であるが、これは先のSX4029の年代と同様である。多くの遺物は17世紀後半から18世紀半ばごろの年代であり、SX3009の年代の中心と考える。第4遺構面から第3遺構面にかけて、連綿とSX4029・SX3009の池状遺構が使用されづけた結果、出土遺物の時期幅が生じたものと考える。

#### SX3010（第93・94・95・96図）

長さ8.6m、検出幅2.56mの平面不正形な橢円形状で、深さ0.38mを測る。遺構の西半には、SP3049が後に形成されている。

255は厚みがあるため、焼塩壺の蓋である。256・257・258・259・260・261・262・263・264・265は土師器皿である。258は内外面に焦げ目が付着する灯明皿である。259・262・263は底部外面には回転糸切り痕跡がのこる。261は底部外面には回転糸切り後、板ナデを施す。264は底部外面を回転ヘラキリのちナデである。また体部外面は顕著なロクロナデ調整である。265は外面上に焦げ目が付着する灯明皿であり、底部外面を回転ヘラキリのちナデである。

266は両端部を作り出す摘みがつく。蓋の一部を円形に穿つように窪めている。灯明具の陶器の蓋である。269・267・271は肥前産の陶器皿である。焼成や胎土など精緻である。270は肥前唐津の陶器皿である、底部内面に蛇ノ目釉ハギを施す。268は用途不明陶器である。焜爐の道具のようである。272は陶器皿である。273・275は陶器壺、276は陶器瓶、陶器壺273・275・276は鉄釉を施す。274は京信楽系の陶器碗である。277は肥前系の磁器香炉口縁部片である。278は瀬戸美濃系の盤である。279は瀬戸美濃産の磁器である。器種不明品。蓋の摘みのような部分は平面円形であるが、平面形は方形に成形している。280・282は肥前磁器皿である。281は肥前磁器小碗である。283・284は肥前磁器碗である。285・286は肥前陶器皿である。287は肥前陶器碗である。一重綱目文は17世紀の年代である。288は肥前磁器の碗である。内面に草花文を印刻している。289・291は肥前磁器の大皿である。290は肥前伊万里の輪花大皿である。292は磁器碗である。293は肥前系の陶器壺、茶入れである。294は肥前磁器の碗、295は肥前磁器の大皿で、296は備前産の陶器すり鉢、297は肥前磁器の鉢である。298 堺明石産の陶器すり鉢である。299は肥前磁器の香炉である。300は備前のサヤ鉢である。底部外面に刻印がある。

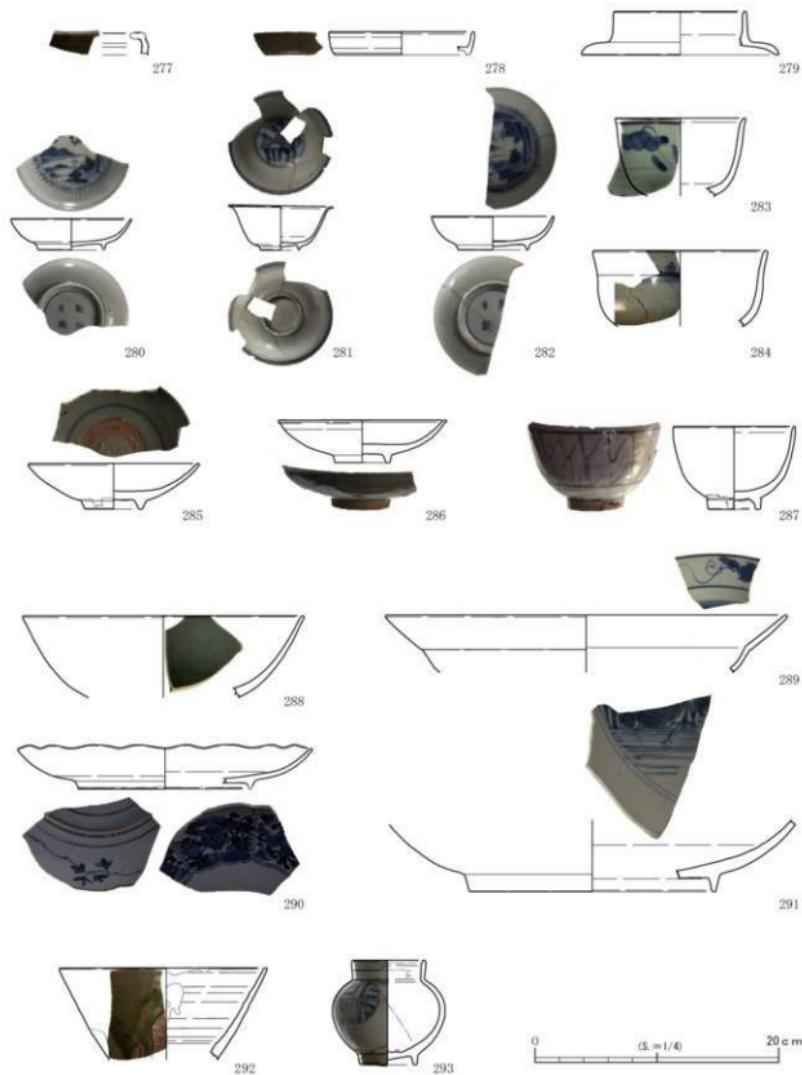


- 1:オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土 しまり弱い 粘性やや強い ⌀1mm 前後の Mn 粒を 10%, ⌀1mm 前後の Fe 粒を 2% 含む。  
層全体に SY6/2 灰オリーブシルトブロックが 3~8mm 15% 及ぶ。  
2:暗灰黄色(2.5Y4/2) シルト しまり弱い 粘性強い ⌀1~18mm の炭化粒を 5%, ⌀1mm 前後の Mn 粒を 2%, 1~24mm の礫を 20% 含む。  
3:褐色(10YR4/4) シルト しまりやや弱い 粘性強い ⌀1~20mm の炭化粒を 1%、2~4mm の Fe 粒を 2% 含む。層全体に燒土が 80% 及ぶ。  
4:暗灰黄色(2.5Y4/2) 砂質土 しまりやや弱い 粘性やや強い ⌀1mm 前後の Mn 粒を 1%。小礫をわずかに含む。  
5:灰オリーブ色(SY5/2) シルト しまり弱い 粘性強い 1~3mm の Fe 粒を 20%。小礫をわずかに含む。

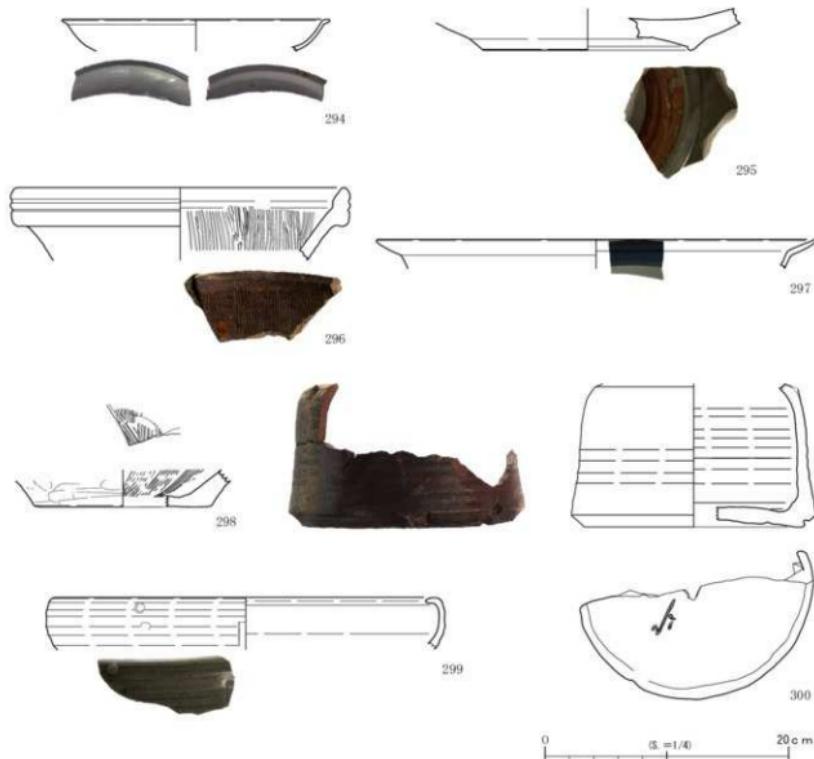
第93図 SX3010 遺構図



第94図 SX3010出土遺物1



第95図 SX3010出土遺物2



第96図 SX3010出土遺物3

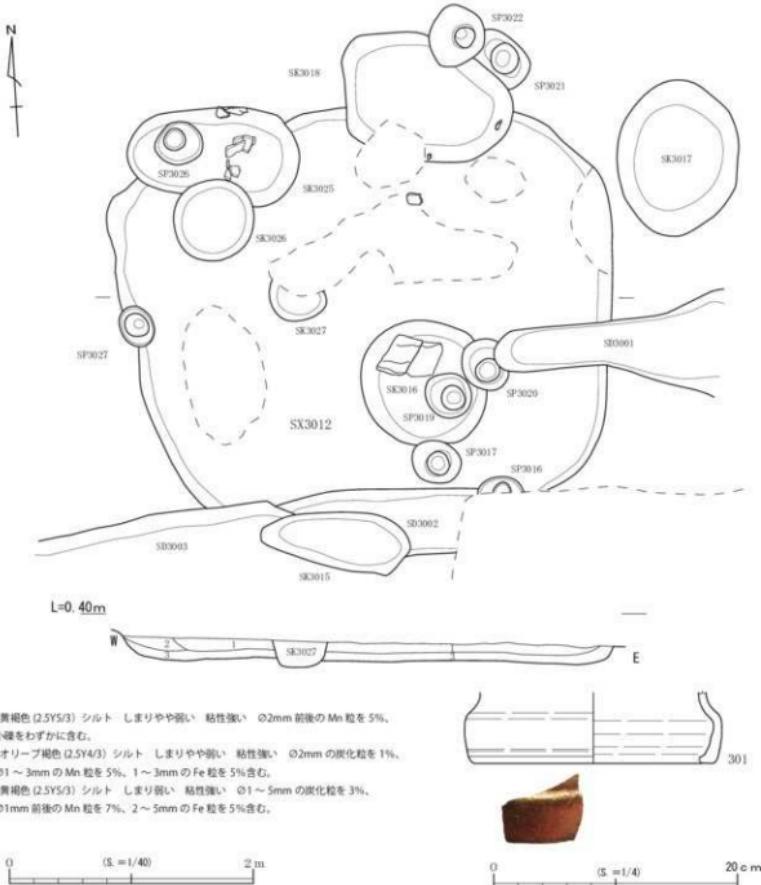
#### SX3012（第97図）

東西長3.96m、南北検出幅3.12mの平面隅丸方形状で、深さ0.16mを測る。重なり合う遺構のすべてを先行して形成している。

301は備前産陶器の用途不明鉢。焜炉の口縁部片か。

#### SX3014（第98図）

調査区北東の土坑である。南北検出長7.36m、東西検出幅2.92m、深さ0.54mを測る。遺構の多くが調査区外まで延びているが、復元すると平面梢円形状となろう。調査区東壁面の断面でSX3014に先行して形成された柱穴跡(6・7層)を確認した。またSX3014に先行して形成されたSX3035(溝跡)は東へさらに延長して延びており、SX3014の下層で平面ならびに断面(8～10層)を検出している。232は陶器碗である。体部外面に斑紋状赤褐色の釉薬を帶状に配置する。

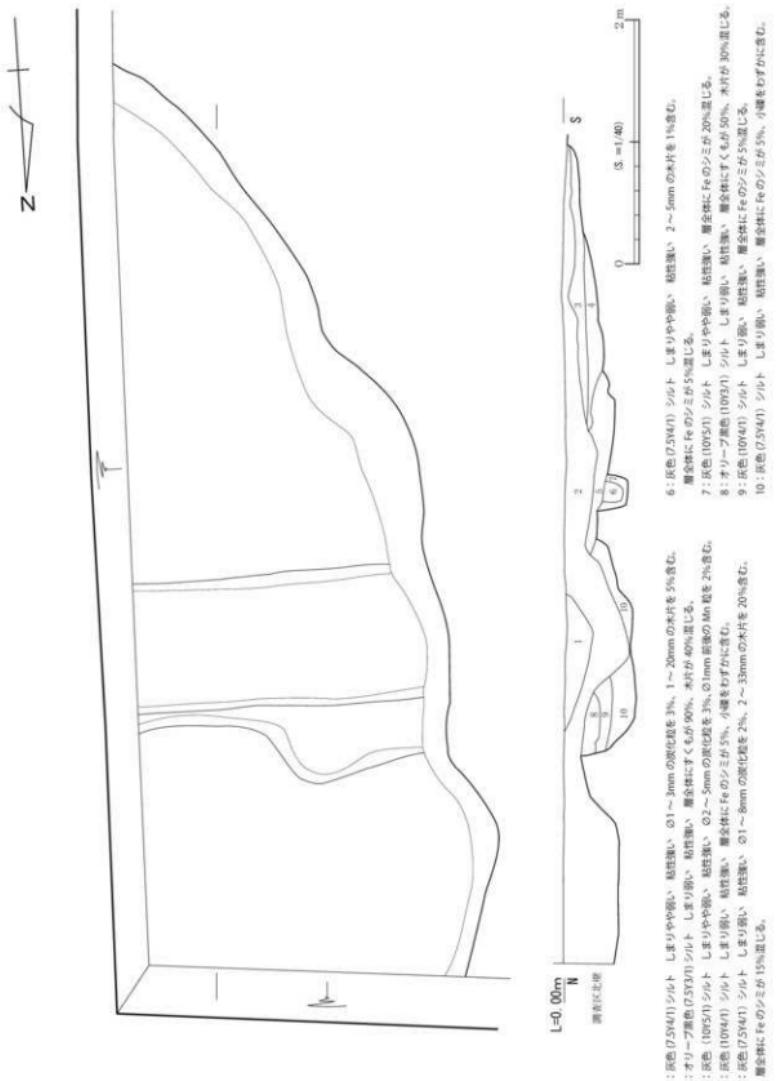


第97図 SX3012 遺構図・出土遺物

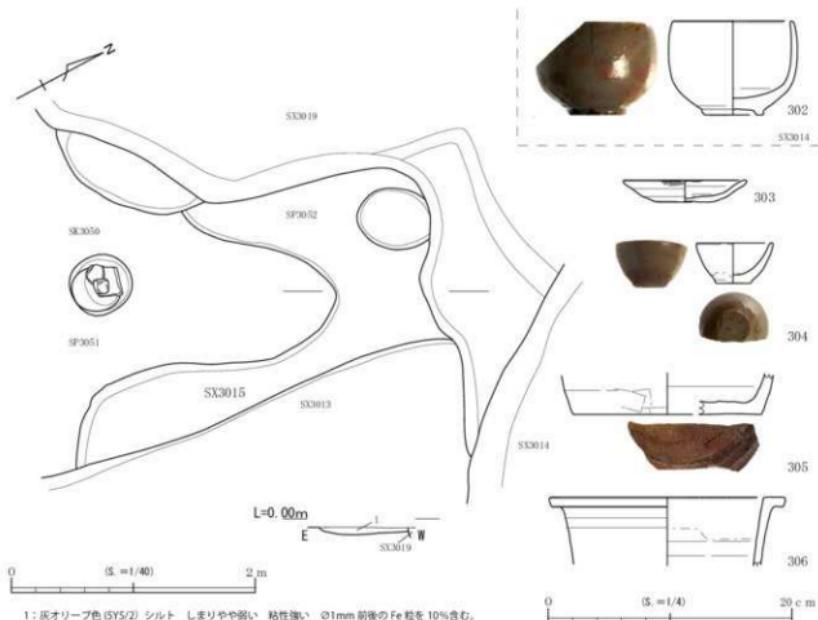
### SX3015 (第99図)

不正形な土坑であり、SK3050・SP3052・SX3019・SX3013が、一部重なって後に形成されていることもあります。形状は不明である。最大検出長3m、深さ0.08mを測る。

302は陶器碗である。高台部に砂の痕跡。303は上師器皿である。口縁部内外面に焦げ目が付着する灯明皿である。304は肥前産陶器猪口である。底部外面を回転糸切り痕跡がある。17世紀前半の年代である。305は備前のサヤ鉢である。306は陶器植木鉢である。口縁部を水平に外へのばす。



第 98 図 SX3014 遺構図



第99図 SX3014出土遺物・SX3015遺構図・出土遺物

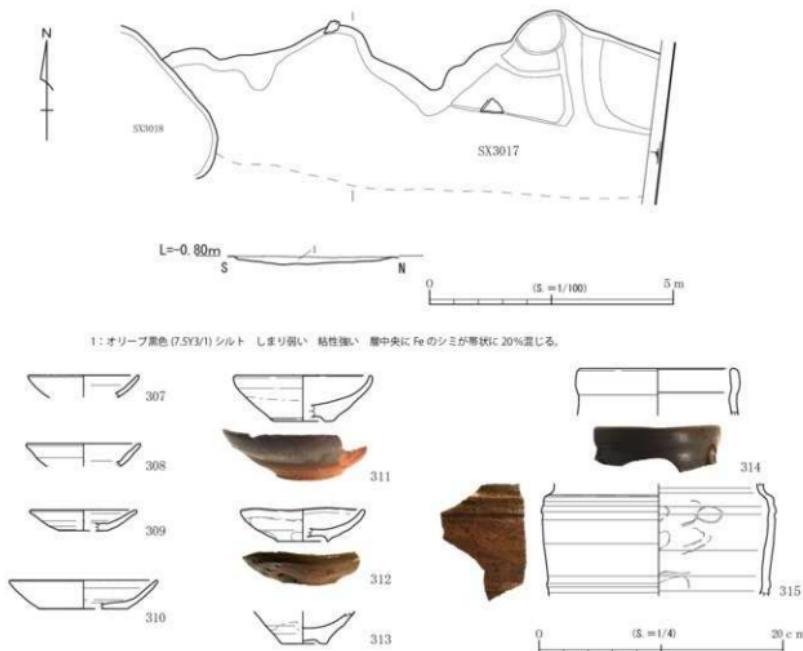
#### SX3017（第100図）

不正形な土坑である。東西検出長11m、南北検出長3.2m、深さ0.46mを測る。

307・308・309・310は土師器皿である。307・308は回転ナデ調整、309・310は底部回転糸切り痕跡である。311・312・313は肥前陶器皿である。314は陶器壺の口縁部片である。315は備前の壺である。

#### SX3018（第101・102図）

東西検出長13.3m、南北検出長3.4mの平面橢円形状で、最大深さ1.04mを測る。SD3016・SK3053・SX3006・SX3007がSX3018に一部重なり後に形成している。316・317・318・319・320・321は土師器の皿である。316は底部外面に回転ナデ調整を施す。317・319・320は底部外面に回転糸切り痕跡を残す。318は内外面スス付着の灯明皿である。322は肥前磁器の碗である。外面体部と内面見込みに鳥文を染付する。323は磁器の小碗である。324は肥前の磁器碗である。325は陶器碗である。326は肥前唐津の壺である。外面に鉄絵で曲線を描く。16世紀末から17世紀初頭の年代である。327は陶器の瓶である。鉄軸が掛けられている。328は土師質の鍋である。



第100図 SX3017 遺構図・出土遺物

#### SX3019（第103・第104図）

東西検出長8.4m、南北検出長6.3mの隅丸方形状で、深さ1.06mを測る。SX3019はSX3035・SD3023・SD3022の後に形成している。土層断面図を観察すると、SD3035（13～16層）との切り合い関係が確認できた。

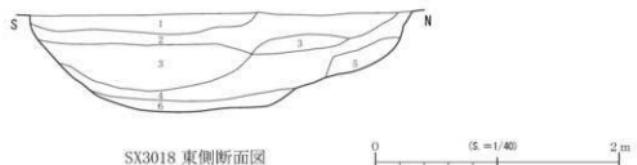
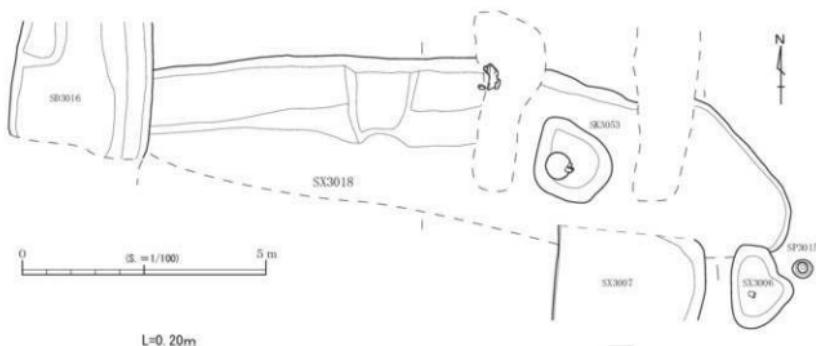
332は肥前陶器の輪花皿である。329は備前の白磁碗である。330は在地阿波大谷の灯明受皿である。331・335は土器類の鍋である。333は焜炉の口縁部片である。334は植木鉢である。

17世紀前半～中ごろの年代である。

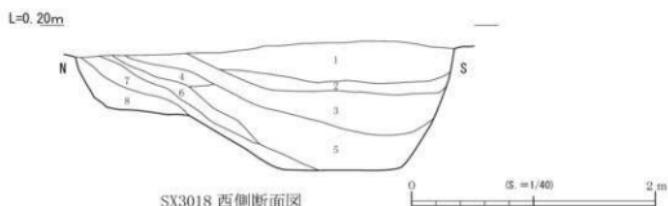
#### SX3025（第105図）

遺構規模は、東西長3.6m、南北検出長1.3m、深さ0.78mを測る。遺構北半は調査区北壁の外に広がっており、復元すると隅丸方形状の土坑となる。

336は堺明石産の陶器すり鉢である。

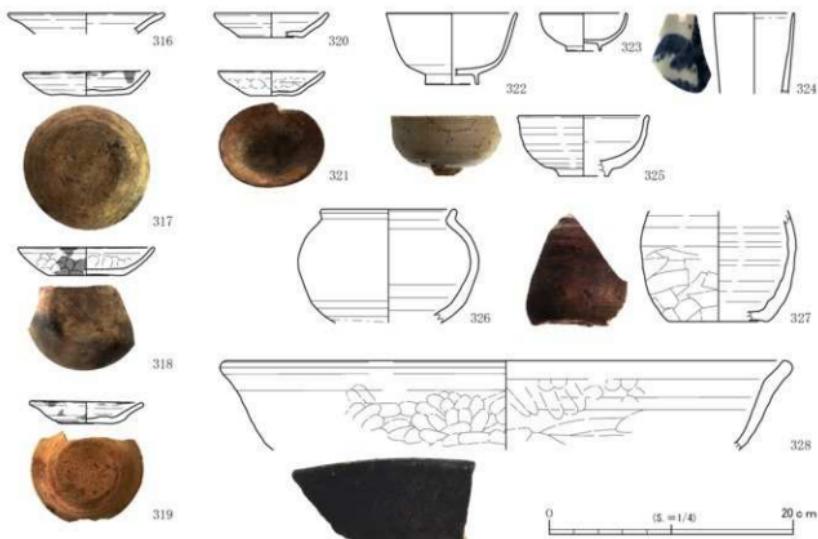


- 1: にじい黄色 (2.5Y6/3) シルト しまりやや強い 粘性強い  $\odot 1 \sim 5\text{mm}$  の炭化粒を 1%、 $\odot 1\text{mm}$  の Mn 粒を 30%。  
 $0\text{l} \sim 3\text{mm}$  の Fe 粒を 20%、 $1 \sim 6\text{mm}$  の鐵土粒を 10% 含む。
- 2: 底オリーブ色 (5Y4/2) シルト しまりやや強い 粘性強い  $\odot 1 \sim 5\text{mm}$  の炭化粒を 7%、 $\odot 1\text{mm}$  の Mn 粒を 15%。  
 $0\text{l} \sim 3\text{mm}$  の Fe 粒を 10%、 $1 \sim 8\text{mm}$  の鐵土粒を 20% 含む。
- 3: 灰色 (7.5Y4/1) シルト しまりやや強い 粘性強い  $\odot 1 \sim 8\text{mm}$  の炭化粒を 30% 含む。層全体に Fe のシミが 10%、砂が 20% 混じる。
- 4: 底オリーブ色 (5Y4/2) シルト しまりやや弱い 粘性強い  $\odot 1 \sim 4\text{mm}$  の炭化粒を 1%、 $\odot 1 \sim 5\text{mm}$  の Fe 粒を 10%。  
 $1 \sim 26\text{mm}$  の鐵土粒を 20% 含む。層全体に砂が 40% 混じる。
- 5: 底オリーブ色 (5Y4/2) シルト しまりやや強い 粘性強い  $\odot 1 \sim 8\text{mm}$  の Fe 粒を 15% 含む。
- 6: 灰色 (7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い  $\odot 1\text{mm}$  の Mn 粒を 2%。層全体にすくもが 20% 混じる。



- 1: 灰色 (7.5Y5/1) 砂質土 しまりやや弱い 粘性強い  $\odot 1 \sim 5\text{mm}$  の礫を 3% 含む。層全体に Fe のシミが 40% 混じる。
- 2: 雨オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い  $\odot 1 \sim 6\text{mm}$  の炭化粒を 5% 含む。層全体に Fe のシミが 10% 混じる。
- 3: 淡灰色 (7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い  $\odot 1 \sim 8\text{mm}$  の炭化粒を 2%、 $\odot 1\text{mm}$  の Mn 粒を 3%、 $\odot 2 \sim 12\text{mm}$  の礫を 1% 含む。層全体に木片が 15% 混じる。
- 4: 底オリーブ色 (5Y4/2) シルト しまりやや弱い 粘性強い  $\odot 1\text{mm}$  前後の Mn 粒を 5%、小礫をわずかに含む。
- 5: 灰色 (10Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い  $\odot 1\text{mm}$  の Mn 粒を 2%、 $\odot 2 \sim 13\text{mm}$  の礫を 2% 含む。
- 6: 暗オリーブ色 (5Y4/3) 砂質土 しまり弱い 粘性強い  $\odot 1\text{mm}$  の Mn 粒を 2% 含む。層全体に Fe のシミが 30% 混じる。
- 7: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) しまり弱い 粘性強い  $\odot 1\text{mm}$  前後の Mn 粒を 15%、 $\odot 1 \sim 20\text{mm}$  の Fe 粒を 40% 含む。
- 8: 底オリーブ色 (5Y5/2) シルト しまりやや弱い 粘性強い  $\odot 1\text{mm}$  前後の Mn 粒を 15%、 $\odot 1 \sim 20\text{mm}$  の Fe 粒を 40% 含む。

第 101 図 SX3018 遺構図



第102図 SX3018出土遺物

#### SX3027（第106・107図）

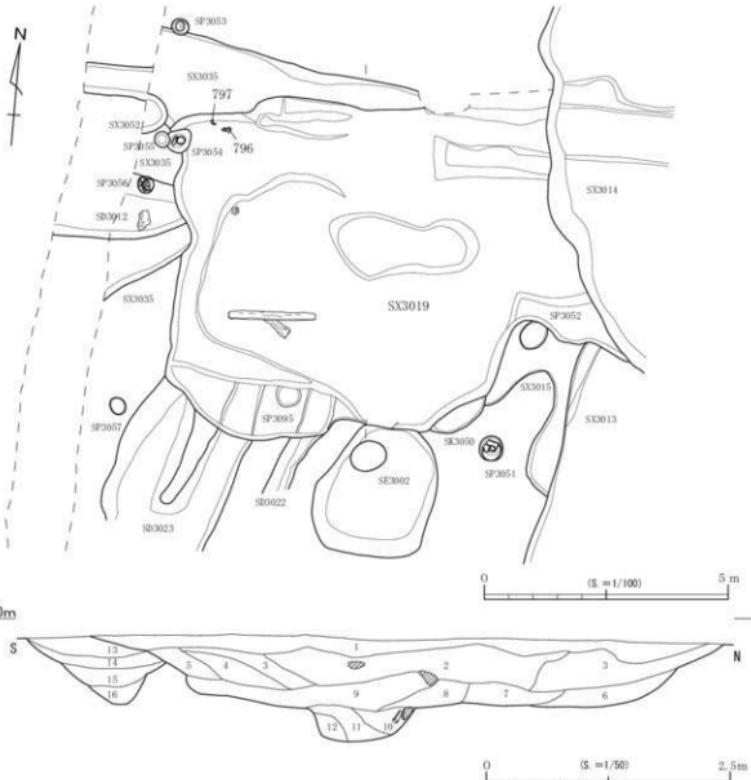
調査時は土坑としたが、溝の遺構である。検出長13m、幅3.84m、深さ1.25mを測る。調査区北壁よりさらに北へ延び、SD3016と並行している大規模な溝である。SD3016と共に規模の上で、他の溝と隔絶しており、敷地を大きく東西に区画する役割であったと考えられる。

337は焼塩壺である。338・340・341・344は肥前唐津の陶器皿である。343は肥前唐津の輪花皿である。339は堺明石産のすり鉢、342は備前産のすり鉢である。345・346は陶器の鉢である。

遺構は17世紀半ばから後半頃の年代である。

#### ⑥ AB区第3遺物包含層（第108図）

347は備前の三足がつく陶器水盤である。349は肥前唐津の陶器皿、348は煙管雁首である。350は堺明石産の陶器すり鉢である。351は肥前系磁器の小瓶である。外面に蛸唐草を描く。体部径は小さくなっている。352は陶器蓋である、353は在地の阿波大谷焼の花器である。



1: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い Ø1~3mmの炭化粒を3%, Ø1mmのMn粒を2%、木片・小礫をわずかに含む。

2: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い Ø1~4mmの炭化粒を1%, Ø1mmのMn粒を3%、  
170×50~160×70mmの石を3%、木片・小礫をわずかに含む。

3: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い Ø1mmのMn粒を5%含む、層全体に木片が3%混じる。

4: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体に黒いシミが20%、木片が5%混じる。

5: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体に黒いシミが15%、木片が10%混じる。

6: オリーブ黒色(5Y3/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体に黒いシミが10%、木片が5%混じる。

7: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い Ø1mmのMn粒を3%、木片をわずかに含む。層全体にFeのシミが10%混じる。

8: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体に黒いシミが5%、木片が5%、砂が10%混じる。

9: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い Ø1~12mmの炭化粒を1%、木片が3%混じる。

10: オリーブ黒色(5Y3/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体に黒いシミが50%、木片が5%混じる。

11: オリーブ黒色(5Y3/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体に黒いシミが40%、小礫をわずかに含む。

12: 深色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い Ø1~10mmのFe粒を7%含む。

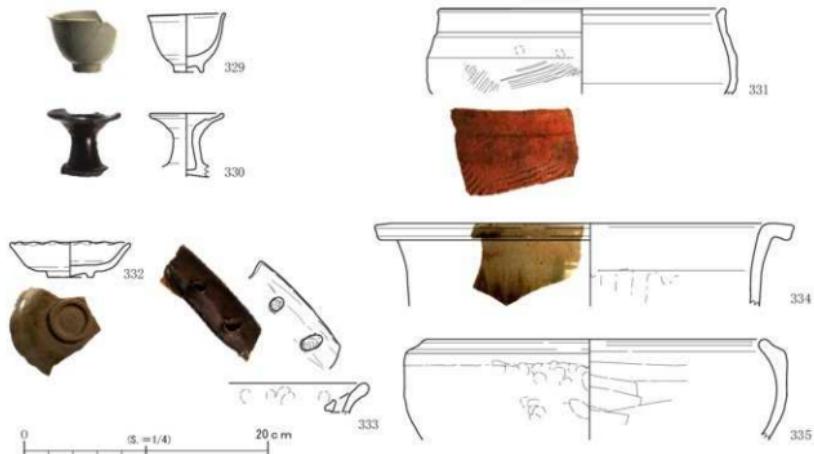
13: 灰色(10Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体にFeのシミが15%混じる。

14: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い Ø1mmのMn粒を5%、木片をわずかに含む。

15: 灰色(10Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体にFeのシミが3%混じる。

16: 灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体にFeのシミが7%混じる。

第103図 SX3019遺構図



第104図 SX3019出土遺物

## ⑦ C区土坑 (SK)

### C区 SK3011 (第109図)

平面楕円形状の土坑で、東西長 0.64m、南北検出長 0.76m、深さ 0.17m を測る。遺構北端部は SX3005 が形成されていて失われている。

354 は、肥前系の陶器小碗の口縁部片である。口縁部には鉄軸が掛けられている。

### C区 SK3014 (第110図)

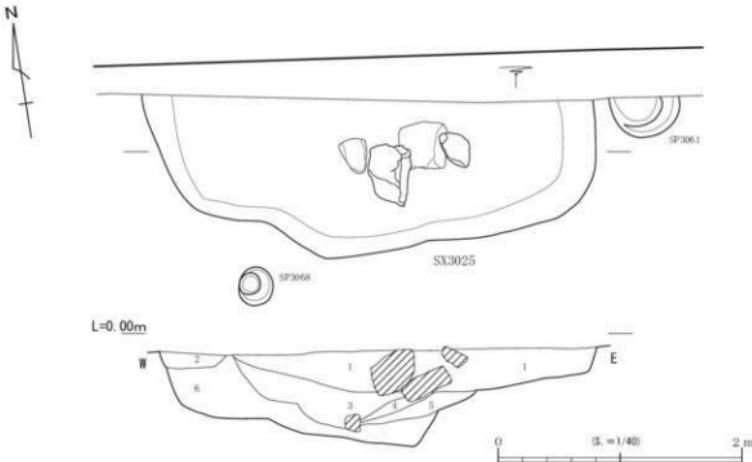
平面不正円形状の土坑で、南北長さ 1.2m、東西検出長 1.16m、深さ 0.31m を測る。西端部は SX3005 が形成され失われている。遺構南半部は多量の石塊が出土した。

355 は備前系のすり鉢である。すり目は 7 条 / 2.5cm である。すり目の揃え方が他の産地のものと比べ粗雑である。

### C区 SK3022 (第111図)

平面楕円形状の土坑で、短軸長 0.82m、長軸長 1.32m、深さ 0.26m を測る。遺構内から石塊が十数点出土した。

356 は、瀬戸美濃系の陶器碗である。内面に深い緑釉が掛けられている。357 は在地の阿波大谷焼の香炉である。358 は大谷焼の陶器壺である。18世紀の年代である。



- 1:オリーブ色(2.5GY5/1) シルト しまりやや強い 粘性強い  $\varnothing 1 \sim 23\text{mm}$  の炭化粒を 2%、 $\varnothing 1 \sim 40\text{mm}$  の礫を 2%、200 ~ 370mm の石を 25% 含む。  
 2:灰オリーブ色(5Y5/2) シルト しまりやや強い 粘性強い  $\varnothing 1 \sim 20\text{mm}$  の炭化粒を 3%、 $\varnothing 1 \sim 3\text{mm}$  の Mn 粒を 10%、 $\varnothing 1 \sim 3\text{mm}$  の Fe 粒を 5% 含む。  
 3:灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い  $\varnothing 1 \sim 12\text{mm}$  の炭化粒を 2%、 $\varnothing 1 \sim 16\text{mm}$  の礫を 2%、200 × 50mm の石を 5% 含む。  
 4:灰色(7.5Y4/1) シルト しまりやや強い 粘性強い 層全体に Fe のシミが 2% 褐じる。  
 5:灰色(7.5Y5/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体に Fe のシミが 1% 褐じる。  
 6:灰色(7.5Y5/1) シルト しまりやや弱い 粘性強い 層全体に Fe のシミが 5% 褐じる。



第 105 図 SX3025 遺構図・出土遺物

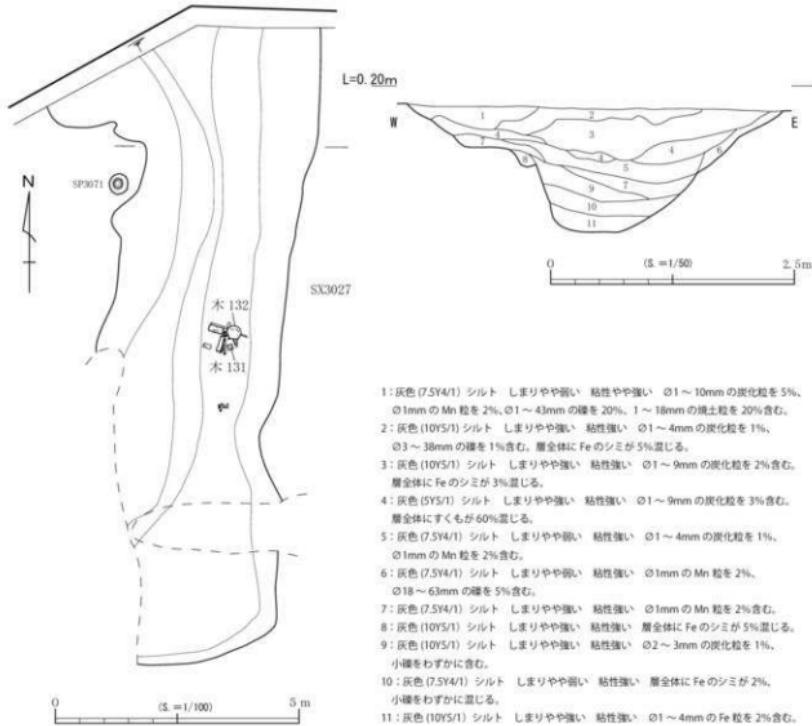
### ⑧ C 区柱穴 (SP)

#### C 区 SP3061 (第 112 図)

平面直径 0.28m の円形状の柱穴で、深さ 0.27m を測る。柱穴跡の中央部には直径 0.14m の柱痕跡が認められた。359 は肥前唐津の陶器向付である。口縁部外側に鉄絵で「×」や「/」を部分的に描く、16 世紀末の年代である。

そのほか柱穴から遺物が出土した。(第 113 図)

360 は焼塙壺の蓋である。型作りで断面内外形が弧を描く。361 ~ 364・366 は土師器皿である。361・363・364 は外面底部を回転糸切り調整とする。366 は外面底部を停止糸切り調整とする。365 は磁器皿、367・372 は堺・明石産の陶器すり鉢である。368 は磁器碗の底部片である。369 は陶器碗の底部片、370 は陶器天目茶碗である。371 は陶器碗である。見込みに胎土が付着する。



第 106 図 SX3027 遺構図

### ⑨ C 区性格不明土坑 (SX)

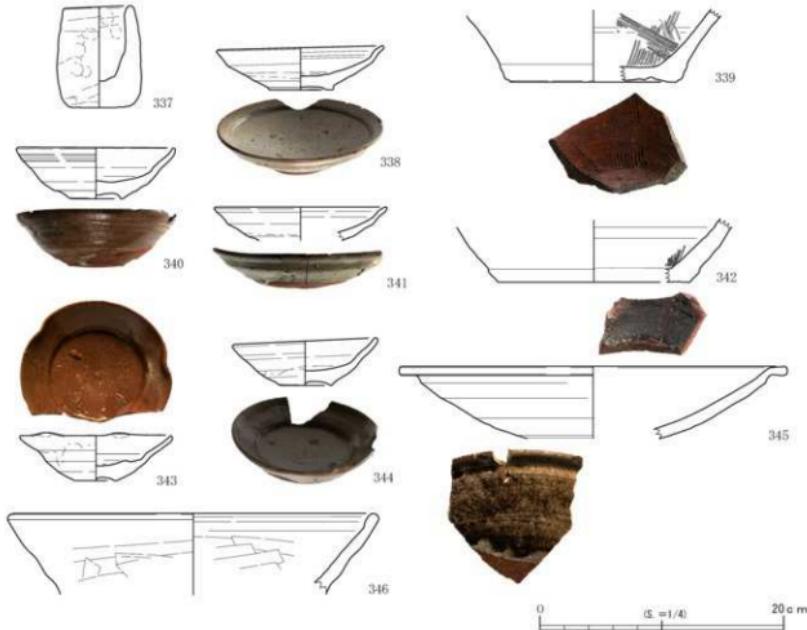
#### C 区 SX3003 (第 114 図)

SX3003 に部分的に重複して、SP3033・SP3034・SX3005 が後に形成されているが、復元すると平面隅丸方形状の土坑となる。その規模は東西長 2.28m、南北長 2.84m、深さ 0.68m を測る。373 は土師器の皿である。

#### C 区 SX3005 (第 115 図)

東西長 3.28m、南北検出長 2.88m、深さ 0.64m までを測る。平面円形と推測する大規模な土坑としたが、井戸跡の可能性が高い。土層は 4 層まで確認したが、それ以下の状況については不明である。

374・375 は備前すり鉢である。374 はすり目 13 条 /2.8cm、375 はすり目 8 条が認められる。



第107図 SX3027出土遺物

#### C区 SX3009 (第116図)

平面不正形状の土坑で、その規模は東西長2.56m、南北長2.3m、深さ0.76mを測る。376・377は土師器の皿である。378は瀬戸美濃産の陶器皿である。17世紀前半頃の年代である。379は瀬戸美濃系の天目茶碗である。380は備前系のすり鉢である。すり目は12条/3.0cmである。

#### C区 SX3010 (第117図)

東西検出長4.5m、南北長1.76m、深さ0.56mを測る。1.2層と5・6層部分は別遺構の可能性もある。381は、土師器の皿である。底部外面に回転糸切り調整を施す。

#### C区 SX3011 (第118図)

長軸長3.36m、短軸検出長1.66m、深さ0.24mを測る。平面形状は、SX3008・SX3009・SX3010が一部重なって形成されているため、不明な点が多いが、橢円形状の土坑と思われる。

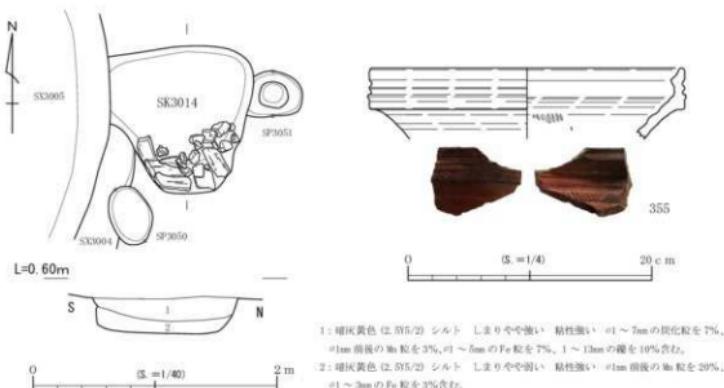
382は土師器の皿である。底部が回転ヘラ切り後ナデ調整である。



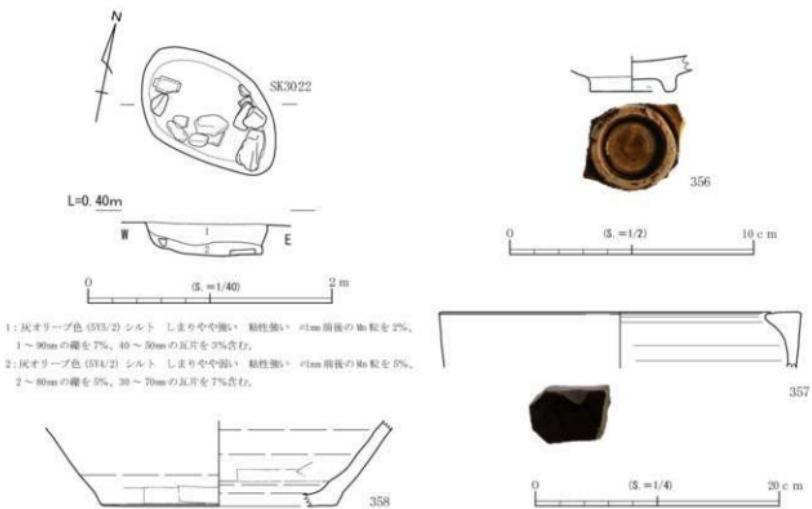
第108図 第3遺物包含層・第3遺構面出土遺物



第109図 C区SK3011遺構図・出土遺物



第 110 図 C 区 SK3014 遺構図・出土遺物

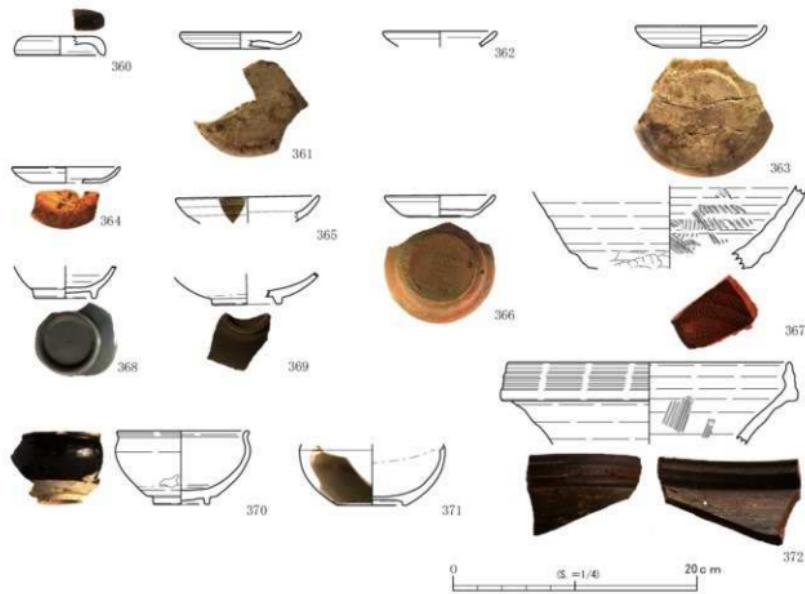


第 111 図 C 区 SK3022 遺構図・出土遺物

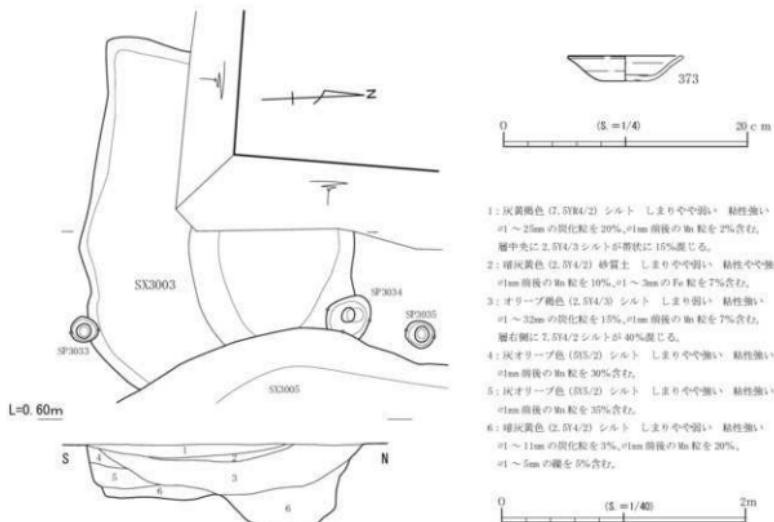


- 1: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト しまりやや弱い 粘性強い 2mm前後の Mn 粒を 2% 含む。  
 2: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト しまりやや弱い 粘性強い 2mm前後の Mn 粒を 10% 含む。  
 3: 暗オリーブ色 (5Y5/2) シルト しまりやや弱い 粘性強い 2mm前後の Mn 粒を 30% 含む。

第112図 C区 SP3061 遺構図・出土遺物



第113図 C区 第3 遺構面 S P 出土遺物



第114図 C区 SX3003 遺構図・出土遺物

#### C区 SX3012 (第119図)

東西方向に長軸をもつ楕円形状の土坑である。東西検出長3.0m、南北長1.24m、深さ0.58mを測る。遺構の東端部はSX3014の石列を伴う遺構によって壊なわれている。

383は備前のすり鉢口縁部片である。すり目がわずかに確認できた。

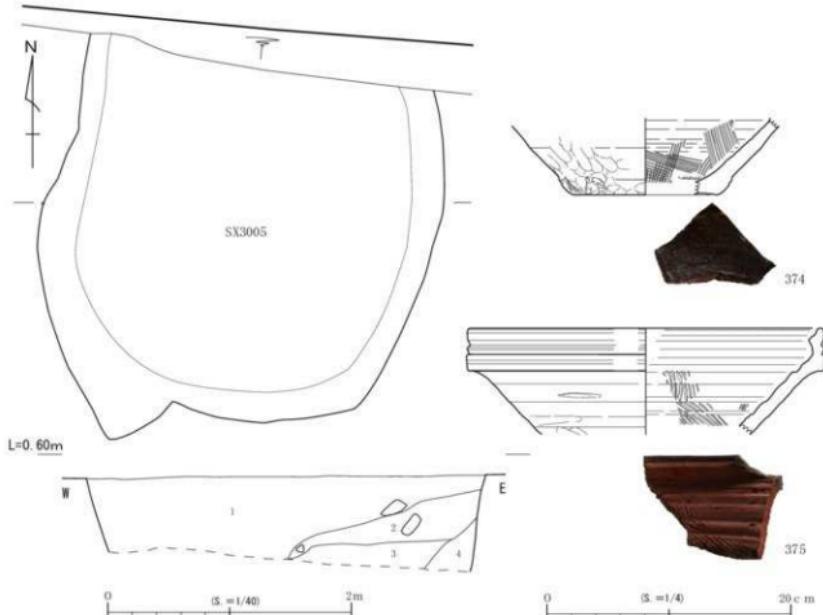
#### C区 SX3014 (第120図)

石列を検出した土坑である。その規模は、南北検出長1.76m、東西検出長約4.8m、深さ0.54mを測る。土坑北半には東西方向に延びる、北側に面をもつ石列を検出した。石列の石は平面長方形の短辺約10cmを面として約4.5mまで確認でき、高さは約50cmを測る。この北側に面をもつ石列は、真北方位から約10°傾いて延びている。石列から北側は後世の攪乱によって破壊されており、対となるような石列の有無は不明である。よって、石列の用途については、不明な点が多いものの石列よりも北の位置で土坑など遺構が認められることから、溝であると考える。溝は向かい合う2つの石列によって機能し、敷地を南北に区画していたと考えられる。

384は陶器の碗である。削り出し高台に体部内外面に灰白色釉薬を掛けている。385は土垂である。直径1cmで穿孔する。

#### C区 SX3016・SX3017 (第121図)

調査区北端にある土坑である。SX3016は東西検出長2.68m、南北長0.64m、深さ0.32mを測る。



- 1: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト しまりやや弱い、粘性強い、 $\phi = 17mm$ の炭化粒を 5%、 $\phi 1mm$ 前後の Mn 粒を 5%、 $1 \sim 10mm$ の礫を 3%、 $1 \sim 8mm$ の塊状物を 10%、 $240 \times 60mm$ の石を 2% 含む。層全体に 2.5Y6/3 シルトブロックが 40% 亂じる。
- 2: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト しまりやや弱い、粘性強い、 $\phi = 35mm$ の炭化粒を 2%、 $\phi 1mm$ 前後の Mn 粒を 5%、 $90 \sim 130mm$ の礫を 2% 含む。層全体に Fe のシラフが 10%、シルトブロックが 10% 亂じる。
- 3: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト しまりやや弱い、粘性強い、 $\phi = 9mm$ の炭化粒を 5%、 $\phi 1mm$ 前後の Mn 粒を 30% 含む。
- 4: 灰オリーブ色 (3Y4/2) 砂質土 しまり弱い、粘性強い、 $\phi 1mm$ 前後の Mn 粒を 5% 含む。

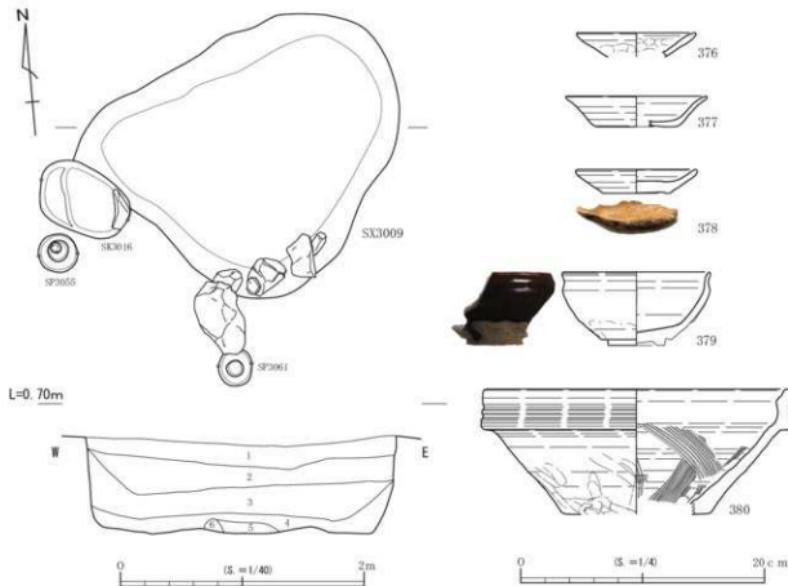
第115図 C区 SX3005 遺構図・出土遺物

調査時は土坑としたが、溝の可能性がある。386は京信楽系の皿である。内面見込みに染付あり。387は肥前系の陶胎染付の碗である。外面に風景画を描く。

SX3017は東西検出長2.16m、南北検出長2m、深さ0.34mを測る。平面形状は不明である。

388は肥前磁器の小碗である。389は肥前産の磁器碗である。390は肥前系の陶胎染付である。391は焼塙壺である。内面に布の押圧痕跡があり、外面に粘土帯を巻き付けた痕跡が線状にのこる外面を整え、断面厚みが均一であるのが特徴である。17世紀後半から18世紀中頃までの年代である。392は土師質の火鉢である。

C区第3遺構面の年代は16世紀末や19世紀の年代の遺物も出土しているが、概観すると中心は17世紀後半から18世紀中頃までの年代と考えられる。



- 1: 墓褐色 (10Y3/3) 砂質土。しまりやや弱い。粘性強い。01 ~ 28mm の炭化粒を 3%、01mm 前後の Mn 颗を 2%、01 ~ 5mm の Fe 颗を 5%、1 ~ 15m の縦を 3% 含む。
- 2: 墓灰褐色 (2. 10Y4/2) 砂質土。しまりやや弱い。粘性強い。01 ~ 41mm の炭化粒を 3%、01mm 前後の Mn 颗を 3%、01 ~ 6mm の Fe 颗を 20%、1 ~ 20m の縦を 3% 含む。
- 3: 黄褐色 (10Y4/3) シルト。しまり弱い。粘性強い。01 ~ 3mm の炭化粒を 25%、01mm 前後の Mn 颗を 10%、1 ~ 20m の縦を 3% 含む。
- 4: 墓オリーブ色 (2. 10Y4/2) 砂質土。しまりやや弱い。粘性強い。01mm 前後の Mn 颗を 5% 含む。
- 5: 墓オリーブ色 (2. 10Y4/2) 砂質土。しまりやや弱い。粘性強い。01mm 前後の Mn 颗を 3%、01mm 前後の Fe 颗を 10% 含む。
- 6: 灰オリーブ色 (2. 10Y5/2) シルト。しまり強い。粘性強い。01mm 前後の Mn 颗を 5% 含む。

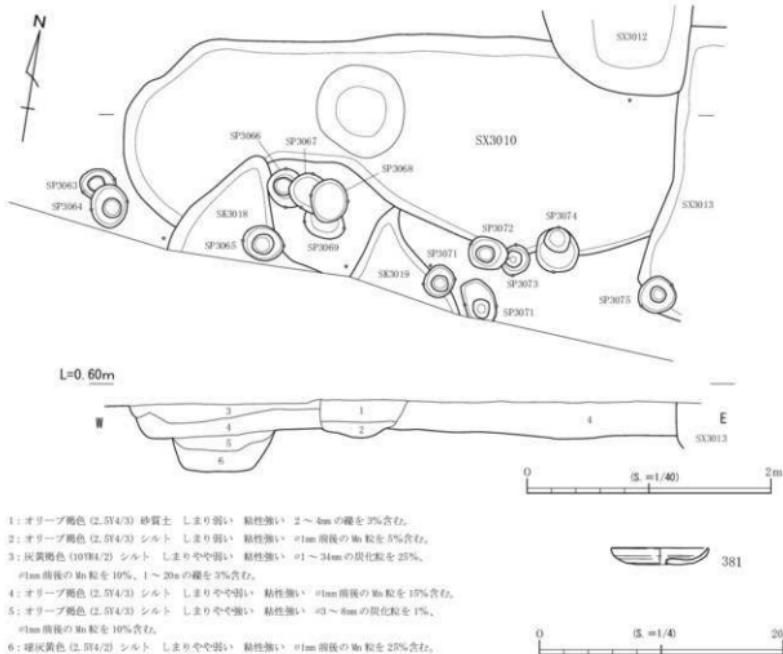
第 116 図 C 区 SX3009 遺構図・出土遺物

#### ⑩ C 区第 3 遺物包含層（第 122 図）

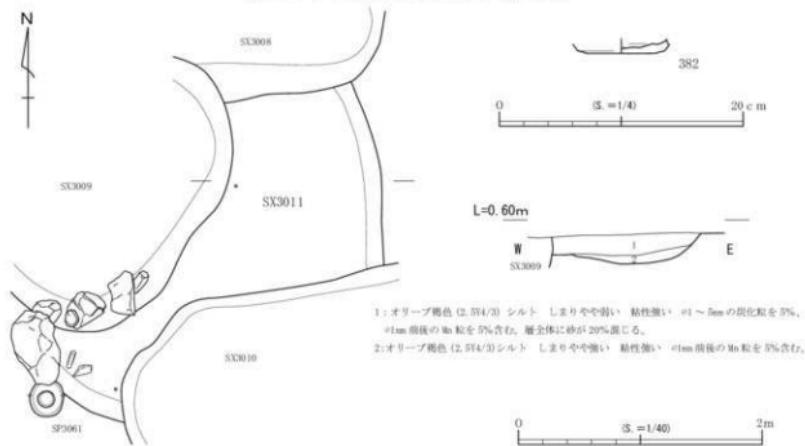
393・394 は土師器の皿で、394 は回転静止ペラ切り調整である。396・395・397・399 は肥前産の陶器皿である。398 は肥前系の皿である。404 は陶器大皿である。405 は肥前陶器の大皿である。402・403 は瀬戸美濃系の天目茶碗である。400 は肥前系の茶入れである。401 は陶胎染付の猪口である。406・407 は肥前のすり鉢である。肥前陶器の皿と肥前焼の茶入れ・すり鉢は 17 世紀中ごろから 18 世紀の年代である。他は 18 世紀から 19 世紀の年代である。

#### ⑪ 木製品

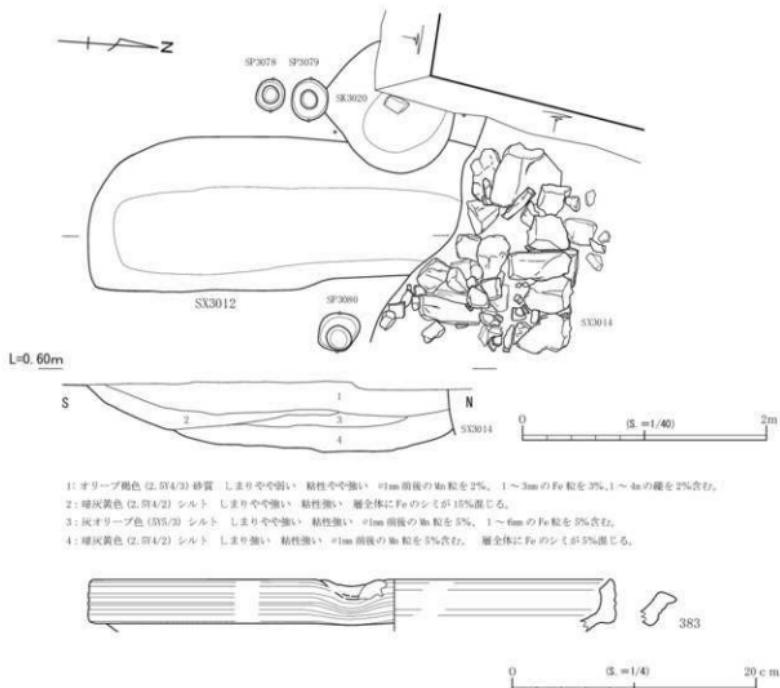
木 48 ~ 木 51 (第 123 図) 木 48 は容器の底板である。表面 2箇所の隅を切り落とし、表面端部に釘穴 13箇所を穿つ。欠損した側面を削り整えて他に転用している可能性が高い。木 49 は杓文字である。



第117図 C区 SX3010 遺構図・出土遺物



第118図 C区 SX3011 遺構図

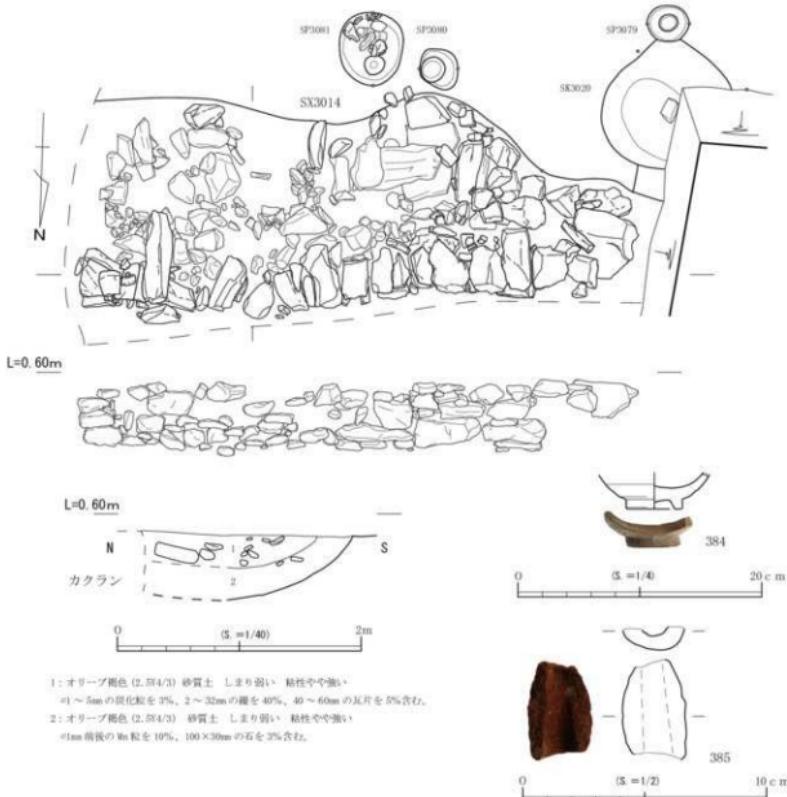


第119図 C区 SX3012遺構図・出土遺物

一本作りで上部を半円形状に成形する。木50と木51は同形式の棒状の部材である。裏面を平坦に整えた後、中央を方形状に削る。出土状況は、この方形状部分に板材を架け、木50と木51を繋げて組まれていた。使用方法は不明である。

木52～木54（第124図）は木筒である。木52・木53は荷札木筒である。木52は両上端部を切り欠きし、下端部を尖らせる。表面は「□人□」と人の字と読める。木53は右側上面上端部を切り欠きする。表面は「庄村□」と庄村と読める。木54は習書木筒である。隅切が施された折敷を転用する。両面を「高橋」と何度も書いている。「高橋」の字体を行書体や草書体に変えている。

木55～木58（第125図）木55と木56は同形式の方形板に黒漆を塗った工芸品の一部である。黒漆の上から金蒔絵で草木をそれぞれ異なる絵を描く。他部材と組むため、各々下端面は漆を塗らず2箇所に穿孔する。木57～木59は木筒である。木57は下端部が欠損し、表面にのみ墨書する。木58は表を先に書き、板材を切削した後、裏に文字を書いている。表は上端面に斜線を4条引き、その下から文字を書いている。信仰に関連する木筒か、不明である。裏は板の長軸に合わせた文字と短軸に合わせた文字がある。長軸に合わせた文字は、表の文字と逆さになる位置で「佐□□」「戰祈□」「□町」と読める。短軸に合わせた文字は三行で「□□□三」「□□□」「□□正□」と読める。木59は荷札木



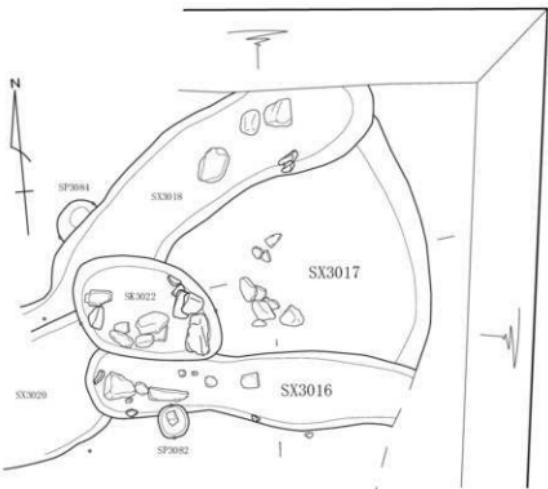
第120図 C区 SX3014 遺構図・出土遺物

簡である。上端部側面に切り欠きし、下端部をとがらせる。表のみ墨書する。

木60～木65（第126図）木60・木61は横櫛である。本体から歯を三角形状に削り出して成形する。木62は傘の頭口クロである。側面に穿孔があり、親骨を挿入していたと思われる。木63は椀蓋である。赤漆を塗り外而に草木の模様を描く。木64・木65は腰丸椀である。木64は内面に赤漆、外而に黒漆を塗り、外而に花の模様を描く。木65は内面に赤漆、内面に黒漆を塗り、外而に花草木を描く。

木66～木69（第127図）木66・木67は椀蓋の破片である。内面に赤漆、外而に黒漆を塗り、外而に草木を描く。木68・木69は腰丸椀である。内外面に赤漆を塗り、外而に花の紋を描く。

木70～木78（第128図）木70は荷札である。上部両端面を切り欠き、下端部は欠損する。墨書の痕跡は認められなかった。木71は円錐状の栓である。表面を細かく削り、一端を細く成形する。木



L=0.40m



L=0.40m



1: 黄褐色 (2. 3V5/3) シルト しまりやや強い、粘性強い。0mm前後の Mn 颗を 20%。  
01 ~ 15mm の Fe 颗を 10%, 2 ~ 5m の礫を 3% 含む。

2: 灰色 (10V4/1) シルト しまりやや強い、粘性強い。02 ~ 10mm の炭化粒を 5%,  
=1mm 前後の Mn 颗を 5%, 1 ~ 21mm の礫を 7%, 3 ~ 8mm の塊土鉢を 10% 含む。

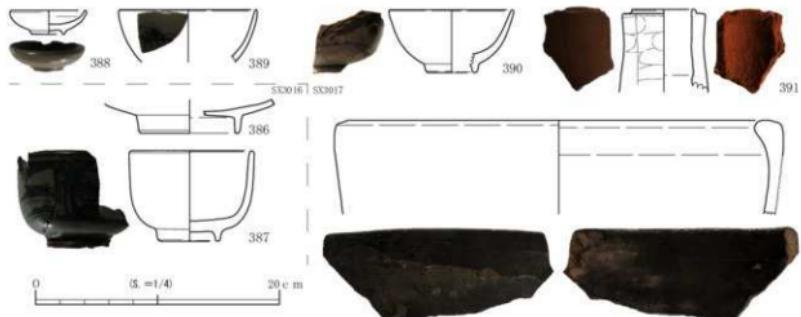
1: オリーブ褐色 (2. 3V4/3) シルト しまりやや強い、粘性強い。  
01mm 前後の Mn 颗を 5%, 1 ~ 32mm の礫を 25%, 3 ~ 26mm の瓦片を 5% 含む。

2: 雜灰褐色 (2. 3V5/2) シルト しまりやや強い、粘性やや強い。  
01mm 前後の Mn 颗を 3%, 1 ~ 120mm の礫を 10%, 4 ~ 9mm の瓦片を 3% 含む。

SX3016 土層断面図

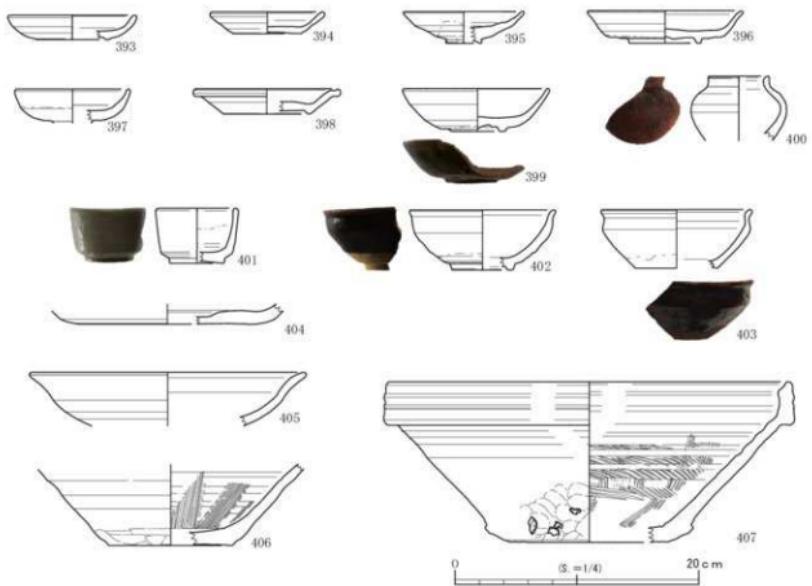
SX3017 土層断面図

0 5 = 1/40 2m



392

第 121 図 C 区 SX3016・SX3017 遺構図・出土物



第122図 C区 第3遺物包含層出土遺物

木72・木73は箸である。木72は両口箸、木73は片口箸である。木74・木75は柄杓柄である。端部に木釘を打ち柄杓と固定していたと思われる。木76は腰丸椀である。内面に赤漆、外面に黒漆を塗る。底部見込みに貫通孔2箇所あり転用品か。木77・木78は腰丸椀を転用した柄杓である。体部に穿孔し、柄杓柄（持ち手）を差し込んで使用していた。木78は転用時に高台部を削り取る。

木79～木84（第129図）木79は折敷の脚部分のこと、足打である。2つ1組で並べて使用した。木80は直径約8cmの円板である。通常は曲物底板などに使用されるが、木80は円板の左右対称位置にそれぞれ別の木を挟み込み、底板に合わせて成形している。木81は台座である。一組の板材の中央部に各々方形状の切り込みを作成し、上下に交差するよう組んでいる。木82・木83は容器の蓋である。木82は表面に幅1.1cmの把手の線状痕跡があり、釘穴が9箇所ある。木83は円板の蓋の裏面は縁を薄く成形し、内円を作り出している。内円の側面に木釘穴4箇所を確認する。また表面には刃物傷が多い。木84は漆器の皿である。内面に草木と扇の模様を描く。

木85～木94（第130図）木85～木87・木89～木91は漆製品の板材であり、折敷の縁の可能性が高い。木85は一端を薄く削り、そこに樹皮の紐を縦に3箇所通す。また下端部側面に穿孔2箇所あり。表裏・上端側面に黒漆を塗る。巡らせた縁を樹皮の紐で縫じていたと考えられる。木86は表面のみ黒漆を塗り、表面を除いた各面に木釘穴を穿孔する。木87は表裏・上下両側面に黒漆を塗る。表面両端部に各5条の切り込み線をつける。切り込み線によって板を湾曲させることができる。木88は

表面両端部に溝を作る。曲物内部の仕切り板などに使用したと思われる。木 89 は下端面に穿孔 4箇所の内、2箇所に木釘が残存する。木 91 は下端面の穿孔 4箇所すべてに木釘が残存する。木 92 は角材である。上端部を板状に成形し、他の部材と組み合す。木 93 は円形板の蓋である。側面に穿孔が 4箇所あり、補修している。裏面に刃物傷がある。木 94 は摘み付きの蓋である。円板中央に摘みを差し込む。裏面に内円を削り出し、その側面にへぎ板を巡らせる。円形状としたへぎ板を樹皮の紐で強固に綴じる。またへぎ板は木釘 4箇所で蓋側面に固定している。

木 95～木 98（第 131 図）木 95 は板材の両端を斜めに成形し、表面に鉄釘を 2箇所うつ。木枠など組合せた木材の補強に使用したと思われる。木 96～木 98 は下駄である。木 96・木 97 は角型連歎下駄である。木 96 は台の表に「一」の内に「×」を組み合わせた記号を刻む。木 97 は台裏面後部に「×」と「一」を組み合わせた「△」のような記号を刻む。木 98 は角型削り下駄である。台の表に左右足の痕跡があり、左右とも履いたようだ。

木 99・木 100（第 132 図）差歎下駄である。木 99・木 100 は歎を溝 2条の内の各柄穴に差し込み、歎を台に固定する。木 99 は、修理のためか、台の表から柄に木製楔を打ち固定した後、さらに台の表から歎に鉄釘を打つ。

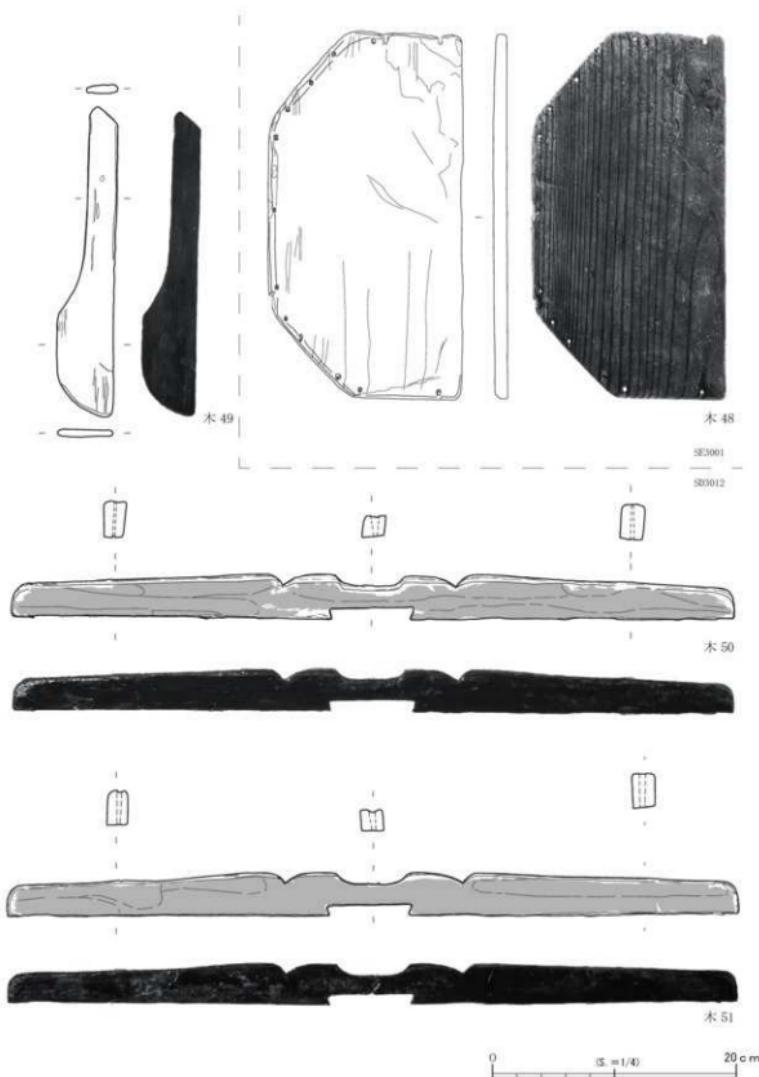
木 101～木 107（第 133 図）、木 108～木 114（第 134 図）は箸である。箸は片方のみを細くしたものは片口箸、両方を細くしたものは両口箸、両方ともに細くしないものを寸胴箸とした。欠損がないものに限られるため、両口箸や寸胴箸と判断できるものは多くはない。木 104 は寸胴箸、木 114 は両口箸である。

木 115～木 118（第 135 図）木 115 は曲物底板である。側面 2箇所に木釘が残存する。木 116 は円板の蓋である。中心に樹皮の紐が遺存する。紐を摘みとしていた。木 117 は杓文字である。持ち手端部を切り削って成形する。木 118 は丸型連歎下駄である。前歎は補修のためか差歎となっている。浅く溝を作りあたりを付けた後に釘を台の表から打っている。釘穴 3箇所あり、鉄釘 2箇所が確認できる。また台表の後部に記号のような線状痕跡がある。

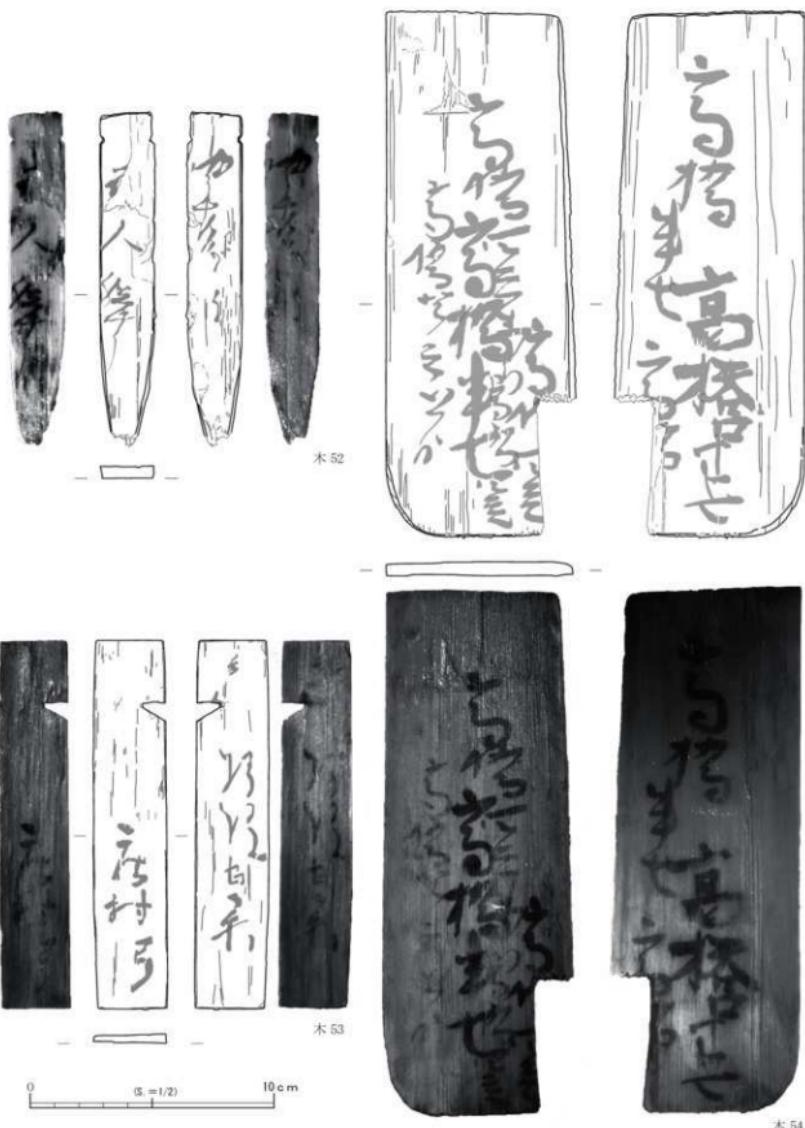
木 119～木 127（第 136 図）木 119 は把手である。端部は、本体容器に差し込む深度を定めるため、一隅を方形に切っている。差し込んだ後鉄釘で固定している。持ち手には下面中央に弧状の抉りを成形する。木 120～木 123 は箸である。木 124 は蓋である。縁を段状に成形して、裏面を小さくし、その側面に木釘 3箇所を確認する。表面には焼きごて文字「□□□」をつける。

木 125・木 126 は漆器の腰丸椀である。木 125 は内面に赤漆、外面に黒漆を塗る。木 126 は内外面に黒漆を塗り、外面に赤漆で草木を描く。木 127 は丸型連歎下駄である。台表と側面に黒漆膜が認められた。前歎に貫通孔 1箇所の補修痕跡がある。

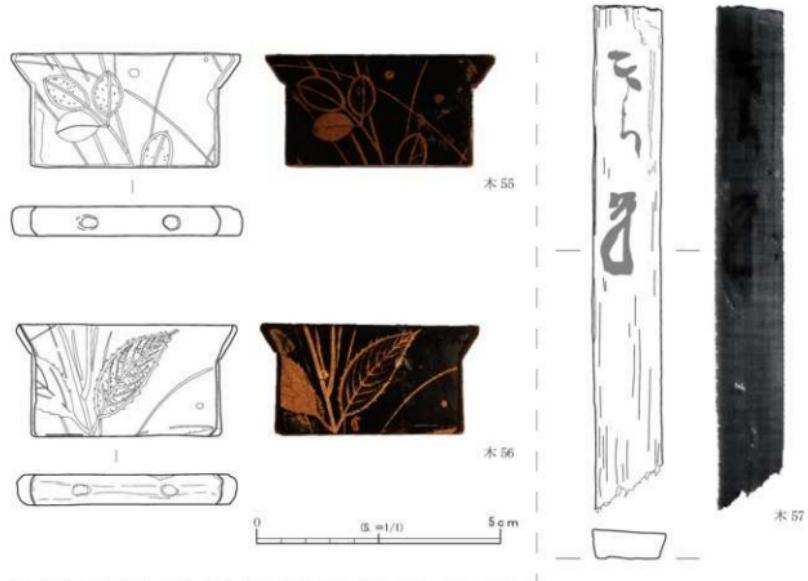
木 128～木 132（第 137 図）木 128 は漆工芸品の板材である。両端面に方形状の突起を成形し、鉄釘・木釘で他部材と組み合せて使用していたと思われる。表面には数条の弧の線を交差させ、その上から不整円形に塗った 2種類の色を配する模様を描く。木 129・木 130 は箸である。木 131 は杓である。約 100cm<sup>3</sup>の容量がある。側板の組み合わせ方一隅のみ異なる。木 132 は蓋である。表裏面に被熱の痕跡がある。裏面の縁を薄く成形して段差を設け、内円を削り出している。



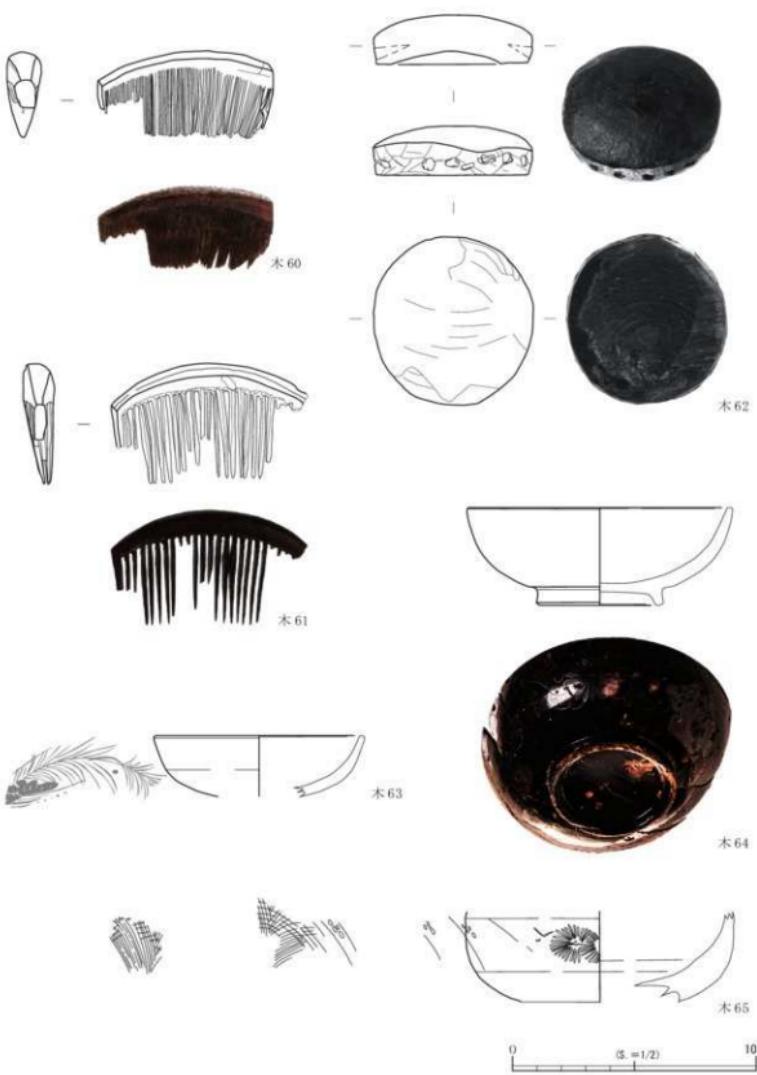
第123図 SD3012・SE3001出土木製品



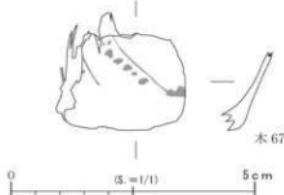
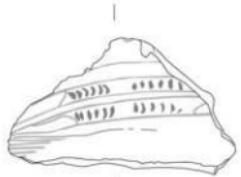
第124図 SX3009出土木製品1



第 125 図 SX3009 出土木製品 2



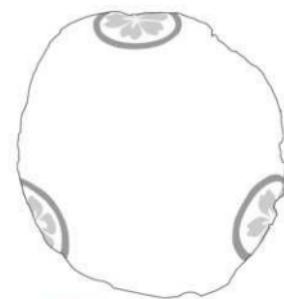
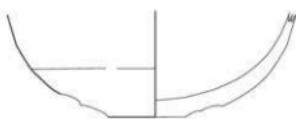
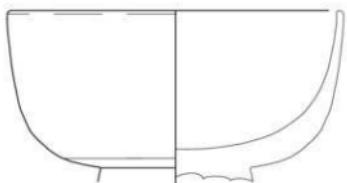
第126図 SX3009出土木製品3



0

(S = 1/1)

5 cm



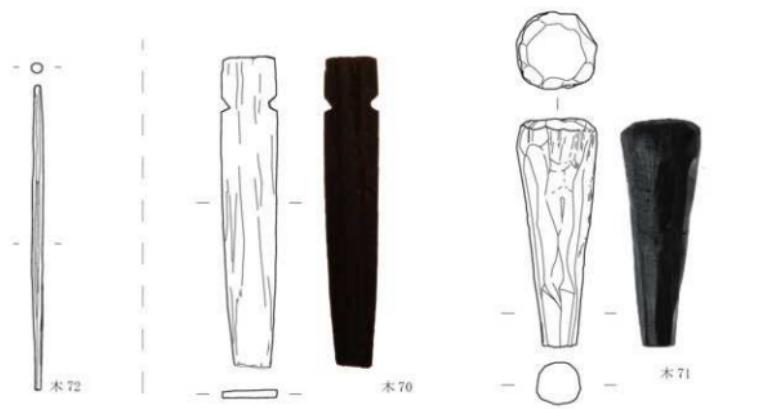
木 68



木 69

0 (S = 1/2) 10 cm

第 127 図 SX3009 出土木製品 4

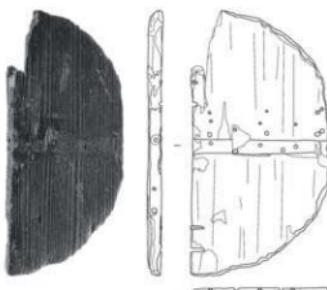


第128図 SX3009出土木製品5

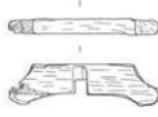
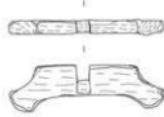


木 79

木 80



木 82



木 81



木 84

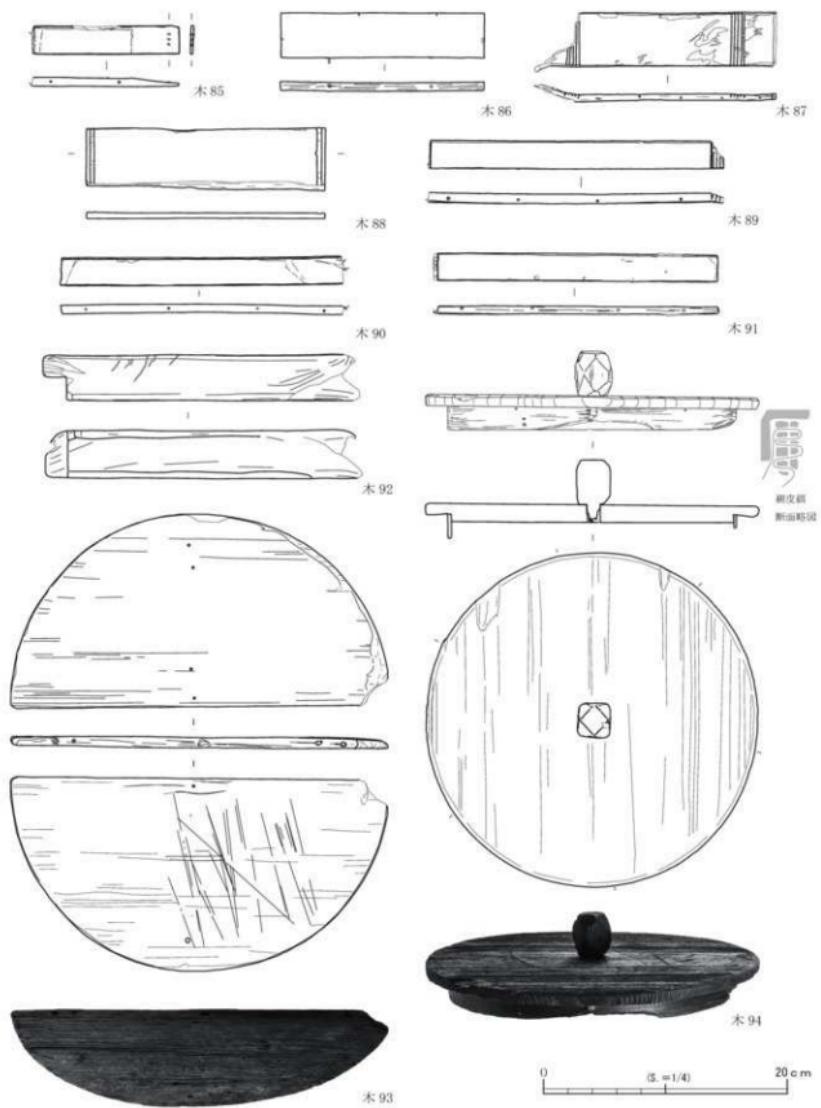


木 83



0 (1/4) 20 cm

第 129 図 SX3009 出土木製品 6



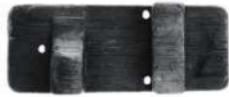
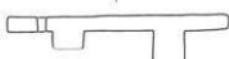
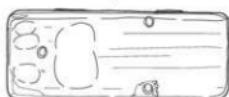
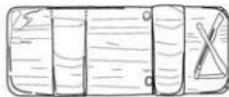
第130図 SX3009出土木製品7



木 95



木 96



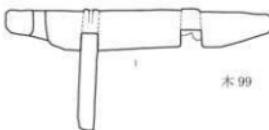
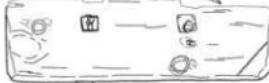
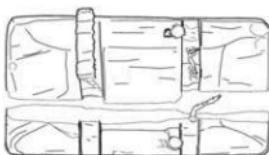
木 97



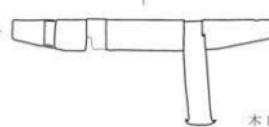
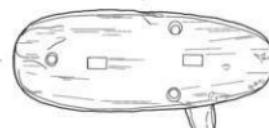
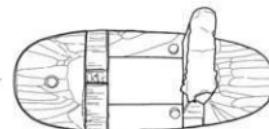
木 98

0 (S=1/4) 20 cm

第 131 図 SX3009 出土木製品 8



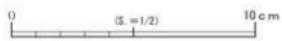
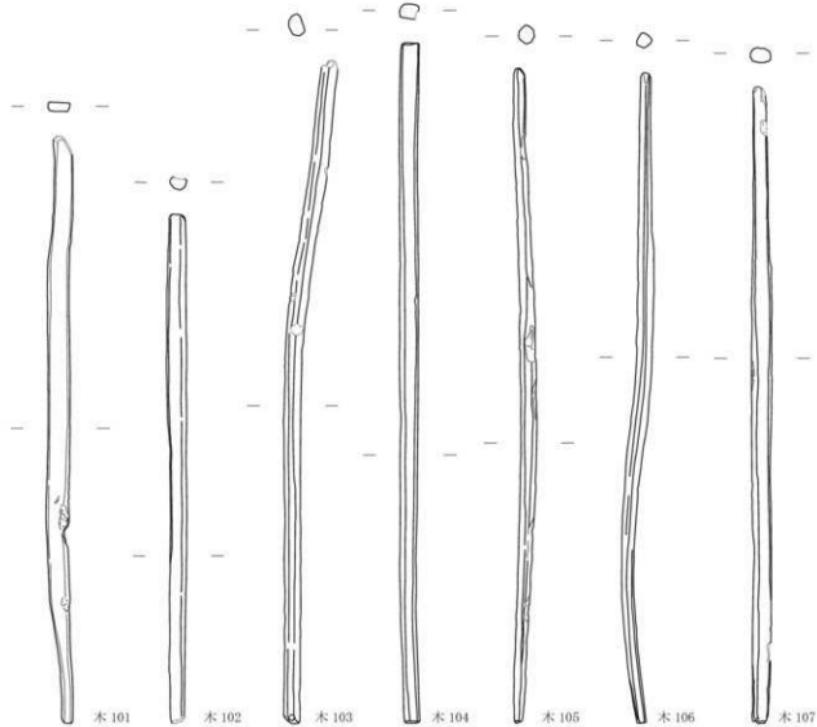
木 99



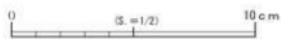
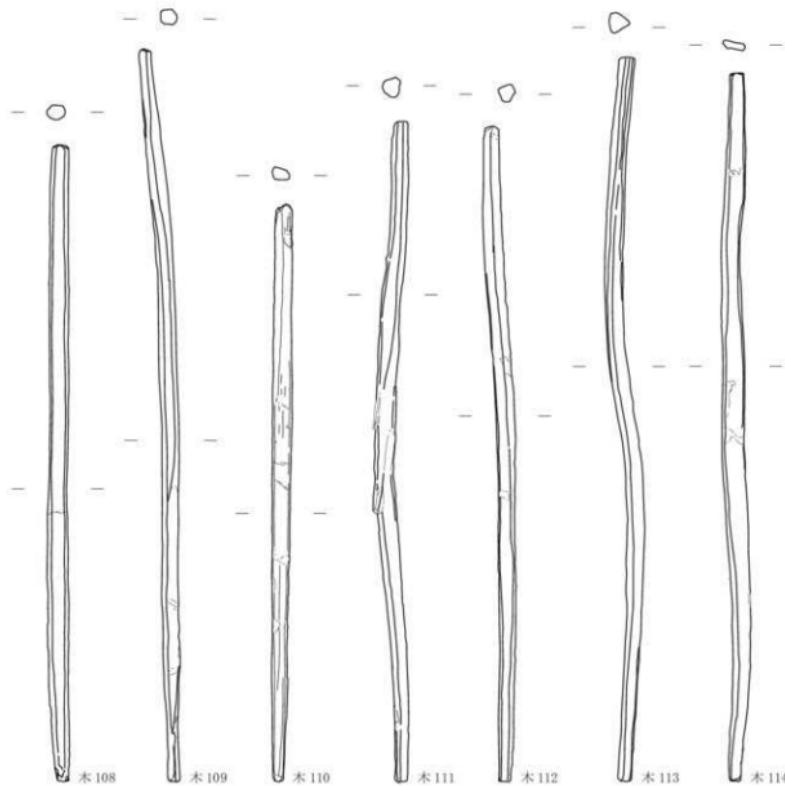
0 (S. = 1/4) 20 cm

木 100

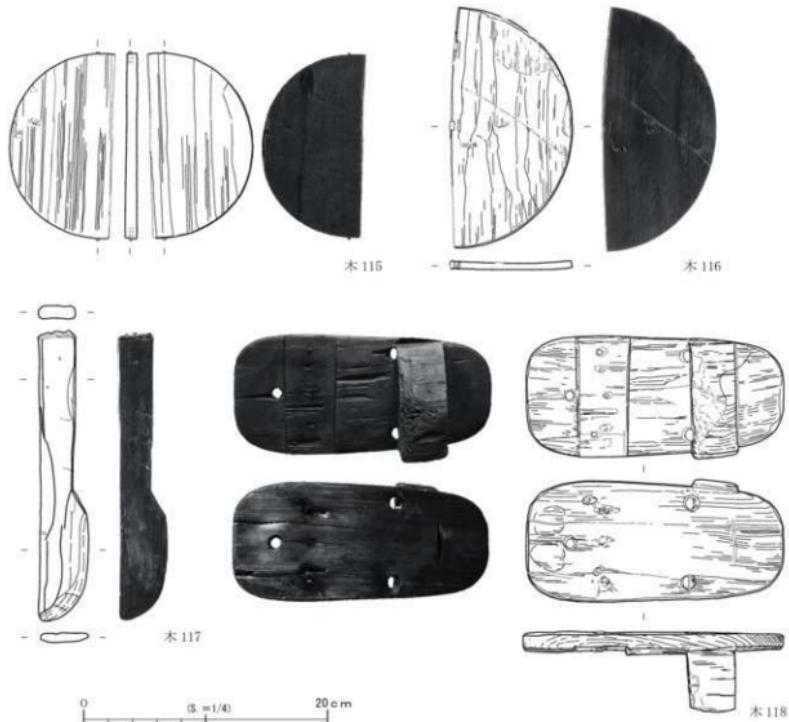
第 132 図 SX3009 出土木製品 9



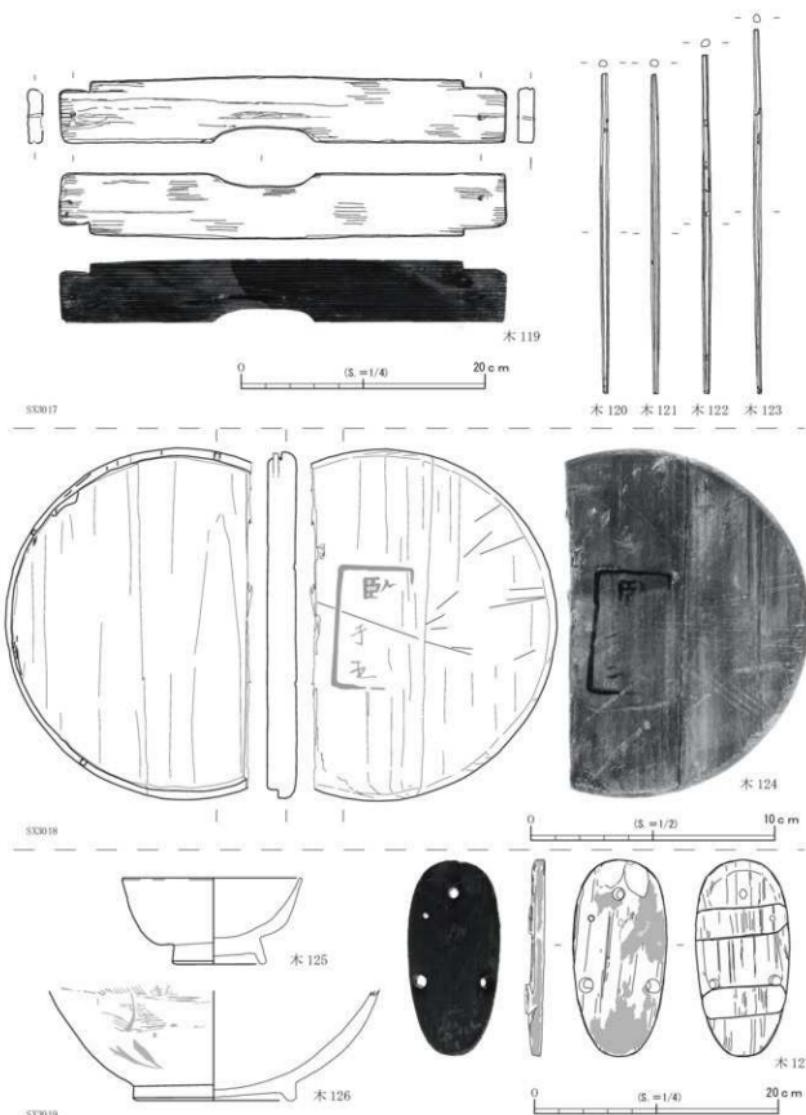
第 133 図 SX3014 出土木製品 1



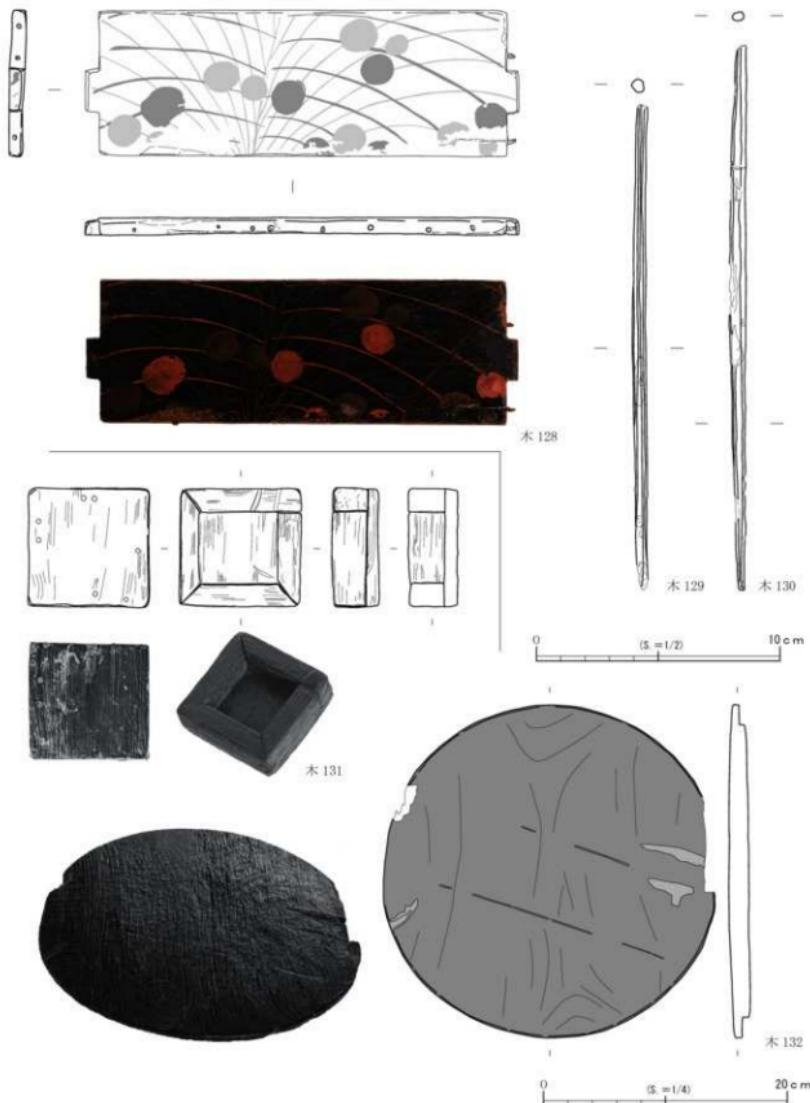
第 134 図 SX3014 出土木製品 2



第135図 SX3014出土木製品3



第136図 SX3017・SX3018・SX3019出土木製品



第137図 SX3027出土木製品